平成25年2月1日発行第10巻第1号通巻80号

二次元ドリームマガジン

『目覚めると』ゲーム&抱き枕情報も載ってるよ!

cover illustration by ひぐちいさみ

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

大好評連載&読み切り小説

話題の新作美少女ゲームを小説化!

ディバインパート ~蠱惑洗脳の罠~

黒井弘騎×KAGEMUSYA
原作:Portion

毎号好評!分岐小説

新居佑×こうきくう

大熊狸喜×池田靖宏
愛枝直×A.S.ヘルメス
二階堂安芸×牡丹
倉田シンジ×こうちゃまる
千夜詠×草草饅
斐芝嘉和×はっとりまさき

今号の特集

魔法少女

大人気えっちマンガ&4コママンガ

「魔法少女沙枝」スピンオフ

魔法少女静流

ひぐちいさみ

新連載

思春期なアダム

天海雪乃

ぱふぇ/助三郎

嘉納あいら

カラーピンナップポスター

うるし原智志

いるまかみり
ひぐちいさみ

表紙&ピンナップテレホンカード応募者全員サービス

水坂早希×りゅうき夕海

別冊付録

小説まるまる一冊付いてくる!

立ち読み版

vol.68
2013 02
DIGITAL EDITION
デジタル版

「ディバインハートマキナ」の続編が登場！
発売直前の注目作を書き下ろし小説でご紹介!!
DIVINE HEART KAREN
ディバインハート カレン
～姦墜洗脳の罠～
小説／NOVEL 黒井弘騎（くろいひろき）
挿絵／ILLUSTRATION KAGEMUSYA
ブランド／BRAND Portion

「お願い、応えてディバインアーク！　ジェネレイト・アークエッジ！」
少女の願いに応え、創世の宝玉が眩い輝きを放つ。アークの力で形作られた光の双剣を手に、光の羽根をはためかせ、少女は鮮やかに宙を舞う。
「っせあああああ――――！」
寝静まり返った都市の夜、闇に輝く幾千もの斬撃。
二本の小剣を振るい、怪人と戦いを繰り広げるのは、妖精と見紛うばかりの可憐な少女だった。
少女の名は成神可憐――またの名を、ディバインハート・カレン。
レクリスシティで暮らすごく普通の女学生だった彼女は、しかしある日、日常の陰に潜む恐ろしい邪悪と相対することになってしまった。
世界征服を目論む悪の秘密結社『ミレニアム』。街で頻発する猟奇事件や奇怪な都市伝説の正体は、組織の生み出した怪人による暴挙だったのだ。
そして、闇に潜む悪意が可憐とその友人に牙を剥いた時、彼女は一人の女神にその身を救われた。
ディバインハート・マキナ――ミレニアムによって生み出された悲劇の改造人間でありながら、熱き人の心をもって悪と戦い続ける反逆の女神。彼女の手により救われた可憐だったが、その代償として、マキナは犠牲となり組織に拐かされてしまう。
だが、希望は失われてはいなかった。
ミレニアムに唯一対抗できる力、創世の宝玉ディバインアークは、可憐へと継承されていたのだ。
優しすぎる少女はその事実に戸惑い苦悩しながらも、大切なものを守るために戦いを決意した。
女神の気高き心を継いだ、新たなる正義のヒロイン、ディバインハート・カレンとして。
「ふふ、流石はアークの継承者……だけど残念、このぐらいじゃ僕たちｔｙｐｅ－Ｄは倒せない！」
嵐の如き斬撃を受けながらも、怪人は無数の触手を蠢かし、おぞましい笑みを浮かべていた。
秘密結社ミレニアムが作り出した改造人間『スレイブノイド』。新型のｔｙｐｅ－Ｄは、素体となった人間の欲望をパワーソースとしており、従来の怪人よりも大幅な強化がなされた超怪人だ。
今回のカレンの相手は、腔腸生物ヒドラの能力を有するヒドラスレイブ。全身から生え出た無数の触手を自在に操り、凄まじい再生能力ですぐさまダメージを回復してしまう厄介な相手だった。
「……でもっ！」
そんな強敵を前に、しかし少女は一歩も退かない。
少し前までは、普通の女の子に過ぎなかった。どちらかと言えば控えめで、友達思いの優しい少女には、命をかけた闘争などまるで縁がなかった。
だが、その優しさゆえに、彼女は誰よりも固い決意を持って変身ったのだ。
大切な者を、かけがえのない日常を守るため。
そして、自分の命を救ってくれた、勇気をくれた女神を救い出すために――。
「諦めない……わたしは、絶対に負けません！」
澄んだ瞳に輝く、揺るぎない意志の力。人の心に応え、ディバインアークが無限の力を発揮する！
「ディバンアーク・フルドライブ！　いきます！ムーンライト・アグレッション！」
マキナから受け継いだ創世の宝玉が、少女の胸で蒼く輝く。噴き出すエネルギーが蝶の羽根となって噴出し、疾風迅雷の速度で双剣が舞う。
その美しさは月下に舞う妖精の如く――。
その攻勢はすべてをなぎ倒す暴嵐の如し！
「は、速い!?　再生が間に合わ……ぎゃああ！」
「これで終わりです、ミレニアムの改造人間！」
どれほどの再生能力を持っているとしても、五体をバラバラにされては回復のしようもない。
戦いは、正義の女神の勝利で幕を閉じた。

「なかなかやるようになったじゃない、カレリン♪」
「うん。これも、アリアちゃんのおかげだよ！」
雑魚怪人の掃討を終えた、もう一人の変身少女が声をかける。悪魔を思わせる漆黒のアーマーに身を包むツインテールの美少女――来須亜里亜こと、デモニックギア・アリア。囚われたマキナの妹であり、ともにミレニアムと戦う正義のヒロインだ。
マキナ敗北の遠因となった可憐と最初は衝突していたが、戦いの中でお互いに理解し合い、今では公私ともに彼女の良きパートナーとなっている。
「でも……わたし、もっと強くならないと。マキナさんを助け出すために、もっと、もっと！」
この街のどこかに囚われたままのマキナは、今この時にも、ミレニアムによる激しい陵虐を味わわされているに違いない。一刻も早く助けださなければ――その想いは、アリアもカレンも同じだった。
「そうだね。頼りにしてるよ、カレリン♪」
「うん！　一緒に頑張ろうね、アリアちゃん」
決意を新たにする二人の少女。戦いを終え、変身を解こうとした、その瞬間――。
「くふふふ……残念。隙だらけだよぉ二人とも！」
『!?』
不気味に響く声は、先ほど倒した怪人のもの――。そう認識した時には、もう遅かった。
にゅる、にゅるるるるるっ！
「きゃあああっ!?　な、何!?」
「く！　こ、こいつ、まだ生きてたの!?」
腕に、脚に、腰に胸に全身に――無数の触手が絡みつく。パワーを解除した一瞬の隙に、二人のヒロインは一気に全身を拘束されてしまっていた。
絡みついた触手の正体は、バラバラに切り刻まれたヒドラスレイブの肉片。それぞれが驚異的な生命力で再生し、無数の肉蟲となって襲いかかったのだ。
「ふふふ、油断したね。言ったでしょ、僕はそう簡

単には倒せないってね！」
「くっ！　だ、だったらもう一度……！」
「ははは甘いね、戦いにもう一度はないよ！」
ぶしゃ、ぶしゃああっ！　蠢く触手から、一斉に白濁した粘液が噴出された。ねっとりと粘る粘液が、アーマーの隙間から直接肌に擦り込まれていく。
「うぁっ、な、何これ……あ、あ、ああっ!?」
ぬるぬると肌に粘りつくお触感に、生理的嫌悪を煽られる。思わず嫌悪の声を零すカレンだったが、生体兵器の分泌液はその効能を発揮していた。
「うっ……な、何？　か、身体が痺れて……ち、力が……入らない……!?」
「っち！　何よこんなの……っくぅう、うう～！」
淫猥に蠢きスーツの内側にまで潜り込もうとしてくる肉蟲を、必死で引き剥がそうとするカレンとアリア。だが指先にもまるで力が込められず、蠢く触手を掴んでもぬるぬると擦るだけで精一杯だ。
「ダメダメ、アーマーの防御を解いた瞬間に直接毒を食らったんだ。流石の君たちでも効いちゃうよ。それに、こいつの効果は麻痺だけじゃないよ？」
「な、何を……ふぅ、あ、ああっ……」
生物兵器の毒効は、ただ肉体の自由を奪うだけではなかった。じんじんと身体が熱くなり、淫らに熱を持って疼き出す。甘い疼きに意識を持っていかれ、余計に力が抜けてしまって抵抗できない。
「いや……か、身体が熱くなって……あ、ああ。こ、これ……媚薬……くぅうん！」
多くのスレイブノイドが備える、女体を狂わせる淫靡な媚毒。もともと毒性生物を素体としたヒドラスレイブのそれは、殊更に強力だった。
「く、ああっ！　ダメ、こ、これは……あ、あ！」
加速度的に熱を増す肉体。蠢く触手に愛撫されるのが、おぞましいのに心地良い――。
「さて、よくもこんな姿になるまでやってくれたね。このお礼はさせてもらうよ……ふふふ。そのムチムチと肉をつけたエッチな身体で、たっぷりとねぇ」
「い、いや！　わたし、そ、そんな……ああん！」
欲情を隠しもしない淫らな宣告に、純情な少女はかっと頬を赤らめる。だが恥じらう暇さえ許されず、無数の触手が一気に動きを激しくした。媚薬粘液をたっぷりと擦り込みながら、アーマーの隙間に潜り込み、柔らかな両乳に、あるいは豊満なヒップに絡み付き、むにゅむにゅと肉を撓ませ揉みしだく。
「や……ふ、うううっ！　いきなり、そ、そんなとこ……はあ、く、ううぅん！」
「うは、胸もお尻もムッチムチだ。可愛い顔してすごい身体してるねぇカレンちゃんは。正義の変身コスチュームの下にこんなはしたないモノ隠してたなんて、純情そうな顔してえっちな女の子だねぇ！」
「や……そ、そんな！　違います、わ、わたしはそんな……ふああ、あ、あああぁ～！」
ぬるん、にゅるんにゅるんにゅるん！　否定の声をあげようとした瞬間、触手たちの動きが淫らに加速した。胸部では何本もの触手がアーマーに潜り込み、豊満な乳房を根本から絞りあげられる。さらには両乳の間にも極太の触手が潜り込み、そのまま激しく上下にピストン運動して乳肉の柔らかさを貪った。
「おお、すごい！　大きいだけじゃなくて蕩けそうに柔らかくって、しっとり張りがあるのに吸い付いてきて。このエロ乳、今まで相当色んな男に揉まれて育ててもらったんだね、ね、そうなんでしょ？」
「や……そ、そんな！　それは、あ、貴方たちが無理やり……はぁだめです、む、胸ばっか……ぁ！」
執拗な揉み込みでおっぱいを揉み続けられ、同時に恥ずかしい言葉責めで追及される。恥辱と乳悦とがごちゃまぜになり、もはやまともに反論も出来なかった。純情な童顔を真っ赤に染め、カレンはいやいやと首を振って懊悩する。
（そんな……わたしだって、好きでこんなにえっちなおっぱいになったわけじゃ……！）
言葉に出来ない声で、心の中だけでも必死に反論する。隠れトランジスタグラマーの可憐だが、戦いの中で欲情の塊である怪人たちはその豊満な媚肉を見逃しはしなかった。もともとアーマーから零れそうなほどに豊満だった美巨乳は、特に怪人たちにとって垂涎の的だった。見るからに男好きのする巨乳は敗北のたびに執拗に可愛がられ、今では自分でも持て余してしまうほどに開発されてしまっている。
ただでさえ感じやすすぎる弱点を、濃厚極まる媚薬で発情させられたうえ、汗で蒸れたアーマーの中で無数の触手に執拗に揉み込まれ続けたら――。
「ああ……い、いやっ！　胸はだめです、む、胸ばっかりしつこくされたら……ふああ、あ、ああ～！」
耐え難い乳悦に、たまらず甘い声をあげてしまう変身ヒロイン。窮屈なアーマー内部でもくっきりと勃起してしまった淫乱乳首に、クラゲの傘のように変形した肉触手が大きく口を開けて吸い付いた。
「ひ、あ、ああっ!?　だめ、ち、乳首直接なんて……ふあああ、あ、ああぁ～！」
じゅる、じゅるっじゅるじゅる！　粘膜質な肉口でシゴかれながら、凄まじい勢いで乳首を吸いまくられる。たまらない切なさに悶絶する少女だったが、吸引責めで感じるのは単純な肉悦だけではなかった。
「うああ、な、何これ……は、ああっ。ち、力が抜けて……ふあ、あ、ああ……!?」
乳首をちゅうちゅうと吸われるたび、抗えない虚脱感に襲われる。これでは、まるで――。
「い、いけないカレン、気をしっかり持つのよ！　こいつ、わたしたちのエネルギーを……うああ！」
「！　アリアちゃん……ひ、あ、あああぁ～！」
やはり、感じた通りだった。このおぞましい肉口

は、ただ媚肉を貪るだけなく、同時にアークのパワーまでもを吸引しているのだ。
触手に拘束されたアリアもまた同様に乳首を吸いたてられ、エネルギー吸引の魔悦に懊悩していた。
「う～ん、エナジーは美味しいけど胸は小さくて飲みにくいなぁ。その点カレンちゃんのは最高だね、こんなに大きなおっぱいから吸えるなんて……はは、少しは後輩を見習ったらどうだい貧乳ちゃん？」
「ふ、くぅう！　何よこの下衆、大きなお世話だっていうのよ……うああ、ま、また吸われ……！」
「ああ、ア、アリアちゃん……ひぃぃぅっわたしも、お、おっぱい吸わないで、こんな……あぁぁ～！」
何もかもを奪われるような破滅的な脱力感は、妖しくも甘い被虐の快感を伴うものだった。乳首を吸いまくられる肉体的な刺激だけでなく、直接エネルギーを吸引される異常な快感までもが加わり、気も狂わんばかりの魔悦となって押し寄せる。
（だ、だめ……こんなの知らない。エネルギーを吸われるの……こ、こんなにすごいなんて……ぇ！）
初めて味わうエネルギー吸引の快感に、抗うすべもわからず感じ入るしかないカレン。力を奪われた事でアークの出力も弱まり、強度を保てなくなったアーマーが触手によって引き剥がされてしまう。
「やっ……ぁ。い、いや……ああっ！」
これまで窮屈に締め付けられていた両巨乳が、ぶるんっ、と躍りながらまろび出す。羞恥心に顔を赤らめて隠そうとするカレンだったが、両手を触手に拘束されてはそんな恥じらいさえ許されなかった。
「おお、こうして直接目にすると殊更にすごいねぇ。こんなにはしたないサイズなのにまるで崩れていない。はは、男を喜ばせる最高のエロ巨乳じゃん！」
「やあ、そ、そんなふうに言わないでください、こんなの恥ずかし……ふぁぁ、ま、また吸われ…！」
じゅる、にゅるっじゅるにゅるじゅる！　防御を失った両巨乳を、ここぞとばかりに責め立てられた。触手たちに根本から締め上げられ、乳牛にするようにぎゅうぎゅうと搾られながら、勃起した乳首を吸いまくられる――媚薬まみれにされて感じやすすぎる弱点に対し、あまりに苛烈すぎる搾乳責め。さしもの少女戦士も、もう耐えることなどできなった。
「ああぁ、だめぇ！　お、おっぱい揉みながら吸うなんて……はぁぁっだめです、こ、こんなにされたら……あはぁ、お、おっぱい……イクぅぅ～！」
「あ、ああっ！　ダメよカレン、気をしっかり持つのよ……イ、イッたら一気にエネルギー吸われちゃうのに……ひぃい、わ、わたしも……だめぇぇ！」
快感によって集中力を散らされ、力が込められなくなったところでエネルギーを吸われてイカされた。絶頂して防御力を減じた瞬間にさらに吸引され、休む間もなく触手愛撫と吸引で追い討ちされる。
「イッ……っぐ、う、うう～！　やあぁ、ま、まだ吸われてる……ま、まだイキ終わってないのに、イってる最中にこんな……はぁぁ、す、すごいぃ～！」
「ああ、アリアちゃん……ひぃっまたおっぱい激しいの、吸わないでぇ、イ、イってる最中にまた吸われたら……またイク、またイっちゃうぅぅ～！」
絶頂するたびエネルギーを吸引され、耐えるための力さえ奪われていく。剥き出しに晒された巨乳をぶるんぶるんと揺さぶりながら、あさましくイキ狂う敗北の戦士。イキっぱなしのおっぱいを根本から搾られながらエネルギーを貪り飲まれ、アクメの快感とエネルギー吸引の虚脱感がまるで終わらない。
「ま、またイク……ふ、く、ああぁ！　いやぁ、おっぱいイキっぱなし……うあぁぁっこれだめ、エネルギー吸われるの……すごすぎる……うぅ～！」
ただでさえ快楽に従順すぎる淫乱巨乳は、すっかり吸引アクメの虜になってしまっていた。吸われてイクのがクセになってしまい、抗おうと思っても胸が勝手にイってしまって連続アクメが終わらない。
「だ、ダメ……イったらもっと吸われちゃうのに……んあぁっ耐えられない、ま、またイク……うぅ！」
「はは、また胸でイったね。エネルギーがどんどん流れ込んでくる……おお、すごいパワーだ！」
食欲に吸引を続けていた触手たちが、ビクビクと逞しく脈動する。無数の肉蟲たちはみるみる人間大にまで肥大化し、凄まじい生命力でそれぞれが一個のヒドラスレイブとして完全に再生していく。
『くふふ、君たちの美味しいエネルギーのお陰で、僕は……いや僕達はこの通り完全復活できたよ！』
「な……そ、そんな……！」
バラバラに切断した肉片から触手となって再生しただけではなく、その全てが怪人として復活した。その総数は、十や二十ではきかない。対して二人はエネルギーを吸収しつくされ、戦うどころか快楽に耐えることすら出来ないのだ。あまりに絶望的な状況に、少女は悲痛なうめきをあげるしか無かった。
『さぁて、肉体も戻ったところで、さっそくお楽しみと行こうかな。イキっぱなしのお■んこ、僕達のこれでズブズブされて犯されたいでしょ？』
無数のヒドラスレイブが、それぞれ勃起したペニスを突き立てた。触手まみれの怪物的な異形根が、容赦なく二人の肉穴へと埋め込まれていく。
「ひっ……そ、そんな！　ダメよ、そ、そんなので今犯されたら……っひ、あ、あああぁ！」
「うあ、ア、アリアちゃん……ひぐぅう、ふ、太い……うああ、お、お尻も一緒なんて……ぇぇ！」
ズブ、ズブブブブ！　もはや抵抗する力を完全に失った少女に、怪人たちが容赦なく襲いかかる。異形のペニスで前後から肉穴を貫かれ、悲鳴をあげる間すら与えられず激しいピストンで責め抜かれた。
「は、あっ、ぐ、ううう！　こ、この……抜きなさいよ、こ、こんな汚いもの……うあ、あ、ああ！」

Kissing for my stray dog with everlasting promise.
捨て犬少女に誓いのキスを
第三話 捨てませんか？
小説 NOVEL 愛枝直（あいえだなお）
挿絵 ILLUSTRATION A.S.ヘルメス
打ち解け、束の間の休息を楽しむニコと姉弟。
しかし、敵はまだ諦めていない――。

ぱたんと本が閉じられ、ニコがうっとりと溜め息をつく。

「ふわぁ……マンガって……マンガって……面白いんですねぇっ」

そして、小学生並に中身のない感想を宣った。

少女を愛玩犬か何かのように膝に乗せ、ページを繰っていた姉の悠里が、あらあら～といつも通りの感嘆詞を口にしておっとりと笑う。

「『俺の物になれ！〝はい〟はっ？』……なぁんて迫られたら、思わず『はい』って答えちゃいますよねぇ」

「そうねぇ～。真っ赤な顔でお返事するヒロインの女の子、とっても可愛かったわねぇ」

造った声で作中の台詞を再現しているらしいニコにやはり姉が楽しげに応じる。着目点が盛大にすれ違っている気がしたが、あえて指摘はすまい。

ジェイミー＝コーラルクラフトとそのスレイブ、サンゴからの襲撃を受けて、高崎家の平穏な日常は崩れ去った。消息不明であった父親、高崎悠堅の使いだというニコに窮状を救われた後、高崎堅悟はやむにやまれずスレイブとなった姉の〝所有者〟になった。

目の前には、昨日の混沌が夢だったのではと思えるような平和な光景が広がっているが、蠱惑的な桃色に染まった姉の髪色と、細い首にかかる重たげな革錠が少年に現実逃避を許さない。

三人揃って悠里の部屋にいる。堅悟もグレイのカーゴパンツに紺のポロシャツの私服姿。幸いというべきか今日は土曜日で、生活に支障が出ることは免れた。

円テーブルの上には一昔前に流行ってドラマ化された少女コミックが、十冊ほどセットで積まれていた。棚に挿されていたそれにニコがちらちらと視線を送り、察した悠里が少女をふん捕まえ、読書会が始まった次第である。

一緒に風呂に入り、一緒のベッドで寝たそうだ。堅悟が癇癪を起こして引きこもっている間にずいぶんと打ち解けたらしい。

正直なところ、非常に気まずい。そもそも姉の部屋に用もなく入ること自体褒められた話ではないのに、加えて昨晩はあの醜態だ。

だが、あの金髪達がいつ来るか分からないとなれば離れているのは得策ではない。朝一番で頭を下げ、ちくちくと自業自得の疎外感に刺されながら同じ空間に居着いていた。

堅悟の内心を知ってか知らずか、二人は盛大にいちゃついている。さっそく二冊目を取って続きに興じていた。キラキラした目でニコがコマを追い、悠里が頃合いを見てページを繰る。まるで仲の良い姉妹のようだった。

姉さんに関しては多分に意識的な面があるだろう。

要するに、なにかときつい調子で少女を問い詰めようとする堅悟からの防波堤である。謝罪が反省ではなく必要性が出自なことも恐らくばれている。基本的にこの人は何でもお見通しなのだ。

ニコに対して平静でいられないことは、自分でも分かっていた。姉さんの時間と距離を置いて冷静になれという無言のメッセージは、ぐうの音も出ないほどの正論だ。

『またあいつらが来た時はどうするんだ？』読書会の始まる前に一応それだけは聞いておいた。ニコは『わたしは強いから大丈夫です。絶対二人をお守りします』と請け負った。今はその言葉を信じるしかない。

リリリリリ――と。

物思いに沈んでいると、昔の固定電話を模した着信音が鳴った。

「はいは～い。ニコちゃん、ちょっとごめんね～」

「あっ。すぐどきますねっ」

姉さんはなぜかいつも呼出に向けて返事をする。膝の上からニコを降ろし、ベッドの枕元に置いた携帯を手に取る。

「もしもし～――あら～理事長先生、お疲れ様です～」

どうやら勤め先からの連絡らしい、少し首を横に倒して耳に端末を当て、悠里は『まぁ』『はい～』などと先方に返事をする。

その表情が、少しずつ曇っていった。

「はい……はい……分かりました～。すぐ向かいます～……あらあら、どうしましょ～」

努めて声音には出さず通話を終えるものの、切断ボタンを押した悠里は、形の良い眉を寄せて困ったように溜め息をついた。

「どうしても見つからない資料があるから、出てきて欲しいんですって～」

「だ、ダメですよぅ！」

「そうよねぇ……先に髪染めをしないと。不良さん

登場人物紹介

ニコ

姉弟の父・高崎悠堅のスレイブ。悠堅の命令で、姉弟を守るためにやってきた。鎚を振るい敵を圧倒する力を持っている。

高崎悠里・堅悟

父が失踪してから、お互い支えあって生きてきた姉弟。死の危機を回避するため、実の姉弟で主従の契約を結んだ。

ジェイミー＝コーラルクラフト・サンゴ

「ラボラトリ」に所属する研究員とそのスレイブ。悠堅を追う手掛かりを得るため、姉弟を襲撃した。

前号までのあらすじ

姉弟の父・悠堅を追う「ラボラトリ」の研究員・ジェイミーのスレイブとされてしまった悠里は、ジェイミーから力を供給されず、窮地に立たされてしまう。堅悟は敵から姉を取り戻し、救う為――姉を犯し、寝取るのだった。

だと思われちゃうわ～」
ニコが血相を変えて諌める。当たり前の話だ。だがこの人らしいというべきか、くるくると桃色の髪を指先に絡めながら口にした心配事は、何とものんびりしたものだった。
「姉さん、そういう問題じゃない」
悠里の天然にまだ慣れておらずポカンとするニコに代わり、堅悟が冷静にツッコミを入れる。
確かに少女の言う通り、狙われているのが分かっていながら単独行動をとるなど自殺行為も同然である。
――ただし単線的に考えればだ。
「なぁ、ニコ。スレイブになる以前から接触のあった人間には変化が認識されるとか、あるのか？」
「いっいえっ。もともと鍵に関わりがあるか、堅悟さんみたいに直接契約するところを見たんじゃなければ……ってそういうことじゃなくてですねっ」
当然堅悟も止める物と思っていたのだろう。まるで仕事先に向かった後のことを案じるような言葉に、少女は両手をパタパタさせて慌てだす。
脳裏に、先日のニコの姿が浮かぶ。傷だらけの手で鎚を振るう姿が。祈るように携帯を耳に当てる、幼い自分をリピート再生したような姿が。
堅悟の目には今、大まかに二つの選択肢が映っている。収支の天秤はあからさまなほど傾き、もはや選ぶまでもないように見える。理由は明快。大切な、守るべき人はただ一人姉さんだけ。
――なら、心臓を鷲掴みにされたような、この重たい迷いは何だ？
少年は黙り込む。その感情が『罪悪感』という適切な名を得ることを周到に避けるために。そしてしばらくして後、逃避じみた決心をもって――。
「そうか。……ニコ、買い物行くからちょっとつきあえよ」
出し抜けに誘いかけた。

☆

ニコがあらかじめ例の二人組が潜んでいないことを確かめ、三人揃って家を出た。悠里がタクシーを使って学園に向かうのを見送り、堅悟達は駅におもむいた。
空は薄曇り陽射しは弱いが、空気は生ぬるい。歩いていると、出がけに羽織ったジャケットに邪魔くさく熱がこもった。
二人分の切符を買って、一枚をニコに渡す。慣れていないのか、少女はおっかなびっくりで改札口に乗車券を近づける。食われた瞬間ひゃあと悲鳴を上げて飛び上がった。
先んじてゲートをくぐり待っていた堅悟に、照れ笑いを浮かべながらニコは歩み寄る。高架を伝いホームに立つと、そう待たず電車は来た。
昼下がりの車内はほどよく空いており、楽に座ることが出来た。ニコは落ち着かない様子で――というよりうずうずした様子で、ちらちらと背中側の窓を覗いている。
「おとなしくしてろよ」
まるで小さな子供のような振る舞いに、堅悟は苦笑しながら窘める。ニコはしばしきょとんと目を丸くした後――。
「――はいっ」
一体どういった理由なのか、幸せそうに目を細めて返事をした。
ずきんと胸が痛む。疼きを握りつぶすように堅悟はあえてまた自分に確かめる。お前の唯一大切な人は誰だと。
「なぁ……お前の携帯さ。捨てろって言われなかったか？」
ちんまりとした手を膝の上に揃えて置き、何か優しい思い出にひたるように穏やかな笑みを浮かべていたニコに問いかける。
「ふぇっ、ど、どうして知ってるんですかっ⁉」
すると少女は目をまん丸にして見上げ、驚いた。
出発点は、この少女が携帯を持っているという事実そのものだ。
もし、マスターとスレイブの間でテレパシーのような意思疎通手段が使えるとしたら、そもそもこんなものは必要ない。だとすれば、余所のペアともなればなおさらだろう。
また、ニコは奴らが来たら撃退すると言った。そこに奴らの接近を察知出来るというニュアンスはない。出発前の索敵もその傍証になる。
だが、奴らはニコを待ち伏せすることが出来た。それも、少女がやってくるほんの前に見計らったようにだ。そこには何らかのカラクリがある。
少女の持つ携帯電話はお年寄り向けに操作を簡易にしたもので、子供に持たせるにも人気の機種だった。
そして、発売中にCMで強調されたセールスポイントは――デフォルトでGPS機能が付いているというものだった。
恐らく奴らは、この携帯を通してニコの動静をモニタリングしている。端末を渡したその本人が看過するわけもない。
「なんとなく、な」
「ふえー……やっぱり親子だから、考えてることがわかっちゃう……ってあの、これは変な意味じゃなくってですねっ」
感心のままに思ったことそのままを口にしたニコは、失言と思ったのか焦った様子でフォローを入れようとする。
彼女に残酷な事実を告げ、携帯を破棄するよう迫ることも出来るだろう。だが、堅悟はそうしようと

は思わなかった。
優しさなどではもちろんない。姉さんをあいつらから遠ざける上で、必要なことだったからだ。
まず、ジェイミー達は高崎姉弟の動静を把握してはいない。勤め先を含む個人情報を洗い出し済みとなれば、最大関心事であろう鍵と適合者の存在を今知ったという顔はしないだろう。ならば、追跡されない限り割れている自宅よりも外の方がよほど安全だ。
だが、それだけでは偶発的な接触は避けられない。確実を期すなら奴らを引き付ける必要があった。
やがて、電車は目的の駅に着く。ニコはぴょんとホームに跳んで降り、改札を出る時もさっきと同じようにこわごわと切符を通した。
駅のすぐそばには、農地を平らげて建てたショッピングモールがある。
「ふわぁ……おっきなお店ですねぇ」
こういったところに来るのも初めてなのか、ニコは空に浮かぶような本館ビルを見上げてほぅと溜め息をついた。
歩幅も狭く、小走りになりがちな少女に合わせ、少し歩くペースを落として向かう。
奴らの立場に視点を移して考えた時、一番嫌がる行動は何だろうか？
言うまでもない。なりふり構わず取るもの取らず、高飛びされてしまうのが一番困るに決まっている。もちろん携帯は処分してだ。抑えられているのはニコの動静と自宅だけ。
そのため奴らはニコの所在地が大きく動けば後を追わざるを得ない。
そして――堅悟にしても生活の基盤をなくし、いつ来るともしれぬ襲撃に怯え、あるかないかも分からないあの男の救済を待つ人生などまっぴらごめんだった。
窮屈げに押し並ぶ車の列を横目に、タイル張りの歩道を踏んで正面入口へ向かう。
エントランスを抜けると、ニコは「わぁ」と夢見るような感嘆を漏らした。
ミルフィーユの断面のように二階三階が見渡せる吹き抜けの入口広場は、週末の賑わいに浮き立っていた。
巨大な液晶ディスプレイの案内板を前に何事かを相談する制服姿の少女達。柱にもたれかかりそわそわと携帯を眺める若い男。はしゃいだ子供に袖を引かれてたたらを踏む父親とそれを苦笑して窘める母親。思い思いだが一様に楽しげな表情で、行き過ぎ行き交う喧噪を、ニコは憧憬の眼差しで眺めている。
少年はただ途方に暮れていた。買うべき物も向かうべき場所もどこにもなかった。
あの二人組をおびき出すためだけに、堅悟はここへ来たのだから。
当てもなく二階へ向かう。慌てたようにニコが続く。
「堅悟さん堅悟さんっ、見て下さいっ、本がいっぱいですっ」
行き交う人の波に気圧され歩きづらそうにしながらも、ニコはテナントに入った大規模書店を指さし、はしゃいだ笑顔で堅悟を見上げた。
どれだけ理屈を並べ立てようが、正当化も言い訳も出来ない事実。俺は、こいつを餌に使っている。この幼気な少女を切り捨てようとしている。
「何も訊かないんだな」
「……えへへ。マスターもそうでしたから。『どうして？』って思うような命令でも、言う通りにすれば全部うまくいくんです」
「俺はあいつじゃない」
「でもでもっ、堅悟さんナイス判断ですっ。お姉ちゃんを巻き込まないため、なんですよね」
どこか責任転嫁めいた問いかけが口を突く。
ニコは全てを察していた。少し寂しげに苦笑して答え、まるで気にするなとでも言うようにフォローまでしてみせた。
「それに……ううん。堅悟さんは、建物の外にいて下さい。ここが、戦場になるなら」
そして何かを言いかけて、やめ、昨日我が家に飛び込んできた時のように、丸っこい瞳をキッと吊り上げる。しかし――。
「！」
突如館内を明るく照らしていた灯りが落ちた。

☆

逃げる暇などなく、奴らは来た。建家全体が〝ルーム〟と化したのだ。少女の語った通り、鍵を持つモノとスレイブ以外は存在することすら許されない。客もスタッフも一人残らずいなくなり、週末の賑わいが消え果てた。
だが、異変はそれだけに留まらない。吹き抜け越しに階下から響く――身の毛のよだつ悲鳴。
「なんだっ⁉」
男の声だった。ニコは非常灯だけで保たれた視界でもはっきりと分かるほど顔を強張らせた。
「ルームに入れるのは、マスターか、スレイブか、適合者だけ。……でも、一つだけれいがいがあるんです。普通の人でも、扉を開けるのといっしょにマスターが引きずり込めば……」
「それにどんな意味がある？」
「わたし、聞いたことあります。普通の人にむりやり鍵を挿して契約すると、あんな叫び声を上げるんです」
「どう……なるんだ」
「人の形じゃなくなって、言葉もなくして、マスターのいうことをきくだけの、本当の怪物みたいになっちゃうんです。もう……元には」

著者近刊 『肛辱の令嬢ロレンツァ 淫悦に落ちる乙女の涙』『淫辱学園剣姫 穢される誇りと絆』 好評発売中！

血が凍ったような寒気が堅悟を襲った。確実に〝ルーム〟での戦闘に持ち込み、他者の介在を避けようとした。土地勘があり、広い場所をと欲張ったのが裏目に出た。

「堅悟さん、よく聞いて下さい。わたしはさっきの階段で待ち伏せします。その間にとおくの階段を降りて入口に向かって下さい」

自らの判断が誰かの人生を台無しにしたという重い事実に少年は立ち竦む。

ニコは自ら語っていた通りの場慣れを見せた。いち早く恐慌から復帰すると、急いた口調で堅悟に言い含める。

「入口の扉に鍵を挿して左に二度廻せば、〝ルーム〟から逃げられます。でも、使った鍵は相手が〝ルーム〟を解かないと、新しい〝ルーム〟をつくれなくなるんです。だから――」

そして、携帯をしまったポーチに手を入れ――。

「これを使って下さい」

新たな鍵を取り出した。

「えへへ。マスターはきっとこんな時のために、これを渡してくれたんですね」

「お前……それは……」

そうじゃない。今だけはこの暗闇をありがたく思える。堅悟の顔はくしゃくしゃに歪んでいた。

長らく音信不通だった息子の行動を、そこまでピンポイントで把握出来るわけも、あの金髪が目の色を変えて確保しようとしたほど貴重なものを、そんな限定的な目的のために手放すわけもない。

堅悟が決戦を急いだ理由。先ほど少女が口にしかけた言葉。スレイブはマスターの補給が得られなければ、首輪を遺して消え果てるという。なら、ニコは？

不意に降りた沈黙も、その推論に裏付けを与えた。聞こえるのだ。荒い呼吸を無理に押さえつけたような、くぐもった吐息が。姉さんの時と同じく、〝飢餓反応〟という奴がすでに出ているのだ。

あの男が想定していたのは、こっちだ。家に残した一本は姉さんのため。そしてこの一本は初めからこいつを俺に――。

「だいじょうぶですよぅ。堅悟さんとおねえちゃんのことまもるためなら、わたしなんだってしてみせますからっ」

少年が不安で黙り込んだと勘違いしたのか、ニコはことさらに明るい声を出す。

その言い回しも、おかしい。まるで隙間から、たとえ負けたってという言葉を蹴落としたような――。

堅悟は思いがけずニコの隠された本心を理解してしまった。

こいつも気付いているのだ。渡された鍵の意味を。だからごまかす。分からないふりをする。

あの男への信頼をことさら言いつのり、命令に殉じようとするのは、もうそれしか縋る物がないからだ。なんだってするというのは決意じゃない。自分なんてどうなってもいいという捨て鉢なのだ。

弱いとは思わない。だって仕方がないじゃないか。親のように信じた相手に捨てられたなど、はいそうですかと認められるものか！

闇の中で、見下ろし、見つめる。この少女の言う通り鍵をもらってここから逃げて、その後こいつはどうなる？

飢餓反応が出たらもう永くないと、自分で言ったのだ。勝てるかどうかも怪しいし――たとえ勝てたにしても、ニコがどんな未来を選ぶかは更に怪しく思える。

「あんまりじゃねえか……」

「……けんご、さん？」

自分には姉さんがいた。傷を癒やすだけの時間もあった。こいつにはそのどちらもない。あのイカれた女にねじ伏せられて、偽りの忠誠を誓うのか――それともヒビの走った信頼を後生大事に抱いたまま、殉じてひっそり消え果てるのか。

それではあんまりに――こいつが報われないじゃないか。

「なぁ、この中で俺が独自に〝ルーム〟を造ることは出来るのか？」

「ふぇ!? えっ、えとえと、〝ルーム〟の半分より狭い部屋なら、乗っ取ることができちゃいますけど……けんごさん変なことを考えちゃダメですよっ!? それにむこうにはもう一本鍵があるんですから、それでまた開けられたらおしまいですっ」

突拍子もないことを尋ねる堅悟に、ニコは驚き慌てて忠告する。

「なら――」

再度の問いかけにニコは渋々頷く。堅悟は付いてこい、一階だ、と一声かけて、少女の手を取り走り出した。

☆

ぐちゅ、ぐちゃりと。醜悪な肉の塊がのたうつ。

サンゴの背から生える触手を乱雑な球に固めたようなソレは、不適合スレイブ――人間の残骸だ。

ジェイミーが鍵を廻した相手は、どれも似たような能力、似たような外見の化け物に成り果てる。まるで自分の内実を突きつけられるようで不愉快だが、とにかく戦力が必要だった。

安っぽい背広姿の男だった。特段何の恨みもないが、あえて言うなら私の視界にいたのが悪い。むしろこれからニコを叩きのめして幼い肢体を貪れるのだ。役得と言ってもいいだろう。

「人の匂いがする方へ進みなさい」

独善的な理屈を頭の中で並べ立てながら、ジェイミーは命じる。

憐れなスレイブもどきは前面に伸ばした触手で巨

体を引き摺り、粘液の痕をフロアに残しながら進み出した。

その後をジェイミーが、更に後をサンゴが続く。たどり着いたのはインフォメーションセンターであった。

カウンターの裏に、扉がある。ジェイミーは酷薄に唇を吊り上げた。ノブを廻すが案の定開かない。この空間に〝ルーム〟を造ったのだ。

「所詮は素人ね」

白衣の女は嘯くと、鍵を取り、左に二度廻す。乗っ取り部屋の支配権は取り返せないが、侵入は出来る。容易く封印は解錠された。

急に大きく動かれた時には焦ったが、何のことはない。暢気にお買い物ときたものだ。多少悪知恵が働いてもぬるま湯に慣れた学生でしかない。

扉が開く。

しかし、暴かれた空間に二人はいなかった。館内放送のための放送ブースが佇むのみだ。その奥には扉がもう一つ——迷子預かり所である。ノブを捻る。開かない。

「あの餓鬼ぃッ」

ジェイミーは毒づいて、長い脚で壁に蹴りをくれた。

二重ルームだ。すでに鍵の異界化を施した空間に、扉で隔てられた空間がある場合、もう一本鍵があればそこを更に封印することが出来る。

なぜそんなことを知っている。いやそれ以前に、なぜ二本目の鍵を高崎の息子が持っている？　そこまで考えてジェイミーは最悪の可能性に行き当たる。

あの餓鬼、ニコを〝寝取る〟気だ。

怜悧な美貌から血の気が引いた。十分な魔力の供給を得たニコと正面からぶつかる。それを悪夢以外に何と呼べばいい？

スレイブは時折、超人的な身体能力や肉体変化に留まらない特殊な能力を得るコトがある。莫大な魔力の消費と引き替えに発動するそれらは、時に鍵のルールすらねじ曲げる。

先日ジェイミーの支配域と化した高崎邸に、ニコが入ってこれたのもそのためだ。〝ガイウスの破城鎚〟——ルームの扉を押し破る力である。更に忌々しいことに、奴の能力はそれだけに留まらない。

もう一つの力を、〝マクスウェルの銀鎚〟という。敵の背後に瞬間移動し、あのスレッジハンマーを振り下ろすという、安直で、暴力的で、その分対処不能の巫山戯た力だ。

スレイブはともかくマスターはただの人間だ。あんなもので後頭部を殴られれば、言うまでもなく即死である。結界が解ければ損傷はなかったことになるが、命は戻らない。マスターが死ぬとスレイブは消え失せる。結果そこに残るのは、死因不明の傷一つない変死体だけだ。

引くべきだろうか。ジェイミーは白衣の胸ポケットから煙草を取り出して震える手で火をつけ、短い呼吸で気忙しく紫煙を吸い込みながら思索する。

だが引いてどうする。何の成果もなく組織に逃げ帰っても足場は更に細るだけ。いや諦めるのはまだ早い。たとえ息子でも他人は他人。出会ってたった一日の相手と契って銀鎚が使えるほどの魔力など生まれるものか。

それに、マスターが変わってそのままの能力が引き継がれるとは限らない。ならば定石に従うべき——すなわち、新造ペアは早めに叩けだ。

「出てきたところをやるわ」

狼狽の物証じみた紙巻きをジェイミーは忌々しげに投げ捨てた。端的に指示を飛ばし、サンゴを見下ろした。

この子に、特別な力は何もない。

「あんたが破城鎚でも使えれば、すぐに片が付いたのにね」

冷たい声音で残酷極まりない謗言を浴びせる。身を竦ませたサンゴは無言のまま、ただ目を伏せてきゅっと手を握り込んだ。

☆

「どうするんですか！　確かにむこうも入ってこれないですけど、ここからでてくこともできなくなっちゃいましたよっ⁉」

非常灯の緑がかった光が照らす狭い部屋で二人は向かい合う。

ニコが甲高い声で堅悟を問い詰めた。少年は答えない。

生きて二人、ここから出る。そのためにはもうこいつと契約するしかなくなった。

まず越えなければならない最初で最大の壁は——この少女を説得することだ。

「ニコ……俺と契約しろ」

堅悟は一つ深呼吸をすると、真剣な瞳で少女を見つめ、迫る。ニコは飛び上がりそうなほど驚き、慌てだした。

「な、な、なにいってるんですかなにいってるかわかってるんですか⁉　け、け、けいやくですよ⁉　え、えっち！　けんごさんのえっち！」

予想外の切り口に堅悟の顔も赤くなる。客観的な状況だけを抜き出せば、今の自分は年端もいかない少女を閉じ込めて情事を迫る変態野郎ということになる。

だが、そんなもの知ったことか。この暗さなら悟られることもあるまいと自分に言い聞かせ気を落ち着かせる。

「もちろん分かってるさ。分かって言ってる。ニコ、お前は、俺の物になれ」

「そ、そそんなかっこよく言ってもダメなものはダメですっ。だいたいなんですか、なんできゅうにそ

んなこといいだすんですか、わけがわかりませんっ」
身をちぢこめて目を伏せて、ニコは早口で文句を並べた。その声が細かく震えるのは、ただ動揺しているだけか自分を偽る負い目のためか。
「嘘を、つくなよ。お前が一番分かってるはずだ。自分がこのままじゃ持たないって」
どちらにせよ、認めさせなくてはならない。こいつが必死で目をそらしている、残酷な現実を。
確信を持って言いきった堅悟に、ニコは言葉を詰まらせた。見た目まんまに、嘘のつけない奴だった。
「そ、そんなことありませんっ。もしかしてけんごさん疑ってるんですか？　安心して下さい、わたし、絶対勝ちますから！」
「いいだろう、お前は勝つ。じゃあその勝った後どうする？　飢餓反応……もう出てるんだろう？」
ニコがまた、黙り込む。会話が途切れると無音の闇はまとわりつくように重たい。
長い沈黙を挟んで少女は乾いたごまかし笑いを吐き出す。その唇が、細かく震えているのを堅悟は見逃さなかった。
「これくらいなら、我慢出来ます。勝って、マスターのところに帰る。それでいいじゃないですか」
「あいつがどこにいるかも分からないのに？」
「ま、マスターにもらったでんわがありますっ！」
「捨てろと言いつけた電話にあいつが出るのか？」
絞り出すような言い訳を、少年は即座に切り捨てていった。見るからに年の離れた少女を理詰めで追い込む罪悪感が、ちりちりと胸を焼いた。お前は何様だと問う不覚悟な良心が湧くたび、それを何度でも潰して殺す。
言葉を重ねるごとにニコの声は貼り付けたような平板さを失っていく。やがてうつむく少女は両手を握り込み、ギリと一つ歯ぎしりを鳴らし――。
「分かってますよ……そんなこと……分かってるんですよマスターがわたしを捨てたことぐらい!!　だったらなんなんですかけんごさんには関係ないじゃないですか！　わたしはいらない子になったから捨てられたんです、いらない子がいらなくなってきえるのがなんだっていうんですか！　べつにそれでいいじゃないですかわたしのことなんかほっておいて下さい！」
溜まりに溜まった激情の堰を切った。
「許せるかよそんなこと！」
応じるように堅悟もボルテージを上げる。
ニコは怒鳴り返されるなどとは思っていなかったのか、ビクリと身じろぎして後退った。
「許せるかよ……お前はあんな傷だらけになって俺達を助けてくれたのに……お前が居なければ姉さんだって助からなかったのに……死ぬのを分かって黙って見てろっていうのか!!　出来るかよそんなこと！　それじゃあんまりにもさぁ……」
怖じ気づいたことを恥じるように、キッっと燃える瞳で睨み上げる少女に、堅悟は必死で語りかけた。少年の声は、段々少女と同じように震え、やがて涙混じりになる。
それでも構わないとプライドをかなぐり捨てる。残酷な事実を突きつけて、傷口に手を突っ込んで掻き回しておきながら、自分だけ本音を隠したままいられるものか！
「あんまりにも……お前が可哀想じゃないか」
零れた言葉は、酷く情けないモノだった。
なんて薄っぺらで安っぽい同情心。いやそれどころかこれは代償行為だ。同じ男に同じようにされ、報われなかった幼い自分の影をこいつに見ているだけだ。
視界が歪む。頬を熱く粘る水滴がうざったく濡らす。拭うこともせず目の前の少女に真正面から向かい合う。
前触れもなく涙を見せた堅悟に呆然とした後、ニコの表情もまた歪に歪む。まるで風邪でも移されたように、少女の目にも大粒の涙が浮かぶ。
「かってに……かってにわたしのこと決めつけないで下さい！　かわいそうなんていわないで下さいよ！　けんごさんは何にも知らないくせにぃ！　ますたぁが、どんなふうにしてわたしを捨てたかわかりますか？　ますたぁは、力にめざめたナナセを寝取って、お、追われるようになったんですっ！　ほっ、ほんとにひつような子、みっ、みつ、みつかったから！　わたっ、わたしのこっ、ことっ！　すてっ、すてたんだぁ！　わたしっ、の、こと！　いらなくなったんだぁ！」
もはやニコの言葉は支離滅裂で、前後で繋がりがぶつ切れだった。予想の斜め上に突き抜けた、最低な仕打ちを打ち明けた少女は、両手を垂らして天井を向き、迷子のようにわんわんと泣き出した。
気付けば身体が勝手に動いていた。ニコのことを抱きしめていた。体温の高い小さな身体はすぐに膝から崩れ落ちる。二人一緒になってしゃがみ込んだ。
「だ、だいたい、けんごさんには、おねえちゃんがいるじゃないですか！　わっ、わたし、いないのにっ！　おとぉさんも、おかぁさんも！　ますたぁしか、いなかったのに！」
自身の言葉が芋づる式に悲しみを呼び起こし、また傷を抉られ、それでも溢れて止まらない思いの丈をぶちまけるニコを、きつく抱き留め続ける。慟哭は直に身を伝い共振して堅悟のことも揺さぶる。少年の瞳からも途切れることなく涙が溢れる。
「それっ、それっ、に！　け、けんっ、ごさん、だって！　すてようとしたじゃないですかぁ！　わたし、ここに、つれっ、つれて、きたの！　すてようとしたからじゃないですかぁ！」
そしてもちろん、怒りの矛先から自分だって逃げ

ることは出来ない。
姉さんだけが、ただ一人大切な人だった。この少女に何かを思い出しかけながら、気付かないふりで小賢しく立ち回ろうとした。
「そうだ。俺は間違っていた。あいつと同じことをしようとした。どれだけ謝っても足りない」
そう思うに至った原点を、忘れていたのだ。
――俺は、あいつのように見捨てる人間にはならないという誓いを。
少女はそれ以上堅悟を詰ろうとはしなかった。振りほどかれて殴られたって文句は言えないのに。ただ少年の背中に回して縋る腕にきゅっと力を込めた。
「なん、なんなんですか……わたし、ひっ、ひっしできづかないふり、してたのに……きづいたら、もぉたてないって、わかっ、わかってるから……こっ、こんなの、けんごさんのせいですよぅ」
ひっく、ひっくとしゃくり上げ洟を啜り、唸るような嗚咽を漏らす。小さな身体が弱々しく震える。
姉さんなら、もっと巧く優しくこいつを癒やすことが出来ただろうか？　でも、ここには今俺しかいない。
こいつの全部を、俺が受け止めてやるしかないのだ。
「なぁニコ、俺はあの男を――親父を探すぞ」
「けんご、さん？　なに、いって……」
胸板に顔を埋めさせたまま、堅悟は静かに語りかける。
突拍子もない言葉にほんの少しだけニコは泣き止み、躊躇いがちに尋ね返す。
「探してふん捕まえてぶん殴ってやる。その後何を考えてたのか問い詰めて、答え次第でまたぶん殴ってやる。その時、お前はどうする？」
「わ、わたしは――」
「俺を止めるか？　それとも一緒になってぶん殴るか？　どっちにしても――生きてなきゃ無理だろ」
怒りでも希望でも何でもいい、それが誰のためでもいい。ニコに必要なものはモチベーションだ。
ニコはただ浅い呼吸を繰り返す。堅悟はただ答えを待つ。体温を分け与えようとするかのように、抱きしめる腕に力を込めて。少女の心に何かが生まれるのを。
永い永い沈黙の後――唸り、迷い、さんざんに躊躇った後――赤児が産声を上げるように、ニコはその願いを叫び放った。
「わたし……わたしは！　しりたいです！　どぉしてわたしをすてたんですかって、ますたぁにききたい！」
「なら、生きろ。どんな手を使ってでも。もう一度言うぞ、ニコ。俺と、契約しろ」
話は回帰した。堅悟は再び誘いかける。ニコは腕の中でビクンと震えた。
確かにこの決断はあの男の思惑通りなのだろう。だが――と、堅悟は顔も思い出せないどこにいるかも分からない父親に向かって心の中で宣言する。
俺もこいつも手のひらで遊ばれたままでいるとは思うなよ？　手前の都合で好き勝手振り回した対価は姉さん含めて三人分、きっちりと支払って貰う。
やがてニコの泣き声は、ゆっくりながらも落ち着いていった。
「でも、わたし、そんなこといわれても、こっ、こころのじゅんびがっ」
すると、これから何をするか意識せずにはいられないらしく、恥ずかしげに身をよじって腕の中から脱出する。女の子座りした太股に手を挟むようにして毛足の短い絨毯をいじくりながら、ニコは狼狽えた声でもごもごと何事かを訴えた。
未来のことを、考え始めた。それに、迷っている――なら、あと一押しだ！
「準備がないのはこっちも同じだ！　いいから俺の物になれ！『はい』はっ!?」
もはや理屈はかなぐり捨てて、頬を挟んでこっちを向かせ、身勝手なぐらい強く言いきる。
「は、は、はは、はいっ！」
先の自分の言葉の通り、ニコは思わずの態で半ば声を裏返して答えた。

☆

また、長い沈黙が降りる。
「あ、あの、その……す、するんですよね。け……契約」
「あ、ああ。そうだ」
先に緊張感に耐えきれなくなったのはニコの方だったが、頷く堅悟の声もどもっていた。
契約するということは、この少女を抱くということだ。理解はしていたつもりだが、いざとなると身が竦む。
（い、いいのか？　ほんとに）
改めて見下ろすと、ニコのシルエットはちんまりといとけない。
そして、剥き出しの感情をぶつけ合って生まれた想いは、庇護欲求に近いモノで、それが余計に少年を躊躇わせる。
もしかしたら、俺はものすごく人としてダメな方向に突っ走ってるんじゃないだろうか。
「……あんな男らしく迫ったのに、いまさらまよわないで下さいよぅ」
踏ん切りが付かずに何から始めるべきか迷っていると、ニコがぽそりと呟いた。どこかむくれた感じの声だった。
少女は前に身を乗り出して距離を詰める。首元の錠がチャリと揺れた。紅葉のような可愛らしい手がカーゴパンツを留めるベルトに伸びる。
「ニ、ニコ!?」

「それは、わたしおねえちゃんみたいに美人でもおとなっぽくもないですけど……その、経験はよっぽどあるんですからねっ」
不可解な対抗意識が垣間見え、狼狽える少年の前を開く。何がなにやら分からないうちに下着も下ろされ、まだちぢこまったままの若茎を露出させられた。
「……」
無言で見下ろし、ニコはぷくーっと頬を膨らませる。
「その……すまん」
「もう、いいです」
理由もなく謝る堅悟にニコが低い声で呟いた。
こんなことで躓くなどとは予想もしていなかった少年は大いに慌てる。しかし、焦るほど逆に興奮は遠のき、一物が持ち上がる気配はまるでない。
（ど、どうすりゃいいんだよこんなのっ）
色を覚えたのはつい先日のこと。姉以外の誰をも視界の外に追い出して生きてきた少年に、こんな場面を切り抜ける手は持ち合わせがない。
完全に機嫌を損ねたかと肝を冷やす少年を、ニコは座った目で見上げ――。
「わ、わたしのほうがせんぱいなんだからっ、けんごさんのこと、りーどしてあげますっ」
上擦った声で素っ頓狂なことを言い出した。その顔は暗がりでもはっきりと分かるほど、真っ赤に染まっていた。

☆

変な人だと思う。
落ち着いて見えるのに実はすごく感情的。嫌ってるのかと思えばわたしのために泣いたりする。
頭の回転が速くてびっくりするぐらい大胆なことをやってのけるのに、照れて慌てて普通のおとこのこみたいなところも見せる。
守ってあげたいと思った。マスターの命令だからじゃなくて、ただこの人のために。
それなのに――。
下着を剥ぎ取られ、恥ずかしげにしおんと下を向いた彼のものを憎々しげに見下ろす。
（わ、わたしじゃそのきにならないっていうんですかっ）
まさにしつれいせんばんというやつだ。スレイブがマスターを乗り換えることが、どれだけ大変な意味を持つかわかってない。わたしがどんな思いで彼と契約すると決めたか、ちっともわかってない！
わたしは、今からマスターを裏切るのだ。
真っ白な〝ルーム〟で、裸にされて縛られていた。それがニコの一番古い記憶だ。
言葉はとっくに覚えていたし、背丈も今と変わらない。たったいま物心が付いたなんてことはありえないのに何一つだって思い出せない。
名前も、年も。今までどこでどう過ごしたか、自分がどんな人間だったか。友達はいたか、お父さんは？　お母さんは？　なにもかも、なにもかもだ。
不安でたまらなかった。恥ずかしくてたまらなかった。だが怯える名無しの少女は更なる恐怖を味わうことになる。
人がいたのだ。まっさらな水色の服を着て、髪を頭巾で隠し、マスクをつけた男の人達が何人も！
ねぇだぁれ？　あなたたち、だぁれ？　わたしはだぁれ？　涙声で尋ねても男達は答えなかった。
実験体二号の順化調教を開始します――誰かが告げて、少女以外のみんなが頷く。男達はなにやらねっとりとべたつく液体を手に乗せ、ぷりんと瑞々しい幼肌にそれを塗りつけてきた。
怯えて泣き叫ぶ少女に、ただ無言で。実験動物でも見るような目で見下ろしながら、小さな手に、ほそっこい脚に、まだ平らだった胸に、首筋に背中にお腹にぬるぬると気持ち悪くぬめる液体を擦り込んでいった。
やがて、熱が生まれた。じんじんと火照る肌の疼きに、名無しの少女は叫び疲れてひび割れた声を上擦らせ始め――男達はまたそれに頷き合うと、粘液を何度もつぎ足しながら、少女がぐったりとするまで幼い肢体を撫で回し続けた。
それが、何日も続いた。昼も夜もない空間で、疲れて気を失うまで総身を捏ねられる。目を覚ますと肌は綺麗になっているが、すぐにまたぬるぬるで汚される。
疼きは日増しに大きくなっていく。それに合わせて、男達もマッサージの重点を変えていく。
初めの頃は手足、それも指の末端。それが太股や腋になり、次はお腹やお尻になる。
それが胸先や――未成熟な幼裂が標的になる頃には、少女はその疼きを気持ちいいのだとはっきり認識していた。
あからさまに喘ぎ始めた少女を、男達は追い詰めるように責め立てた。ぴっちりと閉じたスリットに指を潜り込ませ粘膜表面をくちくちとなぞり、愛らしく尖ったニップルを捏ね、果てにはきゅうと窄まるアナルに指を差し込み。
小さな身体を跳ねさせて、甘く高い声でよがる名無しの少女は、ねちゃねちゃと水音が立つほど幼い性感帯を苛まれ――あまりにも早熟に、絶頂を体験することになる。
それからというもの、男達の陵侮は加速度的に苛烈さを増した。
高い振動音を立てるローターで両胸と股ぐらの僅かな尖りをいたぶられた。開口器で開きっ放しにされた口をスティックで突かれ、嘔吐反射を抑える訓練をさせられた。
果てにはあの身体が火照るローションを何度も浣

腸され、度重なる排泄に開きっ放しになったアヌスを、更にバルーンで広げられたりもした。
一度果てを知った幼い身体は容易く絶頂する。何度も何度も極みに飛んで、失神しても粘膜を掻き毟られて淫楽に叩き起こされる。
毎日毎日気が狂うほど泣きじゃくってイキ続けた。その間にも男達は少女に卑猥な言葉を教え込み、様々淫らなクセ付けを施した。
ただひたすらにイカされ続ける、地獄のような日々だった。それを終わらせてくれたのが——マスターだ。
目覚めた時には、青い服の男達は一人も居なくなっていた。マスターはわたしを抱きしめて、よく頑張ったなと言ってくれた。安堵にやっぱり泣きじゃくるわたしを、いつまでも抱きしめていてくれた。
その日から名無しの少女はニコになった。高崎悠堅の楯になった。
彼はわたしの全部だったのだ。たとえ——綺麗な思い出の端々に、いくつものつぎはぎが見えるようになった今でも。
めらめらと怒りが燃え上がる。そんな人からわたしを奪おうとしてるのに、こんな可愛いおちんちんで堅悟さんはいったいどうするつもりなのかと。
ニコは両手でとんと少年の身体を押す。
「なっ？」
驚いた堅悟は下半身を露出したまま尻餅をついた。開いた脚の間に精一杯しなを作りながら四つん這いで擦り寄る。ミルク皿を前にした子犬のように腕を縮めて顔を近づける。
（ぜったい……ぜったいせきにんとってもらうんですからっ）
「に、ニコ……？　……ぅあっ」
戸惑った声で名前を呼んだ彼が、情けない悲鳴を上げた。
桜の花びらのように可愛らしい少女の舌が、露出した少年に触れたのだ。
——くちゅ、ちゅくとキスを降らせる。男の人の、大切な部分に。オレンジ色のショートヘアがさらさらと揺れる。
ズボンときつめのボクサーパンツに閉じ込められていた股間は汗ばんでいて、むわりと蒸れた匂いがした。
似てるけど、少し違う。マスターよりもっと若々しい感じの——。
（だ、だめですこんなことかんがえちゃっ）
知らずのうちに比べている自分に気付き、慌てて思考を断ち切る。
彼のものになるって、決めたのだ。ニコは自分を叱りつけ、ことさら口戯に集中を始めた。
挑発的に舌を回して唇を湿らせ、優しく食む。若竿は自然のままで先端が露出しているが、まだ皺が寄って照りがない。
すり、すりと意識的に下唇でエラの裏を擦ると、彼がぴくんと震えた。小さな嬉しさが心をくすぐる。上唇を押し込んでカリ襞を弾くとまた一つ震える。
「うっ……っ……っぁ……」
堅悟は恥ずかしさのためか、必死で声を押し殺そうとしてくぐもったうめきを漏らす。ニコにはなぜだかそれが無性に可愛く思えた。
「んっ……♡」
丸ごとぱっくりと含んだ亀頭を根元から先っぽに向かってさする。すると、どれだけ声を隠しても、彼のオトコノコは正直にぷっくりと膨らんでくる。
口の中にはっきりと伝わる興奮のしるしに、またひとしずく胸に歓びが落ちた。もっと、大きくして貰わなくちゃ。じんわりとお腹の奥に温かい何かが生まれるのを感じながら、ニコは知らずより深く口淫に没頭していく。
ちゅうと頬を窄めて吸い付き、生来ざらつきの強い舌を鈴口に当てる。びっくりさせちゃいけないと、優しく擦っただけなのに、堅悟さんは「うあっ」と抑えきれずに喘ぎを漏らした。
（可愛い……♡）
きゅんと胸がときめく。もう一度聞いてみたいと、奉仕にいっそう熱がこもる。びくんと彼の腰が震えるのも構わず、強く舌を押しつけて裏筋をなぞり、割れ目をストローのようにちゅうと吸う。
先端に続いてシャフトにも見る間に血が集まっていく。お辞儀をしていたおちんちんはむくむくと持ち上がって、元気良く口蓋を押した。
「んっ……ぷぁ……。あは♡　おっきくなっちゃいました」
「うっ……し、しかたないだろ、こ、こんなっ……うぁああっ!?」
顔を引くと、男らしくそそり立った肉棒がビンと跳ねて口から飛び出た。ニコはとろんと目を蕩けさせて微笑む。
言い訳するのが可愛くて、また彼のものに口をつけた。ぱっくりと亀頭を咥え込んで、腰元に顔を埋めていく。
いったん大きくなってしまえば少年のもちものはカチカチに硬くて、鉄の棒が芯に入っているような感触が唇に伝わる。
その逞しさにうっとりとしながら、ニコはくぷくぷと深みへ若茎を誘い——。
「んふ……♡」
こつんと、先端が喉奥に当たる。鼻先を茂みがくすぐった。根元まで迎え入れた満足感に、少女は無邪気な媚を含んだ鼻声を漏らした。
「お、おい大丈夫なのかよ、そ、そんな深く、……」
対して大事な部分を丸呑みにされた堅悟は狼狽えた声で股ぐらに顔を埋めた少女に問いかける。

「ふぁひ？　ひょへもひもひいいぃえひゅぉ？」
ニコには彼が何を心配しているのかが分からない。上目遣いになって少年を見上げ、はしたなくペニスを咥えたままでもごもごと返事をする。
「うぁ⁉　わ、分かった、いいから！　答えなくていい！」
すると、堅悟はなぜか慌てた様子で喋るのを止めさせた。
（……？　変なの）
蠢く唇に舌に牡器を嬲られた少年が、強すぎる刺激に参ってしまったなどとは思いもよらず、少女はきょとんとする。
でも――優しいのは、嬉しい。もっと気持ちよくなって欲しいと、ニコは小さな頭を前後させ始めた。
「んっ……んぐ、っふぅン……♡　んぶ、ぐぶ……」
意識的に喉の力を抜いて広げ、初めはゆっくりと抽送する。
深く嵌まり込んだ亀頭が口から胃に向かうカーブの突き当たりをとんとんと叩き、張り出したエラでくぷくぷと粘膜をなぞる。
もちろん、痛さや、苦しさはない。乱暴に突かれたって平気なように躾けられてるんだから当たり前だ。
それどころか――こうして男の人に奉仕していると、胸がどきどきと高鳴って身体が熱くなってくる。腰の裏がむずむずして恥ずかしくお尻を振り立ててしまう。
ひとりでにピストンは速くなっていった。唇を外皮に巻き付けて、ごりごりと荒々しい中の幹をしごき立てる。溢れ始めた唾液が混ぜ返されて、ぷちゅ、くちゅとえっちな水音が鳴る。
「う、ぐっ……ちょ、ちょっとまて！　っぁあぁっ！」
（んっ……♡　すき……♡　おしゃぶり、すきぃ♡）
いつしかニコは、堅悟の制止も耳に届かないほど夢中になっていた。
細い髪を揺らして頭を振り立て、茎部に舌を絡めてぬるぬるとなめ回す。塩味を感じてふと思い立ち、鈴口まで唇を戻してずずと啜るとその源泉に行き当たる。
興奮した感触に、興奮した味。男の人を気持ちよく出来ている、役に立っていると実感出来る口での奉仕がニコは好きだった。
びんっ、びんっと断続的に若茎は脈動し、そのたび先走りの味は強くなる。頭の中がぼぅっとして、顔中が真っ赤に染まる。絨毯に擦れる胸先がじんじんと痺れ、お腹の奥はとろとろと煮詰まっていく。
（きもちいいよぉ……♡　おくちまんこ、すき……♡　すきぃ♡）
教え込まれた淫らな言葉を頭の中に思い描くと、ぞわりと背筋に震えが走った。
もう、止められない。見開いた眼を爛々と輝かせて、唇を出ては入るペニスに見蕩れながら、くぷくぷくぷくぷと激しくしゃぶり立てる。
いつまでもこうして逞しい感触を味わっていたい。そしてそれとおんなじぐらい――欲しい。欲しい、欲しい、欲しい。どろどろの精液をお口いっぱいにびゅーびゅー出して欲しい。残さず全部ゴックンしたら、えらいぞって頭を撫でて褒めて欲しい。
こんなエッチで欲張りな子だってばれたら、彼に嫌われてしまうだろうか。そう思うと怖くて恥ずかしいのに――我慢出来ない。ご奉仕してると幸せで、おくちせっくすが気持ちよくて我慢出来ない。
「あああもうだめだ！　もうやめろって！　に、ニコ……ぁあっ！」
「いいれひゅ……くぷ、んぐ……らひひぇくりゃひゃい」
激しい性戯に少年は腰を引かせて衝動を抑え込み、切羽詰まった声を上げる。
もはや当初の目的など忘れきったニコは、口のはたから涎が押し出されるほどぐぶぐぶ激しく抽送し――。
「ぐ……っぁあぁあ！」
「んぶ！♡　んぅうぅぅうっ♡」
無理な我慢を重ねていた彼の腰は、限界を超えると勢いよく前にせり出した。
喉奥を突かれて悶えるニコを追い打つように、特濃の子種汁がどばりと溢れる。
「あっ……ああぁ……っ」
「んぐ……うぅン……♡　んっ……♡」
少年の若竿は口内でビクビクと暴れながら、どばどばと際限なくスペルマを吐き出す。
深く突き込まれたせいで、重たい粘液は胃の中に直接流れ込んだ。味わいを愉しむ暇もないのを少しもったいなく思いながらも、根元を唇でしごいて排泄を助ける。
（出てます……こんなにたくさん♡）
上手にご奉仕出来た証拠が、お腹いっぱいに満ちていくのを感じて、恍惚としながら身を震わせる。
内腿にきゅうと力がこもり、下腹がひくんひくんと引き攣れる。おしゃぶりを手放せない幼児のように、ちゅうちゅうとペニスを吸い立て残り汁を絞りながら、ニコは浅いアクメに酔いしれた。
だが――夢見心地の時間はいつまでもは続かない。
「ニコ……お前なぁ……」
堅悟がジト目で見下ろしながら、呆れたように溜め息をついた。
ニコははっと正気を取り返し、ちゅぽと彼のものから口を離して顔を青ざめさせる。やり過ぎだった。さいごまでしちゃダメだったのに。
「あ、あの、わたしっ、そ、そのっ」
しどろもどろで言い訳しようとするが、巧い言葉

巨漢を倒す格闘美女！
さあKTC地下格闘大会今回の優勝は
オウォオ!!オ
東郷選手の剛腕が唸る
だが華麗にかわし
初出場の井上選手で決まってしまうのか――!?
ハイキック一閃――!!
おーっと…何だ!?
速い！追い切れないスピードで

チョークスリーパー!!
喉にがっちり食い込んでいる!!
ギ…ギブッ ア…プ
パン
パン
井上優華選手の勝利です!!
ハ――ッハッハッハ いや参った!
この男 J・東郷
まさに完敗だったぞ
武闘派マフィア KTCのボス
WRESTLE SLAVE
地下に堕ちた捜査官
漫画 ぱふぇ
最新単行本「堕天使たちの輪舞曲」
堕天使たちの輪舞曲
好評発売中!

奴は格闘技好きで自ら出場するため
年に数度大会を催す
その名目で外国人を招き
麻薬を輸入しているらしい
井上優華刑事！君の任務はそれを探ることだ
俺も腕に覚えがあるが本職にはかなわんな
奴との接触の方法は君に一任する
しかも女に負けるとはいや失敬
それにしても実に美しい正直たまらんね
慎重に行動するんだぞ
あら♡お上手ですこと
それで？私を招いたのは口説くためですの？
現場写真はおさえたしあとは
フフ…まあそんなところだ
この男の関与の裏付けね
私の下で働かんか？
いや、片腕になってほしい
真面目な話ですのね
かかった！バカな男…
仕事？格闘大会の運営かしら

それとも…裏の？
ヤクの扱いというものは色々トラブルが多くてな
知っているのなら話は早い
ん…
腕っぷしも必要だがバカには任せられん
足がついては困るからな
よし これで任意同行は取れる
お前もそう思うだろ？井上優華刑事
ガッ
ボッ
ぐら
う…？
しまった！
一服…盛られ…
カラン
あ…
ズ
ガッ

リングの――上……――？
ワー
ワー
ワー
私は……――
ワー
ん……
何をして――……
うぅ……
はあ!?
試合は……終わったはず――
何よ！この服はっ
え？えええ!?
パチ
パチパチパチ
パチ

始まりました！優勝者へのプレゼントマッチ!!
ビクッ
ウィーン
井上優華刑事VS我らがボス
楽しませてもらうぞ井上刑事
何ですのこれは!?どういうこと？
く…バレていたのね
この私が罠に嵌められるなんて
こうなれば奴を倒して混乱に乗じて逃げるしか
ブン
ッ…
う…まだ眠り薬の効果が…
回復するまで時間を稼がなければ…
はぁはぁ
井上選手かすったか足にキているぞ！

激しいラッシュ！
一撃でもくらえば失神級の攻撃だ!!
井上選手防戦一方――
おかしい…
はーはーはーはーはーっ
ますます体が重くなる…
はぁはっ
はぁはっ
喉が渇く…胸が熱い…
熱があるみたいな…
それに…
……
息が切れて色っぽいぜ
この試合はお仲間にも配信しているからよ

いいシーンを見せてやれよ
ヌ!?
あ――っとフェイント！
素早いタックル！
井上選手マウントを取ったぁ!!
ガードポジションが間に合わない――!!
ちょっちょっと!!
どこに指を!?
ずっ
ぐっ
反則よっ
ひ…ぐっ
ヌリパ!!

格闘技では負けたがな
あぁ…あ卑怯…な
ルール無用な戦いなら俺の方が上だぜ
そおらよっと
ぐ…ッぅあああああぁッ
コブラツイスト――!!
…がっちりと極まってしまった――っ!!
こ、こんなプロレス技なんかに…
ぐへへへこれからが本番だぜ
ぅぅあ…ああっ
は…あ
ああぁぁ

ちょっと！何するのよ
んン♡ 真面…目に戦…えぇっ
あーっと井上選手のおっぱいが
きゃあぁあああ!!
晒されてしまったァ
いやあぁッ映さないで!!
ン♥…ひッいあああぁあ
こんなのっ試合じゃ…ンあああ♥
何…よこれぇ胸でっこんなに…
こんな時に…なんでっ
く薬！薬を使ったわ…ね…？
ん～？知らねぇな

さてこっちの仕上がりはどうかな？
ン…
ぐ…ううう
いけない！ここまで強力な薬だなんて
どこに手を入れ…っく…んン
へへへすげえ濡れてんじゃねえか
う嘘よそんなっわ…け…
なら観客のみなさんに確かめてもらおうじゃねーかぁ!!
ガハハハそらそら♪
いやぁぁぁぁッ
いやいやぁ引っぱらないでぇえ
見えちゃうっだめぇえええええええ

触手に拘束！
丸呑み！そして産卵まで！
魔法少女が味わう屈辱の快感連鎖！
魔法少女アザミ
触手胎姦
小説 NOVEL／倉田（くらた）シンジ
挿絵 ILLUSTRATION／こうちゃまる

そこは人影が消え、ゴーストタウンと化した夕暮れの街だった。

その夕空にキラリと光るものが。

「うわ、いつもは混雑してる駅前広場が無人だよ……ちょっと不気味だね」

そう呟きながら駅上空を通過したのは、まだ学生といった年頃の可愛らしい女の子――それが球状の光に包まれ、凄い勢いで空を飛んでいた。

それだけでも、この少女が普通の存在ではないことが分かろうというもの。しかし、その隣にいる者もまた……見るからに普通じゃない。

「まさか『今なら無人のお菓子屋さんでケーキ食べ放題だなー』なんて思ってたりして……。ダメなのですよ!?」

こちらは人というかなんというか、ひとことで言えば妖精。一見すると人間ではあるものの、頭に耳が付いていたり、お尻から伸びる尻尾があったり……なにより特徴的なのは、身体がせいぜい小動物ぐらいの大きさなこと。

駅前にあるスイーツショップをちらりと見た少女の視線に気づいてか、妖精さんがお小言めいたことを言うと。

「ちっ、違うからね!? あたし、そんなこと思ってなんか……ご、ごほん! まったくタマはお堅いんだから」

「ふう……そしてアザミはいつまで経ってもダメっ子なのです」

「む! タマのくせに偉そうに」

「ああもう、その名前で呼ぶのはやめてくださいって、もう何度も言ってるですよね!? 私の名前は……!」

宙を舞いながら言い争いを始めたこの二人、実は一方が魔法少女、もう一方はそのサポート精霊であった。

少女の名はアザミ。魔法少女に変身して魔物と戦う、ちょっと気の強い、それでいて純粋な女の子だ。

髪飾りを付けた短めの栗色サラサラ髪を掻き上げながら空を飛ぶ、その姿はいかにも魔法少女。

胸に可愛いリボンの付いたスーツは身体にぴったりしたワンピースタイプで、少し動くだけで翻るスカート部分からは下着が覗けてしまいそう。

「だいたいアザミは甘い物を取りすぎなのです。だからおっぱいがそんなに大きくなるのですよ!」

と、サポート精霊であるタマが皮肉っぽく言った通り、密着度の高い服に包まれた胸は十代の少女にしてはかなりの量感。なのに体つきはすらりとしていてむしろ華奢なくらいなので、余計に大きく見えてしまうらしい。

「ななっ、なにそれ!? 嫉妬? 嫉妬なの? 自分が小さいから?」

「小さいのは身長だけなのですよ!」

そしてタマはアザミに魔法の力を与えた精霊であり、身長こそせいぜい30センチかそこらだが、れっきとした高位精霊だ。今はドレスめいた白の衣装にその小さな身体を包んでいる。

「私だって、元はもっとこう……」

ぶつぶつ言っているタマだが、なにしろ小さくてお人形さんのようなのでそれはそれで可愛らしい。身体の小ささと、ちょこまかと飛び回る愛らしさにばかり目が行くけれど、よくよく見れば顔立ちだってアザミに負けず劣らずの美形。いわば、口うるさいのが玉に瑕というヤツだ。

「精霊界にいた頃はもっと大人っぽくて背も高かったのです……初めて会った時のことは覚えてるですよね!?」

「さあ……どんな姿だっけ?」

「うう……」

普通の女の子であるアザミが魔法少女になったのは、彼女に素質アリと見込んだ精霊と契約したからである。

そして元は高位精霊であり、アザミの家で飼われていた「タマ」という名の子猫に降臨して妖精めいた姿になっているのが、魔法少女の隣でしょんぼり気味になっているタマであった。

その時、ふいにアザミが無言に。

「そろそろ目的地……かな」

そう呟くや、さっきまでは馬鹿話っぽいやりとりをしていたくせに、二人の顔が急に引き締まってくる。

「見えた! あの学校……!」

「間違いないのです。あそこから魔物の瘴気が感じられるのですよ!」

二人はその建物――学校を目指していた。他愛ない話をしているように見えて、その裏で飛翔魔法は全速力。スピードを落とすことなく、空に浮かぶ光球は目的地へ向かっている。

そこで魔物が発生したのは今日の午前中。すぐさま自治体による緊急事態宣言が発令され、人々は避難し、すでにこの街は無人と化していた。

学校を占拠した魔物に囚われた人々を除けば、だ。その人々を救おうと、アザミ達は空を急いでいた。

みるみるうちに学校が近づく。

「間に合えばいいけど……」

呟いたアザミが校門前に降り立つ。その表情は、さっきまでの穏やかなものから険しいものに変わっていた。

タマと子供じみた言い争いをしているかと思えば、今は大きな瞳の輝きに大人顔負けの意志の強さを覗かせていたり……そのアンバランスさがなんだか不思議な印象。さっきのタマとのやりとりは緊張をほぐすためのものだったのかもしれない、そう納得してしまうほど真剣さを漂わせる。

そしてそれはタマも同じ。校舎を睨みつけるアザミの前に浮かぶと、神妙な顔で少女に向けて腕を伸ばす。

「アザミ、この中にいる人を救うために、力を貸してなのです」

「もちろん!」

アザミは魔法少女として、これまで何度も魔物達と戦って退治してきた。

「今回だって、みんな助ける……!」

タマに応じてアザミが腕を伸ばす……そこがほわっとした光を灯した。

「精霊達よ、あたしに力を貸して!」

そう叫ぶ、端整な魔法少女の顔立ちが、さらなる凛々しさをまとって。腕から全身へ淡い光が広がる。

「精霊界の力……預けるのですっ!」

一方で、アザミの前に出たタマの全

身も清浄なる白い光に包まれていく。
「タマ、いくよっ！」
眩しい光の塊となった精霊を掴むように手を突き出し……少女はそこに顕現したものを引き寄せた。
一瞬、弾けるような強い光。
「魔法少女アザミ、いきます！」
二人を包んだ光が収まると同時、駆けだした少女の手には光のステッキが握られていた。
それこそが魔法少女たるアザミの武器であり――精霊であるタマ自身が姿を変えた魔法具だ。
時には剣に形を変えて敵を切り裂き、時には杖になって強力な魔法を使う触媒となるそれを携え――。
魔法少女は校舎へと突入した。

※

「フレクター・ウィップ！」
振り下ろしたステッキの先からキラキラした光が伸び、一直線に魔物へと走る。それが胴体に触れた途端に、
「グギャァァァァ!!」
粘体の塊のような、口のない魔物がどこからか悲鳴を上げ、両断された胴体を悶えさせた。
ここは図書室に繋がる廊下。その隅には壁に貼りつく赤黒い粘体がいた。
その触手に犯されていた女生徒を救い、今まさにアザミが魔物にとどめを刺したところだった。
学校に囚われている人間は、タマの感知能力によれば20人らしい。
その18人目の少女が、今、アザミの足下に横たわっている。
「もっと早く助けられたらよかったけど……ごめんね」
精いっぱい急いで駆けつけた二人だったが、それでも囚われた人々は魔物の手に掛かってしまっていた。
ただしここまでの17人と同じく外傷はなく、しばらくすれば目を覚まして自分で逃げてくれるだろう。
『残る二人は図書室の中なのです！今はそちらを……！』
魔法具に姿を変えているタマの声が、頭に直接響いてくる。
「そうだね。残った人も、一刻も早く助けてあげなくちゃ……！」
こくりと頷きアザミは顔を上げる。
「で、そこに魔物のボスもいるの？」
『そういうことなのです。ただ……』
タマが口ごもったのは、魔物の目的がいまいちハッキリしないからだ。
女性を犯すことに喜びを感じる魔物は多い。ただ、陵辱だけが目的なら学校を占拠して居座ったりしない。
過去の経験から言っても、なにか理由があってこの場所に陣取っているはず。もちろん、ただの偶発的な出来事と捉えられなくもないけれど。
「まあ……どうであれ、そこにいる敵を倒せばそれで万事解決、だよね」
アザミは呟いて走り出す。
その正面には、最後の二人がいると思われる図書室のドアがあった。
いや……正確には扉ではない。
さっきの魔物と似たドロドロ粘体が、ドア代わりに入り口を塞いでいる。
「あっ!?」
その粘体壁が一瞬波打って……ものすごい勢いで触手を伸ばしてきた。
「まったく、面倒なんだから……！」
光の鞭でそれを打ち落としながら、アザミは次々に生え出てくる肉蛇にうんざりした表情。
「いちいち相手にしてらんない。タマ、一気に浄化するからねっ！」
触手を避けながらアザミが手元のステッキに話しかける。
『ううっ、ということは接近戦ですか？　き、気持ち悪そうなのです……』
「なに言ってんの!?　急ぐんだから、ちょっとくらい我慢してよね！」
『ううっ、分かってるのですよ……』
タマの化身である魔法具は今、短いステッキの形状で手に収まって光の鞭先を伸ばすウィップとなっている。
ここまではそれで充分だったが、多数相手となると威力が弱い。もっと直接的に魔物を浄化する力が必要だ。
「だからほらっ、いくからねっ!?　ライトニングスピアッ！」
『ううう……』
タマもそれは分かっているはずなので、ぶつぶつと伝わってくる愚痴はそれはそれとして無視して、魔法少女は精霊の化身を変形させる。
ステッキが長く尖って変形、バラリと広がった穂先に魔法光が宿る。
「さっさと片付けちゃうよ！」
それをナギナタのように振り回して触手を一気に切り裂きながら、アザミは入り口へとダッシュした。
『ぎゃあっ！　ぶにゅぶにゅしてますっ！　ぐにって！　ぶちゅって！』
武器そのものに姿を変えて、触手を斬る感覚をダイレクトに感じているタマの悲鳴を聞きながら。アザミは図書室の入り口を塞ぐ魔物へと、紫電を放つ槍を突き立てる――。

※

『ひいぃぃ……ドロドロですぅ……』
「あーもう、うるさい。あとで拭いてあげるから我慢してってば……」
『言われなくても我慢するのです！聞き流してくれて結構なのですよ！』
開き直ってぶつくさ言っているタマをなだめつつ、図書室に踏み入った。
部屋の中は、壁も天井も床も、粘体のドロドロに覆われている。
「……うぅ、気味が悪い」
ぐにゅっとした床を踏みしめるその感触が、なんとも。
『ざまあみろです。それを肌で味わった私の気持ちが分かったですか？』
「はいはい、ごめんね」
適当に謝りながら、アザミは油断なく魔法具を構える。
図書室の中は明るい。蛍光灯がつけっぱなしで、それを覆う粘体を通して赤い光が降り注いでいる。
その下では机や書棚がすべて倒れ、粘液に覆われて小高い山になっていた。
その連なりの向こうに――。
今まさに触手から犯され、涙目にな

著者近況　皆様こんにちは。毎年この季節になると「年末くらいは宝くじを買って夢を見ようかなー」と思いつつ、当選の妄想だけで満足してしまって結局いつも買うまでに至らない倉田です。至らない人間ですみません。

って助けを求める二人の女性がいる。
「このっ……！　あたしが来たことはとうに気づいてたでしょうに……！」
ザコ魔物と違い、このボスにはしっかりした知能があるはず。魔法少女の存在も感知していただろう。それが、まるで「魔法少女など知ったこっちゃない」とでも言わんばかりに、今も触手で女性を犯している。
いや……気づいていたからこそか。彼女達はアザミに対する人質なのだ。
（でもっ、すぐに助けるから……！）
少女は部屋の奥に陣取ったその物体を睨みつけた。
図書室の端から端までは15メートルほど。その距離を挟んで対峙するのは、触手のカーテンに守られた、ひときわ目を引く大きな魔物。
「まったく……気持ち悪いんだから」
ひょうたんが口を広げたような形……確かウツボカズラといっただろうか、その食虫植物に近い。
それが周囲に根のように這わせた触手で支えられていて、しかも、その体表はまるで血管を這わせたようにデコボコで気味悪く脈動している。
部屋全体がそれと似た赤銅色に覆われて生物的な蠢きを見せているせいもあって、魔物本体が大きな心臓のようにも見えてしまう。
だがそこからは確かに、これまでのザコと違って人間的な意識を持つ邪悪な思念が感じられた。
「ねえタマ……？」
『はい、アレを倒せば終わりなのです。感触が気持ち悪いのは我慢しますから、さっさと倒しちゃって、なのですよ！』
アザミの怒りを感じてか、精霊はもう愚痴ることもなく同意する。
「うんっ。じゃ、遠慮なく……」
この魔物は人質を取って油断しているようだ。アザミは魔法具に意識を注ぎ、魔物を焼く光を増幅させて……。
ばしゅんっ！
瞬間的に槍から鞭へと姿を変えた武器に、魔物は反応できない。あっという間に鞭になった魔法具を操り、アザミは狙った触手を焼き切っていた。
二人の女性がドサッと落ちた音と、
『ギッ？　グアアアアアアッ！』
タマの声と同じように頭に響く、しかし比較するのも馬鹿らしいほど嫌悪感を催させる禍々しい声が重なる。
と同時にアザミもダッシュ。
「今のうちだよ。早く逃げて！」
触手から解放された女性達を抱えるや、二人を部屋の外に逃がし、自身は出口を背で塞ぐように前に出る。
『……ググ』
ウツボカズラに浮かんだ目玉がこちらを睨み、怒りの思念を伝えてくる。
刹那、肉蛇が襲いかかってきた。
「へへーんだ」
しかしアザミは再び槍形状に戻した魔法具を振り回して攻撃を防ぐ。
ボスだけあって触手の数こそ多いものの、すでに人質は取り返した。精霊の加護を持つ魔法少女にとっては、この程度ザコとさして変わらない。
『知能はあっても、せいぜい触手で攻撃するだけのようですね。たいしたことない相手なのですよ』
同じことを感じてか、ふふんと鼻を鳴らすタマが妙に偉そうだ。
「それじゃ……一気にいくよ」
あとはこの魔物を倒すだけだ。
アザミの身体の周囲にほわっとした光のオーラが浮かび上がる。
数秒と経たないうちに、それがいくつもいくつも発生し、魔法具に集まって強い光に変わっていく……。
その気配から攻撃を察知した魔物が、さすがにヤバイと思ったのだろう、部屋中の触手を殺到させてきた。
大小100本以上、さすがにすべてさばくのはアザミにも難しい量だ。
ぶちゅっ！　ぐちゅっ！
凄まじい速さで伸びた触手の群れが、一瞬にして少女の身体を覆い尽くした……ように見えた。
しかしそこにもうアザミはいない。
「すぐに滅してあげる！」
光の翼を生やした少女は天井近くに飛び上がっている。
そのまま邪魔な触手を切り開いて突進、一気にウツボカズラまでの距離を詰めると……その頭上から急降下。
『あ、待ってくださいアザミっ！』
タマの声が響いたのと、アザミの目に異変が映ったのが同時だった。
「えあっ!?　そ、そんなっ!?」
突き出そうとした魔法具を引っ込め、アザミは空中で急制動。
動きの鈍った少女の脚に、ここぞとばかりに触手が絡みついた。バシッ、と床に叩き落とされてしまう。
「うぐあっ！　く……！」
あっという間に肉蛇が殺到し、その細腕へ、その白い首へと巻きついて。
「どうなってるの……うっ、ぐ！」
手足をがんじがらめにされてしまった少女が顔を上げると……間近には口を開けたウツボカズラの姿。
そして、そこから上半身を引きずり出された女の子の姿が映る。
『ご、ごめんなさいなのです！　魔物の中にいたせいで、あの子の反応が隠されていたようなのです……』
タマの慌てた声が説明した通り、助けるべき人間は残り二人ではなく、この子を含めて三人だった。
「まさか人間を食べてたの!?」
『違うのです。あれはたぶん……！』
ウツボカズラから上半身を覗かせた学生らしき少女が、絡まる触手に引きずり出されて全身を現す。
制服は溶かされてわずかに断片を残すだけ。ぐったりしているけれど外傷は見えず、露出した乳房が緩やかな呼吸でかすかに震えていて、彼女がしっかり生きていることを証明していた。
そして、空中に吊られたその女性の股の間からは……どぷっと固形物が。
「な、なにあれ……!?」
ピンポン球ほどの丸い物体は半透明でぐにょぐにょしていて、大きさ以外

著者近刊　『どうやら俺は四天王の中で最弱みたいです』『勇者よ、宿屋の店主になってしまうとは情けない』『妹にひとりじめ！』『けもみみっくす』、他本誌各号でも短編などで登場！　好評発売中！

はカエルのものを思わせる卵だった。
それが女性の陰部からぶちゅぶちゅと流れ出て。床に落ちて溶け崩れ、周囲を覆う赤銅色の粘体と同化する。
『やはり女性の陵辱だけが目的ではなかったのです。たぶん、人間に産卵して同族を増やすのが目的……』
「っ⁉　さ、産卵……？　人間のお腹に、アレを産みつけてるの……⁉」
『はい。でも、あの女性には適応しなかったみたいなのです』
つまり、適応者の子宮に卵が定着すればやがてあの魔物と同じようなウツボカズラが生まれ、失敗すれば赤銅色の粘体と化し……やがてザコ魔物に変わるということなのだろう。
「あぅ……た、たすけ……て」
搦め捕られた女の子が、ようやく魔法少女に気づいて口を開く。憔悴し涙を溢れさせる姿に、アザミは背がチリチリするような切迫感を覚えた。
「た、助けないと……っ！」
なんとか触手を振り払おうと、地に伏したアザミが腕を持ち上げ膝を立てるが、ぎちり、と首を締めつけてくる肉蛇に息を塞がれそうになる。
「ぐっ！　そ、それなら……フレアで焼き切ってやるんだからっ……！」
手の中のステッキに意識を向ける。
それが再び白い光を灯し、すべてを浄化する清浄の炎が燃え上がる。
精霊に預かった魔法力をそのまま解放して魔物にぶつける、魔法少女としては奥の手の究極魔法――。
『待ってください！　あの女の子まで巻き込んでしまいますっ！』
「えっ……⁉」
そこで炎の勢いは止まった。
ただでさえ奥の手の魔法。かつて人間相手に使ったことなどない。タマが言うならおそらくそうなのだろう。
「じゃあどうすれば……⁉」
こうしている間にも触手は量を増し、四肢をギチギチと締めつけてくる。
「うっ、ぐ……！」
顔面にべとりと貼りついてきた触手の体液が垂れ、腐臭をまき散らす。
『アザミっ！　ここはいったん退いて、仕切り直すのですよ！』
危機感に満ちた声でタマが叫ぶが、それもベストな案ではない。
「その間に魔物が逃げて……あの子も殺されちゃうかもしれない！」
その恐れは充分にあるだけに、精霊もそれきり押し黙ってしまう。
「せめてあの子だけは……！」
渾身の力を振り絞って、アザミは身体を持ち上げた。
何十本という触手が、少女を地に押しつけようとまとわりついた。首を締めつけ、意識を奪おうとしてくる。
それを引きずるようにして、一歩、また一歩と近づき……。
かろうじて動かせるのは左手だけ。それを必死に伸ばし、囚われの少女に絡みついた触手を引き剥がしていく。
『もう少しなのです！』
ウツボカズラの魔物は、アザミを押さえつけることに労力の大半を割いている。だからこの子だけなら……。
気味の悪い触手を思い切り手の平に掴み、最後の一本を剥がして……。
だが、しぶとい少女に手を焼いた触手群は、そこでターゲットを変えた。
「んっ！　ま、魔法具が……！」
魔法少女の力の象徴であり、その根源でもある魔法具を奪おうと、肉蛇が右手へと何本も絡みついてきた。
『ア、アザミっ……！』
魔法具を守ることに集中すれば、それを奪われずにすんだかもしれない。
だが、アザミは女の子を選んだ。
「そこから解放してあげるからっ……！　すぐに逃げるんだよ……？」
戸惑いを浮かべる人質の少女に精いっぱいの優しい笑顔でそう言うと。
ぶちっ！　とラスト一本が引き千切られ、女の子が解放された。同時にアザミからは魔法具が離れる。
ただし。その瞬間、アザミは最後の力で目くらましを放っていた。
「ラグナ・フレアッ！」
ボウッ！　と魔法具から噴き上がった白き光が周囲の触手を焼き払い、部屋を神々しい輝きで包む。
すでに手から離れた魔法具ではそれ以上の威力を発揮できない。炎というより、光をまき散らすだけの魔法。
魔を滅するには弱すぎる光だが、少女がここから逃げるだけなら……。
「早くっ！　逃げてえっ‼」
その叫びを聞いてくれたのか。
数十秒続いた光の氾濫が収まった時には、囚われていた最後の一人は部屋から姿を消していた。
その代わりに部屋に残されたのは、もはや反抗の手段を失った魔法少女と、それを守護していた精霊……。
何十本もの触手の重みで床に引きずり倒され、太腿にずるるっと触手が巻きついてくるのを感じながら、アザミはタマの姿を探す。
――いた。アザミのすぐ近く、その距離はほんの1メートル程度。
思わず手を伸ばそうとしたが、ずしりとのしかかってくる重さに邪魔されてあと少しで届かない。
「ごめん、タマ……」
「いいのです。どっちにしても、あの子を助けないことには打つ手なしだったのですよ……」
アザミの手から離れた魔法具――タマは元の妖精じみた姿に戻っていた。
精霊界の住人である彼女は、この世界では直接的に魔法を行使できない。だからこそアザミに力を貸し与えて魔物と戦ってもらっている。
そしてアザミは、精霊の力をもたらす魔法具と一緒でないと半分も実力が出せない。変身して身体能力こそ通常の数倍になっているものの、それが魔物相手にどこまで通用するか……。
「んぐっ……！　このっ！」
力を振り絞って腕を振り回すアザミにまとわりついてくるのは、少なく見ても30本の触手の群れ。

「あうっ！　き、気持ち悪いのですよっ！　このこのっ！」
タマにも肉蛇が群がっている。口でこそ抗ってみせているけれど、身体の小さな彼女では細い触手一本にすら抵抗することができず、その胴をぐるりと掴まれてしまった。
「タマっ……！　ま、待ってて！」
ヌメヌメした体液に包まれた触手を懸命に引き剥がしながら、なんとかタマを救い出そうと床を這いずるのだが……。だめだ、少し這いずっては足を引かれてズリズリ引きずり戻され、わずか1メートルが縮まらない。
数秒と経たず、タマの姿は触手に埋もれて見えなくなってしまった。
「あぐううっ⁉」
そして暴れるアザミにもじわじわと圧迫が増していく。
触手は少女の動きを完全に吸収し、手足をジタバタさせてもまったく離れない。アザミは床で俯せのまま、体勢を変えることもままならなかった。
しかもまだ足りないとばかりに触手が次々に覆い被さってきて……。ずっしりした重みに潰されてしまいそうな恐怖を、本能に感じた瞬間、
「っう！　ま、まさか……」
ぞわりとした感覚が背を走った。
自分の下半身を見ることすら叶わないが、感覚で分かる。内腿のあたりをグリグリと押し込んでいた触手が、魔法少女のスーツ、そのスカート部分をばさりとめくった。

「ひっんんっ……！」
股間をずるりと舐め上げられる感触に、思わず頼りない悲鳴が漏れる。
唇を噛んでそれを意地で呑み込んで、せめてもの抵抗に四肢を引き寄せ身体を丸めようとする。
（あたしも、穢される……？）
頭の芯がカッと怒りに燃えた。
「やっ！　ふざけないでっ！」
怒りに戸惑いを交ぜた瞳で、アザミは懸命に手足を暴れさせる。
（こんな魔物に負けないっ！　絶対、なんとかなるんだからっ！）
ぐっ、と下腹に力を込めた。
全身にのしかかってくる、おそらく数百キロはある触手の圧迫をじわじわと持ち上げていく。
……だが。
「っ、きゃ！　な、なにっ⁉」
ずぷりと、手が沈んだ。
アザミを呑み込まんとするように、図書室の中を覆っていた粘体が周囲に集まってきていた。
「手がっ⁉　こ、これくらいっ！」
しかし四つん這いに両腕の肘までを赤銅の粘体に呑み込まれ、両方ともあっという間に動かせなくなった。
代わりに足を踏ん張り抜け出そうとするが……。赤黒い海の中から、ごぽりと姿を現した巨大なものがある。
（お、大きい……！　あんなのに捕まったら逃げられなくなる……！）
胴回りがアザミの腰ほどもある、巨大な触手が床から生え出ていた。

ブツブツした体表に白っぽい体液をまとった、蠕虫（ぜんちゅう）のようなそれが……少女の頭がすっぽり入ってしまいそうな大きな口を、先端にぱっくりと開く。
だが巨大ワームは少女を丸呑みにはせず、右の足の爪先に食らいついてきた……いや、むしろしゃぶりつくといった表現のほうが近い。
「いやあっ！　きっ、気持ち悪いっ！」
ワームの口内には歯がなく、代わりに小さな突起物がびっしり生えていた。その一本一本が軟らかく、ずっぽりと呑み込まれてしまった足はまるで数百枚の舌に舐められているよう。
嫌悪感による悪寒がぞぞぞっと走った。必死で身体を揺すって逃れようとする。腕にも足にも力を込める。
「ひっ！　う……！」
しかし、どうやっても抜けない。唾液のようにジュルジュルと分泌されている液体のせいで呑み込まれた足との密着感が増し、蠕動する軟体突起のせいでますます奥へ吸い込まれていく。
「このっ、は、離れなさいよっ！」
同じように今度は左足が。爪先からヌメリヌメリと呑み込まれていく。
「やっ！　気持ち悪いっ、ひい！」
踵（くるぶし）からふくらはぎを通り、ざわざわ蠢く感触が這い上がってきて……。
体中を触手に締めつけられ、さらに手足までが呑み込まれた違和感に、さすがのアザミも顔色を変える。
（ブニブニして……ううっ！）
切迫感のひしめく頭の中に、今まで見てきた女性達のことがちらついた。
触手に犯され、体中をドロドロにされた女の子達……それに同情し、いずれは自分もそんな目に遭うかもしれないと覚悟はしていたつもりだけど。
（くっ、い、いやああっ！）
元は普通の少女。抵抗すらままならず身を穢されていく感覚には、やはり恐怖を感じずにはいられない。
なんとか手を引き抜こうとして余計にバランスが崩れ、粘体床にべたっと落ちる。さらに触手が群がってきた。
「あく……っ。だ、だめっ！」
粘肉に埋まった手足が、粘体や触手の蠕動にずるずる舐めしゃぶられる。
「やっくうぅっ……ひゃっ！　動かないでよっ！　くうっ……んんっ！」
それに加えて他の触手もここぞとばかりに蠢きを激しくしてきて。
「いやあっ！　くぅ、あ、ひっ⁉」
脇の下を潜っていく肉蛇に息を呑んだ次の瞬間には、下着越しに尻の谷間をなぞられる感覚。好き勝手に身体のあちこちに這いずってくる。
首にこらえがたいくすぐったさが走り、それをすぐに舐めずりの気味悪さが上書きし、かと思うと次には下半身が同じ感覚に翻弄されて。
冷静になるべきだといくら自分に言い聞かせても、全身が勝手に跳ねて頭の中はグチャグチャ。
自分で自分が把握できない、ふわふわした不安定な感覚に呑まれていく。
（や、嫌あっ！　タ、タマっ……！）

いつもの強気な彼女らしくもなく、胸中で相棒に助けを求めた時だった。
「……っ、うぅ……ぁ……」
タマの声が聞こえた。
かすかながらも確かに彼女と分かる声に、ハッと顔を上げた瞬間。
ぐらりと視界が揺らいだ。
「うあっ！　な、なんなのっ⁉」
両手両足、それをしっかり呑み込んだまま、粘体がずるずると流動してアザミの体勢を変えさせる……まるで何かを見せようとするように。
両の太腿までを咥えた巨大ワームに足が支えられ、胴体は垂直に近く。両腕はやや後ろに引っ張られて、胸を反らされた形に。その格好はさながら、西洋帆船に飾られた女神の船首像だ。
「そんな……」
そして目に飛び込んできたのは、縛められて服を破かれたタマの姿。
「ひぅっ！　いや、なのですよぉ……っんん！　はぅ！　うぅぅっ！」
小さな身体の形のよい乳房が引きずり出され、全身を揺らされるたびにプルプルと小さく跳ねている。
「あぅ！　ふっ、うぅぅ！」
そして、くぐもった短い悲鳴を漏らし首を振る彼女の股間には……。
ぐちゅ、ぷ……ずりゅりゅ！
彼女に似つかわしい小さなサイズの、しかしデコボコして凶悪な触手が突き刺さっていた。
苦悶の表情を浮かべるタマと、その下腹にずるずると出し入れされる肉蛇に、アザミの頭へと一気に血が上る。
「くっ……！　タマから離れて！」
「ふ、あっ！　ア、アザミ……！」
タマはその声にビクッとして、震える瞳で一瞬だけこちらを見て、しかしすぐに目を逸らしてしまった。
穢される自分を見ないでほしい、そんな声を聞いた気がして胸が痛む。
なにか励ます言葉をかけなければ――そうは思うのに言葉が見つからず、今は戸惑うだけのアザミの目が、
「ひぐ、う！　んぶ、ふぅぅっ！」
驚きに見開かれる。
その口を塞ぐように、触手が唇を乗り越えて入り込んでくるのだ。
一瞬にして口腔内がいっぱいになった感覚に少女は目を白黒させて戸惑い、すぐにそれが触手だと気づいて。
「んぶぅうぅうーっ！　ふぅ、はぁふ、んんんんっ！」
必死に吐き出そうとするが、舌を暴れさせることぐらいしかできない。
ぶつぶつの体表にヌメヌメの体液をまとった肉蛇は、舌で押したくらいではビクともせず、むしろのたうつ舌に撫でられて心地よさげに跳ねる。
それを少しでも押さえ込もうと頬をすぼめ、舌で押さえ込むが……、
（ぬるぬるしてっ、うぅっ！　これっ、やだぁっ！　生臭いよおおっ！）
しかしすぼめた口内をなおさら強く擦り上げられて、力が抜けてしまう。
生きた魚を口に突き込まれたような違和感。ぴちぴちと跳ねてしなる触手は、口を徹底的に掻き回してくる。
「くふ、うっ、む……！　ひゃふ！」
気持ち悪くて息苦しい。なのに手も足も動かせず、首にも肉蛇が巻きついて頭を振ることすら叶わない。
ぬめりを持った感触が、腰をぐるっと回ってきた。それは腹を伝い、露出したヘソの上をくすぐるように這いずり、そこからスーツの下に潜り込んで乳房の谷間へと割り込んでくる。
（ひっぁ！　やっ、んんっ！　胸が……！　締めつけられ……っ）
根元から縛られる柔肉の塊が、触手にズリズリと這いずられて量感たっぷりに揺れてしまう。無視できない汚濁感が、胸のあたりをムズムズさせる。
（ひぃっ！　やっ、むね、がぁ……んんっ！　擦らないっ、んひゃっ！）
触手達が身体をなすりつける動きに変化。肉感に満ちたアザミの乳房をつつくように、先端でほじるように。
（んくうっ！　あっ、だめ！　スーツがぁ……っう！）
精霊の加護の供給源を失って防御の力を半減させている魔法少女衣装。それは触手の群れにずりずりと這いずられるだけで布地がめくれ、やがてその下にあったものまで露出して……。
柔肉を守っていた布地が落ちて、薄紅色の乳首がぴょこんと跳びだした。
「ふっ！　ちくっ、ぴぃ、んううっ！」
アザミが見つめる前で、芋虫めいた触手が赤い蕾に這い寄っていく。
蠕虫そのままの動きで、胴を伸び縮みさせながら肌をくすぐり進み……芋虫触手は乳首にかぷりと噛みついた。
「んぶっ⁉　きゃふあぁぁ……っ！」
ちくりとした痛みと、むずっとした疼きが同時に発生する。
葉を咀嚼する芋虫のごとく、肉虫は乳首をパックリ咥えてもごもごと、いやらしい音を立てながら。
むぢゅ……ぢゅぶ……ちゅぱ……。
赤ちゃんの執拗さで一点を舐め吸い、小さな歯でチクリと甘噛みする。
（いやぁっ！　気持ちわるいっ！　離れてよっ！　ひっ、んくぅ……⁉）
嫌悪感は湧き上がるのに。
ジンッと熱を持つ嫌な感覚――。毒でも塗られたように、チリチリした感覚が胸の芯までを支配していく。
（こっ、こんなのたいしたこと……っひん！　きっ、気持ち悪いのを我慢するだけ、なんだからっ……！）
しかし痛みならともかく、そこに存在するくすぐったさに似た強烈な疼きは無視することなど到底できず。
呼吸はあっという間に乱れて、アザミはその感覚から逃れるように唯一自由になる視線を頼りなく泳がせる。
「あぅ……アザミ！　くっ、ふ！　ご、ごめんなさいなのです……。私と、契約を結んだばっかりにっ……こんなっふ、んんっ！　こんな目にっ」
すぐ傍には、陵辱の呻きの合間に謝罪を叫んでいるタマがいる。
それに「謝らなくていい」と返してあげたいのに、今はそれすら不可能。

「んぶっ！　ひゅ、むううぅ……！」
喋る言葉は情けない喘ぎにしか聞こえず、唇から涎が垂れていくのを拭うこともできない。
再び、精霊が俯いて視線を外す。
（ああ、そっか……）
タマが目を逸らすのは、自身の羞恥心に苛まれてのことじゃない。
こんな姿のあたしを見ていられないからだ。そして、これから起こることを見たくないから――。
それに気づいたアザミの股間に、また別の肉蛇が這い寄る。
腹部に巻きついた触手にスカートがまくり上げられているから、視線を少し落とすだけでアザミにもその様子はハッキリ見えた。
彼女が予感した通り、触手は魔法少女のスカートの下に潜り込んでいく。スーツと一体化した股布の部分……その上をズリズリと擦り。
（んっ、くふ……ぅう）
わずかに肩を跳ねさせたアザミが目を細めた瞬間、薄布をぐりぐりっと脇に押しやっていく……。
（んっ……！　ま、魔物相手に見られたって……どうってことない……！）
精いっぱいの虚勢を心に叫んで、だのに少女の肩は震えていて……それがぴくっと跳ねた瞬間、栗毛のさらっとした陰毛が現れた。
起伏に富んだ体つきと同じ印象の、ふっくらした恥丘。その狭間には逆にこぢんまりした秘裂があって、栗毛色はそれを飾るだけの少なさ。
可憐さと凛々しさ、そして女性らしさを併せ持つ少女にお似合いの、肉感的でありながら楚々とした陰部だ。
「んふっ！　ふーっ、ふぅうっ……！」
口腔を陵辱する肉蛇を噛みしめていると、また別の触手が這いずってきて裂け目を開かれる感触が。
そこに冷たい空気が触れた途端に瞳が助けを求めて弱々しく揺れてしまい、アザミは自ら目をつぶった。
（はぁ、はぁ……。絶対、タマには情けない姿を見せないんだから……！）
しかし視界を塞ぐと、余計に下半身の感覚は際立ってしまう。
秘裂は左右から押されてパックリと開き、そこに瘤がついた触手が何度も何度も……体液を擦りつけ、舐めずるように行き来していて。
（……っ！　は……っう！）
少しでも反応すれば魔物の嗜虐心を喜ばせるだけなのは理解している。
……けれど。割れ目に沿ってぴたっと胴をくっつけてきた瘤触手が、粘液まみれの突起物を押しつけるようにうねった瞬間。
ずりゅりゅりゅっ！
「っは！　んぶうううっ！　ごほっ、かは、うぅぅぅっ……！」
誰かの目に触れたことなどなく、もちろん自慰の経験なども皆無。
自分でも触れる機会の少ない処女地を、敏感な陰核の部分までいっしょくたに擦り上げられ、アザミは触手を咥えたまま涎と悲鳴を噴き出していた。
（いあっ、そ、そこはぁ……っは！　はぁうううっ……やっああっ！）
身体の中で最も敏感なところを乱暴に擦られ、全身に衝撃が走った。
「ひぎっ！　っは、ひゃ、くぅふ！」
これでも我慢しているのに、ソコが擦られるたびに変な声が出てしまう。
（あううっ、しっ、痺れて……っ！）
ビリビリと身体に走る苛烈な感覚は理性では抑えることができない。
アザミは艶めいた唇からだらだらと涎をこぼしながら激しく咳き込み、閉じていた目を開いてしまう。
そして、自分の股間に向けて、今まさに突き出てくる、先端が膨れたペニス型の触手を見た。
（ひぃっ……!?　あ、あれって……）
魔法少女として戦ってきた経験上、似た物体は何度も目にして知っている――その部位がいつも、女性を犯すために使われていることも。
周囲の肉蛇が寄り集まり、融合して太さが増している。表面には体毛のように長さ数センチの触手をびっしり生やし、それらがイソギンチャクのようにぐねぐね揺らめいて……ペニス触手は嫌悪感を催す偉容だった。
（ううっ……あっ、ひ！　やだっ、ぐちゅぐちゅして、っふひぁ！）
それが股間に、何度も何度も、べたっ、ぶちゅっ……と押しつけられる。
同時に、体表に生える多数のミニ触手もぞわぞわと蠢いていて、無数の舌の感覚に身悶えせずにはいられない。
（ふぐ、ううっ……はぁ、はぁ……苦しい……体中が……！）
触手に口を封じられ、肌を這いずられているだけなのに、アザミの肉体は過剰な反応で消耗して手足から力が抜けてぐったりし始めている。
それがピンと張ったのは、ペニス触手が圧迫を強めたからだった。
ぐりゅりゅっ！　ぶちゅ、にちっ！
「ん！　ふぐっ!?　んうううぅーっ！　んぶ、ふひゅっ！　はぁうううっ!?」
小さくすぼまっていた膣口に、ぐりぐりと頭を押しつけるような触手の動き……ぞくりと、背筋を悪寒が走る。
（お、犯される……!?）
とうとうその時がやってきたと悟り、覚悟を決めていたはずの瞳が泳ぐ。
ぐぐっ……！
（い、や……！　いやああっ！）
太さは手首ほどもありそうな触手。その芯はしっかりしていそうなのに、体表部分にはぷるぷるとした軟らかさがあり、潜り抜けようとする膣口に合わせてぐんにゃりと歪んでいる。
（入ってこない、で……あうぅぅ～～～っ！）
しかし、ぐぐっと丸く広がった膣の口は触手にぴっちりと食いついて、それ以上の抵抗はできず……ちょうどよい圧迫に喜ぶ肉蛇を呑み込んでいく。
その挿入の感覚にはまるで膣内を硬めのゼラチンで埋め立てるような圧迫感があって――それがほんの数ミリず

つ、ジリジリと上がってくる。
「んぶっ！　ふぅーっ、うぅ……！」
触手に阻害される呼吸がますます乱れ、見開いた瞳は悲壮感に満ちて。
ずっ、ずずず……っ。
その挿入が、一瞬だけ止まった感触があった。わずかにアザミの瞳が揺らいだが……しかし処女の証には触手の侵入を阻むだけの力はなく。
ぴきっ、と身体の内側を走った痛みに、少女の身体がこわばりを増す。
（っあ……！　あたし、犯さ――）
とうとう訪れた絶望感に胸を塞がれ、たまらず再び目を閉じた瞬間、
「ふっ……ううあうぅぅっ！」
びきききっ！　と何かが押し破かれる感覚が走って、彼女の中にあったプライドまでもを引き裂いていった。
にゅちっ、ずるるるるっ！
そこから一気に強まる挿入の感覚。みっちりと埋められた膣内が、あの軟らかいミニ触手でズルズルと舐めしゃぶられているのが伝わってきて……。
（あたし、犯されてる……触手に、魔物なんかにぃっ……！　ううっ、許さなっ、ぐっ！　あうぅっ！　許さないん、っう！　だからぁっ……！）
アザミだって年頃の女の子。心の中に隠し持っていた、少女めいた初体験の幻想をあっさり踏みにじられ、痛みが悔しさを湧き上がらせてくる。
（ぜ、絶対に負けない……たとえあたしはどうなっても、タマだけは……。そしてこの魔物を……！）
だが、この魔物は甘くはなかった。その怒りを弄ぶように、
ぶちゅるるるっ！　ずぐんっ！
膣内を手探りで進むようだった触手が、奥まで一気に押し込まれる。
「んむぅぅぅーっ！　ぷはっ、お、お腹がぁ、無理っ、入らな、っうぁ！」
皮肉にも大きく口を開いて叫んだことで口腔の触手が抜け落ち、代わりに押し込めていた悲鳴が上がる。
下腹内部で触手が膨れ上がったような錯覚に襲われて、アザミは縛められた四肢をぴんと突っ張る。
「ひぃぃっ、ん！　そ、そんなに動いたらあっ、ふぐ、あぁぁぁ！」
今度はぬぶぶっ！　と引き抜かれていくペニス触手に、はらわたまで引きずられるような錯覚……。
ぶぢゅ！　ぐぶっ！　ぶぽちゅっ！
そしてアザミの肉体がガクガクと揺らされるたび、秘裂にグロテスクなモノが出入りするたびに。触手の体液が情けなくも恥ずかしい音を響き渡らせ、挿入の現実を思い知らせてくる。
「ひゃぅ……！　ア、アザミっ、んんっ！　ご、ごめんな……さ……」
相変わらず謝罪の言葉を呟きながら、涙目になっているタマが見える。
「あうっ！　ひ！　たっ、タマぁ……んんうっ！　っは、あぁ、はぁぁ！」
ぐりりっと最奥を突き上げられる衝撃をこらえられずに「かはっ！」と息を吐き出しながら、赤銅粘体に呑み込まれている拳をぐっと握ってみる……が、ろくに力が入ってくれない。
（今のあたし、こんなに……）
魔法具を失い、魔物に穢された魔法少女は、今はあまりにも無力だった。
永遠に続くかと思える上下ピストンに、股から溢れる触手液が太腿に垂れる間もなくぴちゃぴちゃ飛び散る。
（はぅっ、く！　うあぁっ！　タ、タマだけでも、なんとか……ひうっ！）
揺らされて焦点すら定まらないアザミのすぐ先に、頭から粘液をかぶったような有様のタマがいる。
だが、魔物の責めが自分に集中している今なら……。
（伝えるなら、今しか……んあっ！）
二人共に囚われ、犯されている現状には……もはや逆転の目はない。
しかし、アザミにはひとつだけ思いついたことがある。それを実行すれば現状を打破できるかもしれない。
「っあ！　タ、タマ……あたしとのっ……くっ、んひぃっ！」
ねじるような動きで膣内を舐められて言葉を途絶えさせながら、アザミは必死に思いを伝えようとする。
「あたしのっ、んん！　ま、魔法少女の契約、解除っ！　し、して……！」
聞こえただろうか。
タマと結んだ魔法少女の契約を破棄したいという、アザミの言葉は。
「っ……な⁉」
反応が一瞬遅れたが、涙目を驚きで丸くしたタマの顔を見れば分かる。ちゃんと聞こえたようだ。
「そうすればっ……タマはここから逃げられるからっ……」
「い、いやなのですっ！　私だけ逃げるなんて、そんな……！」
予想通りの反応だけれど、しかしタマを逃がすだけが目的ではない。
「新しい……ひっ！　お、お腹がっ……！　くはぁ、はぁ……新しい魔法少女と契約を、んぐっ！　ひうぅっ！」
会話を邪魔する触手が子宮口を擦り上げて、それ以上言葉が続かない。
だが断片的な言葉だけでも、自分の考えは充分に伝わったはず。
（んぐ、う！　あ、あたしとの契約を解除すれば……）
タマは元の精霊の姿に戻ってここから抜け出せるはず。そうすれば、新しい魔法少女と契約することもできる。
そうして、取り残されたアザミを助けに来ることだってできるはずだ。
「でっ、でも……」
タマは迷っている。
それはそうだ。契約を解除すればアザミは普通の少女に戻ってしまう。
身を守る魔法少女のスーツも、高められた身体能力も、長くて数日、もしかしたら数時間で完全に消える。
そして、魔法少女の素質を持つ新たな人間がそう簡単に見つかるとは思えない。下手をすれば、探したところで見つからない可能性だってある。
「でもっ、このままじゃ……ぐ、ふっ……んむ、ぐぐぅ……！」
「黙っていろ」と言わんばかりに、再

び口が塞がれてしまった。
もはや喋ることができなくなり、アザミは涙の浮いた瞳で必死に訴える。
残された手段はこれしかない、と。
タマだってそれは理解できるはずだ。
数秒、沈黙が続いてニチャニチャした陵辱の粘着音だけが響く。
口を開きかけたタマが、顔を今度はしっかりと上げる。
まだ迷いは残しているけれど、ようやくアザミを見据えてくれていた。
「分かりましたっ！　絶対にっ！　助けに来るのですっ！」
ハッキリそう言って、涙目に微笑む。
「ん……」
汗や触手体液でドロドロになった顔だったけれど、アザミもわずかに微笑んでそれに頷く。
その瞬間、タマの身体がぱあっと光り輝いた。その神々しい光はアザミがまとっていた光と同じ。いや、それよりも強いくらい。
（ああ、そういえばタマって、元はこんなに美人さんだったっけ……）
光の中にうっすらと見えた精霊の姿にほっとして、今この瞬間に自分は魔法少女でなくなったのだという寂しさも少し感じながら……。
精霊の依り代となっていた猫のタマと、本来の姿を取り戻した精霊の気配が消えるまでの数秒だけ、アザミは陵辱の苦悶を忘れることができた。
※
「ひんっ！　はふ、うぅぅ……！」
あたしが「元」魔法少女になって少しの時間が経った。
タマはいなくなり、たぶん数時間が経過して、その間ずっと一人で……こうしてあたしは犯されている。
「はふぅ、くぅ……んんっ！　また、奥にっ……⁉　ひいぃぃっ‼」
どうやら、魔法少女の素質があったあたしには産卵の適性もあると思われているようだ。
それがどうなのか実際のところは分からないけれど、こうしている今も……イソギンチャクは何度も何度も、産卵前に子宮口を均そうとするみたいにくすぐってくる。
（あたっ、あたしはぁ……くふぅ、んんぁ！　まだ、大丈夫……、ううっ）
そう、必死に言い聞かせる。
魔法少女の力はまだ消えていない。
でもそれは――不幸なことなのかもしれない。なにしろ、治癒能力によって初めてを失くした時の痛みが消えてしまっていて、そのくせ体力は常人の数倍になっていて。気を失ってしまうことすらできない。
行き止まりを――子宮のあたりをグリグリされると、身体が自分のものじゃなくなってしまったみたいな不思議な感覚が走る……。
「そ、そこっ、奥ぅ……んっ！　ひはっ、もぉ、やめ、ひゃんんっ！」
そうして、こんなに情けない声で叫ばずにはいられない。
（気持ちよくなんて、なって、ない……。身体がおかしくなってる、だけ……んふっ！　はぁ、はぁ……）
ざわつく胸を必死になだめて、もう一度自分に言い聞かせる。
（くううんっ！　っはぁ、タマが帰って、くるまで……はぅっ！）
あたしはその思いを支えに、触手が引き抜かれていく感覚に歯を食いしばっている……半開きの唇から、いやらしく涎を垂らしながら。
「うぁ……なに？　っ、あふっ！」
肩をすくめてしまったのは、あたしの手足を呑み込んでいた粘体達がウゾウゾと蠢いたから。
（自分で、手足を動かせるの……？）
でもその動きのおかげで手足が押し出されてきて、久方ぶりの解放感にあたしは無条件に喜んでしまった。
そのせいで、触手群に吊り上げられた身体がウツボカズラの上に移動したのにも気づかない。
ふと目を下ろした時には、吊られた身体の足先がその大口の中にあって。
「んんっ、あ、やだ……やだあぁっ！」
ぼーっとした頭が一気に覚醒して、叫びながら精いっぱいに手足を暴れさせたけれど……、すべては遅かった。
広げていた口が、両足首を食べるみたいにぱくっと閉じられる。
むちゅ、ちゅ、ずる、ずるる……。
「ひっ！　やっ！　あああっ！　呑み込まれてくっ⁉　ひあぁぁっ！」
すぼまった大口が、モゴモゴと咀嚼する動きで下半身を食べていく。
解放されたばかりの足に感じる、さっきの巨大ワームと同じ肉の圧迫感。でもその密着感はさっきの数倍はありそう。足指すらろくに動かせない。
（こ、こんなのに呑み込まれたら……窒息させられる……）
本能的にそう思った。
けれど、足先を呑み込んだ魔物はそこで止まってはくれなくて、あっという間に太腿まですっぽりと。
（あぅ……だめぇ。動かせないっ）
土の中に埋められるような切迫感。
だけど……。ちゅうっと吸い込まれる下半身には、ゾクリとする感覚も。
触手のベトベトやこんな仕打ちに慣れすぎたのか、少し前みたいな強い嫌悪感は湧かない。代わりにひたすらくすぐったさが増していく。
「ひぃぃぃんっ⁉　やはぁ、う……くふぅ！　くすぐった、ひあっ！」
腰から下が、何百もの舌先でペロペロされているみたいな……背筋がゾクリとする感覚なのは変わらないのに、ジクジクと身体の奥深くが疼いてくる、熱を持ったくすぐったさだった。
それが腰までを全部ぎゅっと包んで、股間の茂みをすりすりと撫でられると、もう、我慢も限界。
「あっ、あぁぁぅ～～っ！　ひゃめ、んんっ！　やだあっ、ひゃうっ！」
ずずっと滑り落ちるように胸まで沈んだ瞬間、自分を吊り下ろす触手を振り払って、あたしは半身を呑み込む食虫植物にしがみついていた。

あっ！
ああっ！
ブヒッ！
ブヒッ
どだ～人間のメスオデのチ[illegible]ポは最高だろ～
ブヒッ！
パン！
パン！
パン！
少女の危機に現れたのは沙枝…ではなく静流？
……！
なんてこと！
！
静流！あんた何で来たのよ！
……

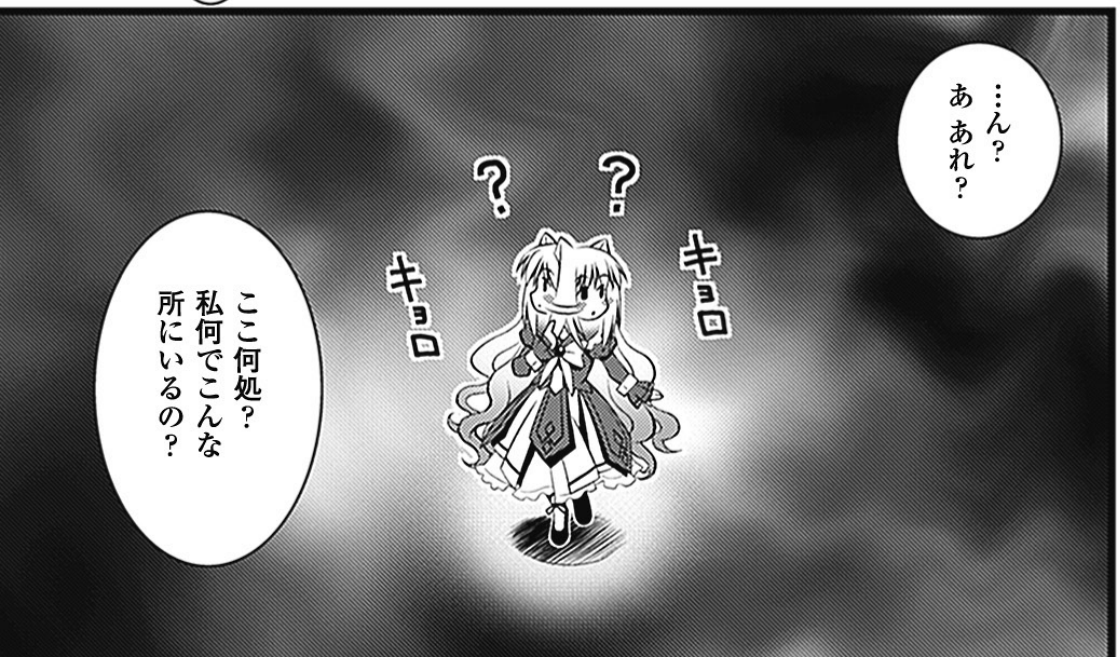
『魔法少女沙枝』のスピンオフ！
まさかの静流が主人公！

魔法少女 静流 sizuru the magical girl 前編

私なるわ

魔法少女に

漫画 COMIC／ひぐちいさみ　原作 ORIGINAL／ミルフィーユ



エミット

あっ
女王さま！

あなたを信頼して
送り出したのに
いまだ魔法少女候補を
見つけられないとは

一体どういう事
なのですか？

えっ!?
ああの確か
それは…

…あれっ？
えーと何だった…

そ
そんな…！

待って！

とにかく
このままではあなたを
魔法少女探索の任から
外さなければ
なりません…

ガビーン

ええっ!?

じょ
女王さまあ
あああ～！

ぎゃあああああっ!?

ガバッ!

はぁ はぁ

…また この夢だわ…

どうしたの 大丈夫?

!

おはよう エミット

あっ静流 おはよー

私の名前はエミット
エーテルランドという
別世界から
魔法少女探索の任を受け
人間界にやってきたの

今は彼女
村上(むらかみ)静流のお家に
お世話に
なってるわ

ごめんね
ドール用の
寝巻き変なの
しかなくて

あー
いいのいいの
気にしないでー

静流との出会いは
数日前に溯る――

使命を帯び勇んで人間界にやって来たものの…

いくら探しても魔法少女候補になるような子には出会えなかった…

ゴーール

おなかへったー

さむぃー

半ば諦めかけていた時――

人間界では不可視状態でいる私が見える…魔法の才能がある証拠…！

…お人形喋ってる…？

…あなた…私の事が見えてるの？

あ…あ…あ――

私と契約して魔法少女になってよ!!

ガシッ!

は？え!?

ちょっ！

ガクッ

うっ…！

あなたしっかりして！

…空腹と疲労で私はダウン心配した静流は

食事や泊まる場所を提供してくれた――

いやホント死ぬかと思ったわー…あらこれ美味しいわね～♪

服が汚れちゃってるわね一緒にお風呂入りましょ

違反者？

そう

エーテルランドの結界を破って人間界で悪事を働く無法者の事よ

悪事って？

人減の思念を吸い取り自分の魔力を強めようとしているの

思念？吸い取られるとどうなるの？

ふ〜

ちゃぷん

聞いた事ない？

最近まで健康だった人が突然寝たきりになるような話

ブク

ブク

聞いた事あるわ

原因不明の奇病とか言われている…

そんなこんなで私のような妖精がいる以上嘘とは思っていないみたいだけど…

いまだ彼女から魔法少女になる了承はもらえていないのよね…

えー？ 学校に行くの？
まーまー いいじゃないの♪ 人間界の学校に 興味あるしー
キーンコーン
静流には ああ言った ものの…
実際は 情報収集 よね
魔法少女の 候補を…
静流以外で 魔法の素質が あるような…
…はぁ…
そうそう候補なんて いないわよね… …静流 どうしたら 契約してくれるかしら…
こんな所に いたんだ
おーっ♪
カーンコーン

ねぇねぇ魔法少女になってよー
そうは言われても…
契約っていうのはお互いに利益がないと成り立たないのよ？
私のメリットは何かしら？
魔法が使える……かな？
魔法ねぇ……
！
ピキーン
どうしたの？
……
違反者だわっ！
ケルッ
もう一度聞くわ
私と契約して魔法少女になってくれない？
……

……
まぁ仕方ないわね
違反者を見つけに行かなきゃ
さようなら静流
ご飯おいしかったわ
エミット…
タッ
あっ！
んっ
ひっ！
あひっ！
ああっ！
ズポッ
ズポッ
ズポッ
ズポッ
ピチッ
ピチッ

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

エリカ
～マジカルプリンセスクロニクル～

小説 NOVEL 新居佑（あらいゆう） 挿絵 ILLUSTRATION ごうきくう

学園魔法少女を襲う様々な淫罠!!

ご注意 この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～7の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

都心の一等地に建てられ、国内有数の名門校として知られる、私立有栖川学園。

その学び舎の穏やかな日常が、校庭に突如出現した一匹の魔獣の咆哮によって、あっけなく引き裂かれる。

「キシャァアアッ！」

戦車ほどの大きさを誇るトカゲのような魔獣は、二股に分かれた赤い舌を、まるで舌なめずりでもするようにチラつかせながら、校庭で平和なひと時を戯れていた学生たちに襲いかかる。

「な、なんですの⁉　いや、こないで……誰か、助けてぇえぇっ！」

逃げ遅れた女子生徒が、うら若い身体をヌメつく舌に巻きとられ、怪物の口元へと運ばれる。魔獣の唾液でベトベトになった裕福なお嬢様然とした整った顔が、恐怖に怯える。

「……そこまでよ！　マギカ・レイ・サイファ‼」

響く凛とした声に合わせ、女子生徒を捕えた魔獣に向けて、天空からまばゆいばかりの光のシャワーが降り注ぎ、魔獣の巨躯を次々と打ち抜き、みるみる弱体化させていく。

「ごめんね、怖がらせて。もう平気よ」

そして光の雨とともに衆目のもとへと舞い降りた美しい少女は、魔獣に捕えられていた女子生徒を優しく抱き留めて、地面に下ろすと、誰もが一目で見惚れるほどの笑顔を見せた。

「あ、ありがとうございます。ま、魔法少女……エリカさん！」

先ほどまで恐怖で涙していた女子生徒の表情がぱぁっと明るくなり、助けだしてくれた少女の名前を呼ぶ。

エリカと呼ばれた少女の身長は、平均的な女子と同じくらい。ふわりと優しく広がるボリュームたっぷりのロングヘアを揺らしながら、かわいらしい花の形を模した髪留めをしている。

大きくて愛らしい瞳は、慈愛に溢れ、その奥には決して揺るがない確固とした強い勇気の光を宿している。

彼女が着ている、まるで王侯貴族のドレスのような衣服は、きらびやかにして繊細で、エリカの発育のよいスレンダーながらも、女らしい部分はムチリと柔らかい肉ののった若い身体を、暖かくコーディネートしている。

人外の魔獣を前にしても色あせることのない、絶対の自信に溢れたエリカの雰囲気は、一般の学生たちとは明らかに違う、気品に溢れたものだった。

「ふふ、もう安心して――悪い魔獣は私が、きちんと封印するからね！」

右手に召喚した魔法のステッキを握ったエリカは、麗しい美貌に宿した柔らかな物腰からは想像できない、内に秘めた強い意志を膨大な魔力とともに抜き放ち、封印の魔法を詠唱する。

「異界より来りしものよ、我が光の理力に従い、再びの眠りにつけ！　マギカ・ケネ・ステインッ！」

高く振りかざしたステッキから、複雑な魔法陣が描き出され、まぶしい光の渦とともに巨大な魔獣を吸い込んでいく。

刹那ののち、学園を覆っていた恐怖は、美しい正義の魔法少女への歓喜の声へと変わった。

「やっぱりきてくれたぜ、俺らの魔法少女エリカ！」

「素敵です。もうっ、かわいくて、すっごく強くって！　憧れの人です、エリカさんっ！」

「あははっ、もう押さないで。みんな無事でよかったわ」

ふわりと校庭に降り立ったエリカを中心に、生徒たちが喜びの輪をつくる。

「ふぅ、今回も無事に封印できたようだね。さすがエリカ。王様やお妃様も喜んでいると思うよ」

エリカの豊かな胸元の間から、遠慮なく現れた猫とも犬とも形容しがたい不思議な生き物が、口を開いてエリカをねぎらった。

「きゃっ、ポコったら、いつも私の胸に隠れるのやめなさいよね。ふふ、お目付け役ならもっとしっかり堂々としてほしいものだわ」

子犬サイズの不思議生物の名前はポコ。人間界とは位相を異にする並行世界。魔法世界の珍獣だ。

高い知能を誇り、何百年という昔から魔法世界の王族に飼われてきた魔法生物である。

魔法世界の王女であるエリカは、人間界に悪事を及ぼす犯罪者、魔獣たちから二つの世界を守るために、普段はこの有栖川学園の一生徒として暮らしている。

そして、いざ事件が起これば、本来の姿である清純可憐な魔法少女に変身し、平和を守るために華麗に戦うのだ。

「応援してくれて、ありがとう、みんな。学園の平和は、魔法少女エリカに任せてね」

幾度もの活躍を経て、学園のアイドル的存在になっているエリカのかわいらしい声に、学生たちが男女問わず、わぁっ！　と盛り上がる。

初め人間界にやってきたときは、無事に受け入れられるかどうか、不安でたまらなかったけれど、今では魔法世界の国民たちと同じくらい、エリカにとって大事な人々だ。

だからこそ、大切な親友にまで自分の正体を隠しているのは、少しだけ申し訳ない思いにもなっている。

（いつか二つの世界が、手をとりあえる日がくれば……。そのためには王女の私がまず頑張らなくちゃ。犯罪者や魔獣たちなんかには、絶対に負けないわ！）

そうエリカは、強く心に誓う。

「おやおや、誰が私の魔獣を倒したのかと思ったら……。王女さま直々に犯罪者退治をしているっていう噂は本当だったんだねぇ」

ふいに空中に現れたのは、深いローブを羽織った整った顔の優男、そして同じローブを着た、数人の取り巻きの

男たちだった。
「な、なに!? 魔獣の次は……魔法、使い……!?」
人では扱えない、魔法を操って宙に浮く男たちの出現に、校庭が再びざわめきに包まれる。
「エリカ……あいつらはっっ！」
「えぇ、ポコ。よぉく覚えているわ。類まれな魔法使いでありながら、自らの歪んだ欲望を抑えきれずに、魔法世界の王たるお父様に反旗を翻した男……邪法使いジェイル」
さっきまでの明るい表情から一変した、正義のために闘う魔法少女らしい鋭い視線を、ジェイルと呼んだ男に向ける。
「やはり覚えていてくれたようだねぇ、エリカ。我が愛しの人。あのとき渡した婚約指輪は、まだ大事に持っていてくれるのかなぁ？」
「そんなもの、とっくに粉々にしてあげたわ。人々を不安に陥れ、何人もの女性をヒドイ目にあわせてきた犯罪者の求婚なんて、王女である私を侮辱しているとしか思えないわね」
かつて邪法に身を落としたジェイルから受けた一方的で、粘着質なプロポーズ。当然エリカは即答で断りの意志を告げ、不埒な国賊に自らの攻撃魔法をお見舞いしたのだ。
魔法世界からの追討を振りきって、人間界に潜伏しているらしいとは聞いていたけれど、まさか今ここで出会うなんて。
「くく、私の愛情をあそこまでコケにしてくれたのは、きみが初めてだよ。プリンセス・エリカ。けど私はそれでもきみのことが忘れられない。ここで会ったのも運命だとは思わないかい!?」
ジェイルがニヤっと頬を緩ませ、取り巻きの男たちに目配せする。男たちは一斉に魔法を唱え始め、手のひらに黒い暗黒火球を発生させ、エリカに向けて撃ち放ってくる。
「エリカっっ！ みんな、早く離れるんだ！」
ポコの合図で、学生たちが走り出す。だがエリカは微動だにせずに、きつくステッキを握りしめた。
「私はあなたを許さないわ、ジェイル。魔法世界の罪のない人々を、私の大切な国民を傷つけた罪を、王女である私自らが断罪してあげる。覚悟なさいっっ、マギカ・セム・フェリアっっ!!」
クーデターに失敗したとはいえ、ジェイルとその配下の邪法使いたちの能力は、それぞれが宮廷魔術師のトップクラスに値する。
だが大事な人を傷つけられ、今もまた己の欲望のためだけに傷つけようとする男たちに、エリカは負ける気はなかった。
まばゆい光がエリカのステッキから迸り、幾条もの閃光がすべての暗黒火球をいとも簡単に消し去ってしまう。
続いて唱えた魔法は、輝く縛めの鎖を形成し、ジェイルを除く邪法使いたちを一瞬にして一網打尽に制圧してしまった。
「なっ……!? 私の親衛隊の邪法をたった一撃で……!? くっ、つくづく気の強い王女さまだ。ノビリス・マギカ――高貴なる王女の、これが実力か」
エリカは、気品溢れる王女であると同時に、百年にひとりと言われる天才魔法少女でもある。さらには強い使命感から日々の鍛練も決して怠らない。
国民からは厚い信頼と敬意を。犯罪者からは畏怖の象徴として呟かれる二つ名の秘めた力は、己の才能を過信し、邪法に道を落とした異端者を、余裕で見下ろせるほど強力無比なものだ。
「無駄よ、ジェイル。歪んだあなたたちの魔法なんて、私にはかすり傷ひとつどころか、触れることさえできはしないわ。汚れた野心に囚われず、悔い改めるというのなら、私からお父様に取り持ってあげます。だから早く馬鹿な考えは捨てなさい！」
たとえ犯罪者であろうとも、慈悲の心を忘れない。
王族としての優しさと、それを実行できるだけの圧倒的な魔法力が、エリカが魔法世界で絶大な支持を受けている理由のひとつだ。
「ふ、くく……その類まれな美貌だけでなく、心までも美しいんだねぇ、私のエリカは。私の女性を見る目に狂いはなかったということだよ」
絶対的にエリカが有利な状況の中、黒いローブを羽織ったままのジェイルは、額に手を当て、大きな笑い声をあげた。
「……私はあなたが大嫌いよ。じゃあ、ジェイル。改心する気はないということね？」
「ああ、そうさ。私はきみを一途に思い続けるよ。私が完成させた邪法で、魔法世界と人間界を支配し、私は二つの世界の王となる。そして、エリカ。きみは王のそばに座る女王となるんだ」
ジェイルは、その瞳に妖しい欲望の色を灯しながら、高笑いを続ける。
「……完全にイカれてるね。エリカ、こんな奴に遠慮は無用だよ。さっさと牢獄送りにしてしまおう！」
「わかったわ、ポコ。ジェイル……国に仇なすあなたを、王女エリカの名のもとに捕縛します。覚悟は……なっ!? あ、あれは……っ！」
有無を言わせない極大魔法で仕留めようとした矢先、エリカの瞳に見知った少女の姿が映った。
長い髪を三つ編みにして、おとなしそうな雰囲気にぴったりなメガネをかけた学生服の美少女。その女子が笑うジェイルの胸に抱かれ、黒い魔力の矢を喉元に突きつけられている。
「ご、めんなさい……エリカ……」
「メイ……っっ!! くっ、あなたたちは……っっ！」
「将来の妻のことは、きちんと調べておかないとねぇ。人間界でできた初めてのお友達だっけぇ？ んふふ、エリ

カ。私はお友達を大事にしない女性は嫌いだなぁ。はっはっはっ」

終始余裕を保ってきたエリカの美貌に、初めて焦りの色が浮かぶ。

ジェイルの言った通り、囚われの少女メイは、人間界でエリカが一番大切にしている少女だ。

不安だった人間界での生活に馴染めたのも、心優しい彼女の存在が大きかった。

「卑怯者……っっ。そんなやり方でしか女性を自分のものにできないの!?」

「これが私のやり方だよ、エリカ。ふいの遭遇で搦め手に備える時間がなかったのかもしれないけどね。くく、やはりきみとここで出会ったのは、運命と呼ぶしかないようだねぇ」

「……このっっ！」

エリカがどれだけ強力な魔法少女であっても、魔法詠唱にはほんのわずかだが時間がかかる。力量差は天と地ほどの差があっても、その一瞬の隙を見逃す相手ではない。

本来、人質には十分な注意を払ってきたつもりだが、まさかよりによって大切な親友を、最悪な敵の手に囚われてしまうなんて。

「戦って、エリカ！　私のことはいいから！　それがあなたの使命なんでしょう!!」

「メイ……。私は、いったいどうしたら……っ」

親友のけなげな叫びにも、エリカはどう答えを出せばいいかわからない。

ステッキを握りしめたまま、悲痛な表情を浮かべ続けることしかできないでいた。

「エリカさん……負けないで！」

「エリカ、頑張れっ。エリカ～～～っっ！」

人質にとられているのはメイだけではない。魔法の拘束から脱したジェイルの親衛隊が学生たちに黒い火球を向けている。

だが後ろでは、こんな状態であっても自分を応援してくれる生徒たちの声が響いていた。

「くく、どうしたんだいエリカぁ。早く決めてくれないと、この娘たちがどうなっても私は責任持たないよ。んふふ～～」

メイを取り巻きに預けたジェイルが、すぅっとエリカのすぐそばに近寄ってきた。

攻撃も防御もできないエリカの若く、それでいてみっちりと発育した身体を、男の下卑た視線が舐めるように這いずり回る。

「くっ、ぅぅっ！」

男の視線が上下左右に滑るたびに、視線の先の部位を、エリカはきゅっときつく引き締めた。

ふんわりとした髪が集まる頭頂から、鼻に、細いあごのラインから、剥き出しになっている両肩へ。男の淫靡な視線は降りていく。

年相応、それ以上の膨らみを誇示する女の象徴を、下や横からじっくりと視姦されると、まるで柔らかい脂肪の内側の神経まで犯されているようで、なぜだか首筋に、じんわりと熱い汗が湧いてしまう。

キュッと絞れたウエストまわりを見終えると、ジェイルは今まで以上ににやけながら、大きく広がるスカートの付け根、そのわずかに下をじっと見つめ続ける。

たった十数センチ先に立つ男の吐息が、不安定にはぁはぁと鳴っているのに、気づきたくなくても気づいてしまい、背筋を嫌悪感が駆け上る。

「……っ、このっ！」

まだ誰にも見せたことのない王女の隠された女陰を、長いスカート丈の下から覗く仕草をジェイルが見せたので、無言できゅっとスカートをきつく絞る。

だがスカートと同時にムチっと引き締まった両の太ももの媚肉を見せつけることになり、男の歪んだ笑みに、たまらない悔しさと恥ずかしさがこみあげてくる。

「んふぅ、かわいい反応だねぇ。まだ処女なんだろう？　オナニーはしてるのかい？　私なんて、王宮にいたときは、きみのたまらない両脚の間に、自分のモノを擦りつけたいって、いつも思っていたよ、くくくっ」

日頃、あまり意識したことのない女の花園を、じっと……しかも変質者のように鼻息を荒く見続けられ、恥ずかしさと屈辱のあまり、頭がおかしくなりそうだが、抵抗はできない。

ただじっとこらえ、しかし視線だけはきつく相手を見据え続ける。

（くぅ、どこまでいい気に……！　覚えてなさい、もうすぐみんなを助ける手立てを考えて、必ずあなたたちを牢獄に閉じ込めてみせるわ！）

残された手段と時間はそう多くはない。けれど絶対に諦めない。みんなを悪の手から救う。それが王女である自分の使命なのだから。

「すぅはぁ～～。んん～、いい香りの髪の毛だねぇ。婚約したらどう私のチポを弄ってもらおうかなぁ。ふふふ、で……決まったかいエリカぁ？」

先ほどとは完全に立場が逆転したことを理解しているのだろう。ジェイルは、頭二つ高い口元から、黒い欲望に穢れた声で聞いてくる。

「……ぇぇ。魔法世界の王女エリカ。私は――」

◈残念ね。人質をとっても無駄よ。あなたを倒すわ！⬇シーン2へ

◈くぅ、悔しいけれど、あなたの言うことを聞くわ⬇シーン3へ

著者近刊 『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』『守護姫 淫神復活の宴』『ダブル姫騎士 隷辱の王室』『サムライスレイブ 姫武者淫辱』『スケバン特捜マキ 狂姦の学園』『カグヤ 女侍斬魔録』『紅の破壊天使スカーレット』 好評発売中！

シーン3

「あぁ、いいよエリカ。くくく、その献身的な心。実に王女らしい。美しいきみの顔は、私のチ■ポをしゃぶるのが一番お似合いだ」

「くぅぅっ、だ……黙りなさいっ。んちゅっ、これはみんなを助けるためよ……ちゅぷぅぅっんっ。ジェイル、絶対にあなたを捕えてみせるわ……こんな薄汚いものなんか……！」

いくら悪党を倒すためとはいえ、学園のみんなを見捨てることなどできるはずがなかった。

エリカは言われるがまま跪き、絶対に咥えたくなどない男とその仲間たちの勃起ペニスを、可憐で高貴な唇と女体で慰めることを強制されている。

（あ、熱いわ……くっ、頭がおかしくなりそう！　こんな連中の淫呪なのに……んじゅるぅっ、か、身体が……アソコが燃えちゃう……っ！）

肉奉仕の前に、股間へ刻まれた卑猥な淫呪の証。穢れのない陰部の柔肌に浮かんだ淫らな呪詛は、王女の感度をはね上げ、発情期の獣さながらに常時女体を燃え上がらせる禁断の魔法だ。

「きみを愛している私にはわかるよ。マンコを弄る指使いが……くくっ、どんどんいやらしくなってるじゃないか⁉　見られて悦ぶ変態牝豚なエリカもかわいいねぇ」

「くっ、んぁぁあっ。私は変態なんかじゃ……んぁぁ、指が勝手に……この、おっ。ひぅうっ！」

フェラと同じく命令された、ガニ股になっての自慰行為。下賤な賊たちに見られるだけでも恥ずかしいのに、魔法の巨大モニターによって映し出された魔法少女のオナニーは、人質にとられている学園の生徒たち全員に、しっかりと見つめられ続けている。

（こ、これが女の快感、なの⁉　く、悔しい、負けちゃダメぇ。こんな奴らの、みんなの前で気持ちよくなんて……ん、んくぅっ！）

股間に刻まれた淫呪がもたらす牝快楽が、エリカの高潔な自尊心を、女の悦びへと塗りつぶしていく。

「すごい……エリカのアソコ、濡れ濡れで、糸ひいてるぜ……」

「ワレメの肉がびくびく動いて……あんな奴らのチ■ポしゃぶって感じてるのか⁉」

初めはエリカを案じていた生徒たちの視線が、いやらしい牡の視姦へと変わっている。

「くく、きみのオナニーが、人間どもを興奮させているよ？　こいつで〝イク〟ところをしっかりあいつらに見せてあげなきゃねぇ」

ジェイルが渡してきたのは、魔法で復元したステッキだった。

「くっ、許さない……はぁはぁ……ステッキで、なんて……んぁっ！」

愛用のステッキの、宝珠が埋め込まれた太った先端は、指先など比較にならないほど凶悪なものだ。

（こんなのをアソコに⁉　でもメイたちを助けるためには……私、くぅっ！）

エリカは意を決し、ステッキを握ると、熱い牝の本気蜜がいやらしく垂れ落ちる乙女の花園へとあてがった。

恥ずかしくて、悔しくてたまらないけれど、彼女たちを助けるためにはこうするしか道はない。

ズチュォオッッ！　ブチィイイッ‼

「くぁぅっ！　ひぃぅぅっ……はぁはぁぁ、んんんっっ！」

（い、痛いぃっ。こんな処女の散らし方……絶対許さない、絶対に……あひぃっ⁉　うそ、ぉぉおおっ！）

憎い仇敵と親しい学友たちとが見つめる前での、淫靡なガニ股ロストヴァージンの屈辱に、美貌を打ち震わせるエリカだったが、淫呪によって強制発情状態にある蜜壺は、魔法少女をさらなる恥辱へと追い落としていく。

ズボズボッッ‼　ズチュンンッッ‼

「んふっ、あっぁっっ！　ひぃうっ、ふんんっ、くひぃいっ‼」

「もしかして、オナニーを楽しんでいるのかなぁ？　王女さまともなると、性欲が溜まって溜まって仕方ないんだねぇ。ほら、きみの友達がみんな見てるんだよ、エリカぁ？」

「い、言わないで……っ。これは淫呪のせいよ……あなたたちなんかに絶対負けな……んじゅるるっっ、あぁ……オチンチン、くぅ、ちが……はぁはぁ……あむぅっ、じゅずるるぅぅっ！」

（あぁ、止まらないわっ。オ■ン■ンしゃぶるたびに、頭がボォッとして……私が私でなくなっていくみたい……っ！　オナニーすごいっ、見下されて、見られて……んはぁあっ！）

ダメだとはわかっているのに、余った左手が男たちの激しい怒張を握って、扱いてしまう。初めは恥ずかしすぎて、第一関節までがやっとだった右手の膣への挿入も、もう指の根本までの長さくらいでは物足りないほど、のめり込んでいく。

「おうっ、もう限界だ！　ぶっかけてやるよ、エリカぁっ！」

ドブドパァッッ！　ビチョォッッ‼

「んあっ、ザーメン熱いぃいっ！　オマ■コも弾けるっ。ひぃあああああっっっ！　おぉぉっ、ほひぃいいっ‼」

とても王女のものとは思えない獣じみた絶叫と同時に、ブシャァアッ！　股の花弁から濃厚な絶頂シャワーがはじけ散り、大量の粘ついた精液をぶちまけられたエリカの美貌が、悦楽に蕩け落ちる。

「くく、覚えておくんだね牝豚のエリカ王女。それが〝イク〟ってことさ。ふふふっ」

「あ、はぁ……イク、イク……あぁ、くぅ、んぁぁ……」

◈悔しいけど、気持ち……イイ
⬇シーン4へ
◈絶対に快楽なんかに屈しない
⬇シーン5へ

シーン4

（い、今のが……あぁ、〝イク〟ってことなの？　す、すごすぎるわ……腰がガクガクして……っ）

生まれて初めての絶頂の閃きに、優雅なスカートに隠れた、悩ましい太ももがビクビクと震え、女陰に突きこまれたままのステッキに、ブシュブシュッ！　と熱い蜜液がぶちまけられる。

邪法使いジェイル、それに付き従う黒衣の男たちが容赦なく放った大量の牡ザーメンが、可憐な衣服をドロドロに汚し、牡と牝の発情臭が絡まりあった香りが全身を包み込む。

悪を倒す魔法少女として、凛としていた背筋を、感じたこともない甘い電撃が何度も何度も駆け上がり、エリカの美貌が牝の快楽の火花に、力なく呆けてしまった。

「くぅっ、しっかりしなくちゃ……こんなことで……ぇっ」

憎き敵は目の前で、いまだこちらを見下している。こんな低俗な犯罪者と戦わなくてはとわかっているのに、頭がジンジン熱く痺れて、周りの生徒たちに、まるで見せつけるように腰がクイクイと前後に動いてしまう。

「これはこれは、王女さまともあろうお方が、完全に蕩けてらっしゃいますねぇ？　いいものでしょう、王女の使命を忘れて淫らな快楽に蕩け落ちるというのも。私と婚約していただければ、毎日牝奴隷の生活をお送りさせてあげますよ？」

「だ、誰が奴隷なんかに……。絶対にあなたたちには屈しない……わよっ！　ん、くぅっ、卑劣な快楽で私をどうにかしようなんて……ぅぅっ」

屈辱的な暴言を吐かれ、王女としてのプライドが強く、毅然と反発するように要求してくる。エリカ自身もこんな男たちに屈するつもりなどまるでない。しかし、

（ア、アソコの疼きが全然収まらない……っ!?　熱いぃ、くぅ、我慢よ……呑まれてはだめぇっ！）

きつく睨みつけようとした瞳は、どこか薄ぼんやりとして、紡ぎ出そうとする堂々とした言葉は、意識せず漏れ出る吐息によって、まるで媚びるような甘い香りを纏ってしまう。

スカートの下、ねっとりと湿った陰唇を囲むように、はっきりと刻まれた恥辱の発情刻印が、エリカの強気を奪おうと妖しく輝く。

「はぁはぁ、負けないわ……。約束は守ったわよっ。早くみんなを解放しな、さいぃっ！」

だが、エリカは柔らかい肌に大粒の汗を浮かばせながらも、燃え上がる淫欲のマグマを耐えぬこうと決意を固めた。

たとえこの気持ちよさが、逃れられない女の快楽だとしても、堕ちるわけにはいかない。魔法世界のプリンセスの矜持にかけて、必ずみんなを守ってみせる。

「ほう、普通の女ならすぐにチ■ポ狂いになるというのに……さすがは私の見初めた牝豚だ。まぁいい。ああ、解放してやるとも。くくっ、きみの淫らな恰好に興奮している、大切な大切なお友達たちをねぇ」

気味の悪いねっとりとした口調でジェイルが告げると、絶頂の余韻で動けないエリカを十数人もの男子生徒たちが取り囲んだ。

みな一様にズボンを脱ぎ捨て、先端から我慢汁を滲ませた、若くたくましい逸物を完全勃起させている。

「なっ!?　どうしたのみんな？　まさか魔法で操られて……!?」

「操られてなんかないぜ、エリカ……いいや、とっておきの肉便器魔法少女さんよぉっ！」

男子生徒たちの瞳が、一様に正常な思考をなくした、鋭い野生の牡獣のものに変わっているのがわかった。

「う、うそ……？　やめ……いや、いやぁああっ!!」

ブルブルと震えながらも、どうにか強い理性で、燃えたぎる淫欲から脱しようとしているエリカの火照った艶めかしい身体が、まるでモノのように男子たちに押さえつけられ、まだヒクヒクと痙攣している初心な花弁へと極太の肉根が容赦なく突きこまれる。

ズブチュゥウッ！　ズチョォオオッ!!

「んひぃいいいっっ!!　そん、な……！　いや、みんな……あぁっ、んくっぅっ！」

男子生徒の勃起ペニスが、悪魔の淫術をかけられた発情牝穴に、思いきり挿入され、エリカのあどけない顔が苦痛に歪む。

そんなエリカを、悪に堕ちた魔法使いたちが、ニヤニヤと笑いながら見下ろしていた。

（くぅぅっ、みんなの理性を緩ませて……この下衆っっ。ああっ、んんっ……男の人のが、私の膣内で暴れて、るぅぅぅっ!!）

ズジュンッッ！　ドチュンッッ！　パンパンパンッッ!!

「あ、あぁっっ！　すご、感じちゃうっ！　だめ、お願い突かないで、みんなっ！　おぉっ、あはぁあっ！」

魔法ステッキのような玩具と違って、皮の剥けた生勃起ペニスは、悔しさと嫌悪感を軽々と吹き飛ばすほどの、圧倒的快楽をエリカの全身へ迸らせてきた。

美しい桃色の膣肉がうねうねと蠢き、自慰のときとは比較にならない力強さで、男子の肉棒をギチギチと締めつけているのが、はっきりとわかる。

隙間なく膣道に張り巡らされた肉ヒダを、理性をなくした力任せの牡ピストンで、くまなく抉り、擦られると、唇から勝手に淫靡で、下品な声が吐き出されてしまう。

「この変態魔法少女が！　ほんとはヤリマンのクソビッチなんだろ!?　お望み通り犯してやるよぉっ！」

肉悦に溺れるピュア・マダー&スカイ!

美少女魔法戦士
ピュアメイツ
PURE MATES episode 3

漫画(COMIC)／助三郎(すけさぶろう)

ふふ…もうHが好きでしょうがないでしょう?

そ…そんな事…

グフフ 俺が最高のキスを教えてやるぜ

…あ! い…嫌ぁ!!

…う…嘘ぉ!!

こっちのキス もっと美味しいろぉ!!

だ…だめぇ オ[redacted]ンもキスも もっと欲しくなっちゃうぅ

前号までのあらすじ

バッド・フェアリーの手に堕ちたピュアメイツのひとり、茜を救うため、幼馴染みの空は妖魔に戦いを挑むが、茜を人質にされ、彼女も敵の手に堕ちてしまうのだった…。

あぁぁぁ！
こ…腰とまらないろぉぉ！
も…もう…らめぇ♥
オ■ン■ンに逆らえないろぉ♥
オ…オ■ン■ン大好きらのぉ
茜よりもオ■ン■ンが好きらのぉ！
空のオ■ンコに
精液 どびゅどびゅ
してぇ♥

じゃあ豚共
このチ■ポにも
奉仕しな

はぁい♥

んふぅ♥
オ■ン■ンって
美味しいれすぅ♥

ああぁ♥
ずるい空ぁ

んぷぅ口吸い
ぷーちゅぅ♥

ああぁ♥
お口で奉仕すると
オ■ンコもきゅんきゅん
しちゃいますぅ♥

ああぁ
イイれすぅ！
奥まできてるぅぅ

あはぁ
茜のオ■ン■ン熱くて
硬いれすぅ！

すっかりチ■ポ好きだねぇ
友達のチ■ポも
しごいてやんな!!

ああ!!
空にシコられながらの
セックスイイのぉ!!

ああぁ イきたいれすぅ
空のオ■ンコをどぴゅどぴゅ
犯してぇぇ!!

で出そう！
射精しながらイきたいのぉ！
チ■ポどぴゅどぴゅしてぇ！

さぁイけ
チ■ポ好きの
雌豚共が!!
ドピュッ!!
ビクッ
あぁ♥せぇえぇんんぅ♥
おぉ♥チ■ポもミルクもイクぅぅ♥
わらひ…
茜と雌豚になれて
幸せらのぉ…♥

心配かけたみたいだな桃香(ももか)檸檬(れもん)

ちょっとした悩みがあってさ…

でも昨日空と話したらすっきりしたよ もう大丈夫

あんあん

そう もう大丈夫ですよ

あんあん

え…えーと…茜ちゃん…空ちゃん…？

本当よかったですわ

これで元通りですわね

何が元通りよ

茜に続いて空までおかしくなっただけじゃない

翠ちゃんが気がついてないとは思えないんだけど

何か考えがあるのかな

…ん？

ポッ

ザァァァ!!

ひやあああ!!

ただいまぁ
ザザァァァ
ゴシゴシ
大丈夫？桃香お姉ちゃん檸檬さん
パタパタ
桃香が雨に降られるとは珍しいピュア
ありがとう大樹君 お風呂わいてる？
うん 大丈夫だよ
檸檬ちゃん服乾かしている間に一緒に入ろう

あ勿論(もちろん) 大樹君も一緒ね

ええええー!?

何 恥ずかしがってるの？

家族なんだから ぜんぜん変じゃないよ

だってこの歳で 女の人と普通 お風呂に入らないよ

ちょ…ちょっと 桃香お姉ちゃん

私 今だってお父さんと お風呂入ってるし

それは流石に どうなんだろう？

大樹君は 私のいとこだ

お母さんとの 二人暮らしをしているけど ウチで預かる事が多い

数か月前 大樹君のお父さんと
入れ替わっていた
バッドフェアリーを
私達は倒した

でも 彼のお父さんは
もう戻ってこない…

バッドフェアリーは
人を食べる事で
容姿と知識を得て
入れ替わるから…

その真実を大樹君は
知っているが前向きに
頑張っている

私はそんな彼を尊敬し
守りたいと思っている
だけど…

…なんだろう?
前はどんな相手でも
勝てる自信が
あったんだけど

今はそれが
薄れているような…

先に出るわよ

…あ…
うん檸檬ちゃん

雨が降る事を
察知できないなんて
ちょっと前の桃香じゃ
有り得ない事ピュア

勘が鈍っているピュア
ピュアメイツの力が
弱っている現れかもピュア

魔法少女ボタン

小　説：斐之嘉和
イラスト：はっとりまさき

「お花を枯らすなんて、酷い……どうしていつもいつも意地悪するの、スイレンちゃんっ!?　私たち、同じ魔法少女でしょッ!?」

涙目で訴えるボタンを鼻で笑い、スイレンは冷ややかに背を向けた。

「私とアナタが同じ？　冗談はよして」

「だ、だって変身できるし、魔法を使えるし……」

「魔法少女なんだからそんなの当たり前でしょ。そうじゃなくって――たとえば、アナタって私ほど上手に魔法を使えたかしら？」

「あ、うぅ……」

痛いところを突かれたボタンは、言葉を失ってたちまち悄げる。逆にスイレンは薄い胸を得意気に張り、ここぞとばかりに責め立てる。

「自覚してるなら言わせてもらうけど――アンタみたいなダメッ娘にちょろちょろされたんじゃあ、魔法少女の評判がガタ落ちなのよ！」

「ご、ごめんなさぁいッ！」

剣幕に圧倒されて反射的に謝ってしまったが、しかしスイレンの評判がよくないのはボタンのせいではない。魔法を使って花を枯らしているのはスイレン自身なのだから。

（でも、それを言うとまた怒るだろうし……）

困ったボタンは、

「と、とにかく……魔法少女同士が戦うなんて、絶対変だよ！　お友だちになろうよ、喧嘩なんかしたくないよぉ！」

ただただまっすぐに本心を告げた。

友だちは、多ければ多いほどよい。仲良くなれば争わなくて済むし、互いに助け合えばもっと大きなことも成し遂げられるだろう――。

「だーかーらー！　ダメッ娘のアンタと手を組むメリットが、私にはないんだってば！」

「ご、ごめんなさい……でも、私頑張るッ！　技術だって磨くわ！　だからお友だちに……」

「ああもう、しつこいっ！」

怒りながら印を組み、呪文を唱えるスイレン。

「待って、待ってッ！　私はもう、戦いたくないんだってばぁっ！」

慌てて飛び退こうとしたボタンの足元に魔法陣が輝き、回転して――モコリモコリと小さな魔物が何匹も湧いた。

そのうちのひとつに引っ掛かり、

「きゃンッ!?」

仰向けに引っ繰り返るボタン。

（やぁん、また失敗ッ！）

焦る魔法少女の頬や太股に、熱くヌルヌルとしたモノが――ぺちょんっ！　ぬちょんっ！

「ふぁっ!?　や、や……あ、あれ？」

慌てて撥ねのけようとしたボタンの腕が、魔物に触れる寸前に止まる。

くぅんくぅんと喉を鳴らし、尻尾をピコピコ振りながら、魔法少女のたおやかな腕やほっそりとした脚に群がっていたのは――垂れ耳とクリクリした瞳が愛らしい、なんとも無邪気そうな仔犬たち。

「う、わぁ……か、可愛いッ！」

スイレンの魔法によって召喚された魔物だということも忘れ、ボタンはたちまち相好を崩した。見た目だけでなく思考回路も幼いから、小さくて可愛いモノに目がないのだ。

「やンッ！　くすぐったぁいっ！」

仰向けに引っ繰り返ったまま抱きあげ、形よく膨らんだ己の胸に乗せたり、自分から顔を寄せてわざと鼻を舐めさせ、嬉しそうに笑ったり。

「この仔たち、スイレンちゃんのペット？」

「ええまあ、そんなようなモノね」

「私、この仔たちと遊んでいいの？」

「いいけど……っていうか、本当にいいの？　見た目はそんなだけれど、立派な魔物よ？　アナタの魔力を舐め取ってどんどん強くなるから」

「え……えぇっ!?　こんなに可愛いのにッ!?」

いまさら愕然とするライバルに、スイレンは頭を抱えたくなった。

こんなにも間抜けなボタンなのに、なぜか魔力だけは絶大だ。真正面から戦ったのでは絶対に勝てない。だからいろいろ策を練り、あの手この手で陰からこそこそ邪魔をしてきたのだが――。

（お姉様の策を採用するのは癪だけど、仕方ない。この機会に、きっちり教育しておかないと！）

気を取り直したスイレンは、冷ややかな笑みを浮かべてボタンを見下ろす。

「アナタ、私と友だちになりたいんでしょう？　だったらその仔たちを魔法で退治してみせて」

「え？　ぇえっ!?　で、出来ないよ、そんな……」

「大丈夫。そいつらはまだ小さいし、弱いから、必要最小限の魔力で済むはずよ。ただし、私の大事なペットでもあるから、致命傷は与えないでね」

「え？　え？　えぇぇっ!?」

じゃれつく仔犬たちを抱きかかえたまま、無理難題に涙目になるボタン。

スイレンに言われるまでもなく、こんな可愛い仔犬たちを傷つけたくはない。しかし魔力の精密なコントロールは苦手だ――というか、出来ない。

（ど、どうしよう、どうしよう……）

焦るボタンの頬に、

「くぅん？」

無邪気な目をした仔犬が鼻を擦りよせ、紅い舌を閃かせる。
「ひゃぅっ⁉　や、やぁんッ！」
くすぐったさに思わず微笑んでしまったが、背筋は逆に冷えた。スイレンが言う通り、仔犬型の魔物に魔力を吸い取られているのが分かったからだ。
ボタンが力を失う分だけ、仔犬たちの魔力が強まる。見た目はまだまだ可愛いが――。
「ふぁ……あ、ぁあっ⁉　だ、ダメだよぉっ！」
敏感な膝裏や瑞々しい太股にぬちゃぬちゃぴちょぴちょ触れていた温かなぬめりが、気がつけば股間に迫っていた。
どんなに無邪気そうでも、魔物はやはり魔物だ。愛くるしいルックスでボタンの心を虜にしつつ、いやらしいことをするつもりなのだ。
「やめて、ダメ……だ、ダメぇえっ！」
焦ってもがくが、もう遅い。
柔肌を這う熱い舌に魔力を舐め取られ、代わりに淫らな感覚を産みつけられている。振り回す手足に力が入らず、そればかりか――むぎゅっ！
「ふにゃっ⁉」
小さな前脚に踏まれた乳房に、快感が爆発。
「やだ、なに……なに？　なにっ⁉　む、胸が、あ、あ……も、燃え、るぅうっ⁉」
むぎゅ、むぎゅ、むぎゅ――硬い肉球に踏みしだかれた乳肉に、心地良い感覚が次から次へと産みつけられた。乳房が歪めば当然、しっとり汗ばんだ乳谷が擦れ合い、そこにも淡い肉悦が湧く。
「ほらほら、早く退治しなさいよ。ただし、致命傷を与えちゃダメよ」
「そ、そんなぁ……無理だよ、私には無理……」
「あらそう？　まあ、私は別に構わないけど」
スイレンの声が遠い。羞じらい焦るボタンの意識は、身体のあちこちにコロコロとじゃれついている仔犬たちに占拠されている。
それでいて――仰向けに引っ繰り返った身体は、もはや自由に動かせない。
（やだ、ダメ……ダメぇえっ！　か、感じている場合じゃ、ない、の……にぃいッ！）
頬も、腕も、脚も――無邪気な目をした仔犬たちにペロペロぴちゃぴちゃ舐められた柔肌が、甘やかに蕩けきっていた。握る拳にも力は入らず、魔法どころか手足を振ることさえ不可能。
さらに――。
「あ、あ……ああ、ダメぇえっ！」
無器用にもがく前脚に引っ掛けられ、コスチュームの胸元が大きくはだけられた。
ぷるるんっ！
形よい乳房が弾みながらこぼれ出し、桃色乳首が艶めかしく輝く。
「あらぁ？　どうしたのかしらボタンちゃん？　乳首がなんだか大きくなってるわよ」
「え？　えぁ……あ、あぅうっ⁉　見ないで、見ないで見ないで、笑わないでぇえっ！」
スイレンの指摘を受けて目を向けるまでもなく、ボタンはしっかり自覚していた。重圧から解き放たれた胸先の肉豆が、流入する熱い血潮に内側からノックされ、とくん、とくん、と拍動しているのだ。
ただでさえ敏感な乳首が、輝くほどに張り詰めて異様に感度を高めている。
「ふぁ、うぅ……くぅうっ！」
恥ずかしさと快感に呻き、形よい乳房が重々しく揺れると、ピンピンに張り詰めた表皮が空気に擦れて甘く切なく痺れてしまう。
そこへ――。
「ひっ⁉　あ、うぅうっ⁉」
ぬちょんっ！　ぴちゃんっ！
仔犬型魔物のいやらしい舌が、無遠慮に触れた。
熱いぬめりが掠めるたび、勃起乳首に快感電流が発し、火照る乳房に浸透して胸全体が熱くなる。
乳房に生じた肉悦だけでも意識が遠退くほど羞じらっているというのに――むぎゅっ！
「にゃっ⁉　そこはダメ、お股は……ダメぇっ！」
無器用を装った仔犬の前脚が、ショーツに浮き上がった肉畝をむぎゅっむぎゅっと踏み躙った。硬い肉球で秘裂を揉みまくるだけでなく、薄布越しにクリトリスを踏みつけて、
「はヒッ⁉　ひ、ひぃんっ⁉」
幼気な魔法少女を快感の矢で打ち抜く。
「うふふ……可愛い声が出たわね」
「わ、笑ってないで……た、助けてよぉっ！」
「んん？　どうして？」
「ど、どうしてって……ふヒャっ⁉　ああンッ⁉　だ、ダメ、やだ……やめてぇっ！　おっぱい出ない、出ない出ない、吸っても出ない……よぉおっ！」
叫ぶ声が快感に揺らぐ。
ボタンの胸に取りついた仔犬が、真っ赤な勃起乳首を咥え込み、ちゅう、ちゅう、と音が立つほど強く強く吸い立て始めたのだ。
「やぅ、あぅ……く、ぁあッ！」
乳は出ないが、快美感は閃く。
甘噛みされた乳暈も、小さな前脚に踏みまくられた秘裂も、蕩けるほどに気持ちよく――ボタンはなぜここにいるのか、どうしてこんなことになったのか、思い出せなくなりつつあった。
そんなとき――。
「――あ、ヤバいかも。臨界点を超えちゃった」
スイレンの愉しげな声が、遠くから聞こえた。
「え？　え……？　臨界点って……」
「そいつらって、実はひとつの魔物を魔法で小さく分割したモノなのよねぇ。魔力が足りない間はその姿で安定してるんだけど――アナタの魔力をたくさ

初めてでも安心!

思春期なアダム

ダイジェスト

朝だよー!

ふー!

女性上位の藤田家で今日も頑張る睦月少年!

藤田睦月(ふじたむつき)

妹 チアキ

末妹 ムツミ

姉 祝(いわい)

母

父

第1話

Iごく普通の少年・睦月。藤田家の家事を担当する彼の朝の日課は、姉や妹たちをベッドから引っ張りだすこと。だらしない大学生の姉、お年ごろの妹、かわいい小さな末妹に囲まれ、今日もごく普通の一日が始まる…。

伊部草マキナ

睦月少年の青春と初恋の学園生活！

密かに好きな女の子……

II学校ではにぎやかな(?)クラスメイトたちに恵まれる睦月。しかし彼が一番気になるのは、隣の席の寡黙な少女、伊部草マキナだ。しかしミステリアスな彼女に、なぜか声をかけることができず…。

魔少年からいきなりのキス!?
ここからすべてが始まった!

はじめまして会いたかったよ藤田睦月クン!

ニコォ♥

ルシア

なにこれっ!なにこれっ…

右目が……熱い…っ!!

ビキッ

ビキ

痛いっ!痛いよぉぉ!!

う…うぅぅ…うぅぅ…っ!

いま君は人間という貧弱な器を脱ぎ捨て神の領域に足を踏み込んだんだじきに慣れる

Ⅲ 帰宅途中に突如現れた美少年ルシア。そして妖しく微笑む彼からいきなりのキスを受けて取り乱す睦月。しかしキスがきっかけで、彼の右目に異変が起こる。妖しい光を放ち始める睦月の瞳。そしてルシアが言う“蛇眼”の覚醒とは!?

Ⅳ「睦月に眠る“蛇眼”を解放した」と歓喜するルシアが今度は真っ二つに！　魔少年を切り裂いたのは、大剣と炎の翼をまとった「天使」と称する女の子だった。
君は……？
〝エンジュ〟よ アンタを守ってあげに来た――
――天使
ビチャッ
天使少女と睦月の瞳に秘められた力の関係は――？

第2話

V“蒼炎のエンジュ”と名乗る天使少女は炎と大剣を操り、ルシアとバトルを開始する!! 彼女の目的は「睦月を護ること」というが、彼には構わずルシアと切り結ぶエンジュ。炎の翼の発する豪火と大剣の鋭い刃にルシアは追い詰められていく!

VI 不利を悟ったルシアは退却し、それを追撃するエンジュ。ドタバタの中、睦月は家路につくが、無意識のうちに"蛇眼"はその力を発揮していた。彼とすれちがい視線を浴びるだけで妖しい発情に襲われてしまう通りすがりの女性…。

カラダが熱…くて…むずむずして…おかし…いのぉ…っ

はぁ

たす……け……

はぁ

はぁ

むっき……

おにぃ……ちゃ……

はぁ

睦月の視線が妹まで…!!

VII どうにか家にたどり着いた睦月。しかし玄関で睦月の視線を浴びたチアキの身体に異常が! 突然発情して悶える妹。そしてそこにルシアの放ったスライムが襲いかかる!!

…?

火照ってる…!? どうして急にこんな……

ピク

ピク

きゅぁ……

…あへぁ……♥

はぁ

は

“蛇眼”の力とスライムの攻撃に絶体絶命!?

やっ……やめろっ!

こっちくるな!!

思春期なアダム
ダイジェスト

セクシーなお姉さんが睦月を妖しい世界に導く!?

お咎めはなしにしておきましょう♪

蛇眼を封じる一喝!!

人間は人間でいるほうが幸せよ

VIII スライムを焼滅させ、睦月の〝蛇眼〟を閉じて危機を救ったのは妖艶な褐色美女。彼女と睦月の出会いから一体何が始まるのか……?

……あ

元に戻った…

可愛い顔してるじゃない

〝蛇の目〟なんかよりステキよ♪

——世界はもう君を中心に動き出しているわ

←次のページからいよいよ思春期なアダム最新話が始まります!

大増24ページ!!『思春期なアダム』最新話はここから！

裸での逃走を強いられるくノ一に
容赦なく貞操の危機が迫る――！
猟辱島
スレイブハンティング
第二話 裸の荒野
小説 NOVEL 大熊狸喜
挿絵 ILLUSTRATION 池田靖宏

裸での逃走を開始した、火憐と霧華。
くノ一の乙女はフと振り返り、裸身を隠しつつ反対方向に向かう妹少女を案じる。
これから二人は、強姦魔が跋扈するこの島を、裸のまま出口までたどり着かねばならないのだ。
太陽に照らされる格闘少女の背中は、小さくて儚げで、格闘家である事をつい忘れそうになる。
オーバーニーとシューズだけにも見える後ろ姿は弱々しく、頭に巻かれた鉢巻きが裸尻をバックに左右に靡いて、更にフェチっぽくも感じさせた。
走るに合わせてプルプルと揺れる小振りなヒップは、異性を引きつけるに十分すぎる、危険な柔曲線を見せている。
(霧華……負けないでね!)
それだけを強く念じて、火憐も再び裸の逃走劇を開始した。
スタート地点から東の土地は、僅かに雑草の生えるなだらかな丘陵地帯。丘を下った数百メートル先には草原があり、更に進むと林が見える。
「出口の一つは、この先にあるわ」
リストモニターで確認しながら、とにかく身を隠す事が先決だと判断。
黒髪の乙女は、林を目指す事にした。
郊外で裸にされている、自分たち。
しかも賭け事の対象にされているのだから、ドコかで監視されている事は確実だろう。
意志の強いくノ一とはいえ、どうしても両腕で裸を隠しながらの逃走になる。
霧華と同じく、裸の火憐。
マフラーとアーマー手袋とアーマーブーツのみという、恥ずかしい半裸姿だ。
首に巻かれた黒い首輪にも、屈辱感とともに羞恥心を煽られてしまう。
(こんな格好で…!)
鍛えた身体と心とはいえ、やはり女だ。
裸身に剥かれただけで本能的に肌を守ってしまうし、闘志だって萎縮させられてしまう。
片腕で両の巨乳を、片手で股間を隠しながら、お尻を引いて必死に走る。
そんな姿は、自分でも滑稽だと解っていた。
解っていて恥ずかしいけど、きっと見られている以上、他に隠す方法なんてない。
走りながら周囲を警戒。
レイプ魔の気配や影を探るとともに、隠して設置されているであろうカメラも探していた。
現在、視界にはどちらも確認できてない。
(簡単に見つけられるなんて思っていないけど…)
そんな事を考えていたら、首輪から、自分たちを攫わせた黒の十一号の声が聞こえてくる。
『さぁ皆様、二人のフォックスはそれぞれ、東と北西へと逃走を開始した模様です。おや、意外と近くにハンターたちが』
「えっ――っ!?」
男の言葉に、ゾッとさせられた。
緊張で、心臓がドキュッッと高鳴る。くノ一は周りを注視しつつ、思わず裸の身を屈めた。
と同時に、剥き出しな後孔にツンと雑草の先端が当たって、思わず小さな悲鳴が漏れる。
「ひゃっ! び、びっくりしたわ…」
普段だったら気にも留めない、ほんの短い植物。
名も知らぬ緑草に菊座を突かれ、あらためて全裸である事を、恥ずかしく実感させられてしまった。
口元を押さえながら、足下に雑草のない事を確かめつつ、再び屈み込む火憐。
小さく丸まった女体は双乳をタップリと集め、両腕を食い込ませて柔らかく谷間を深める。
しゃがんだ巨尻は丸く張り出しお尻頬を開いて、大地の数センチと近くに後孔を晒していた。
処女の割れ目もムチリと肉厚に押され、穢れのない粘膜をゆっくりと剥き身にする。
桃色の姫処は、火憐も気づかない足下の超小型カメラによって、モニターに映し出されていた。
処女の割れ目と薄く色付く後孔のアップ。
そして隠し撮りに気づかないフォックスを、富豪たちは嘲笑している。
そんな、自身の状態も気に留められないほど、くノ一の乙女には余裕などなかった。
(……男たちは……?)
強姦魔たちハンターは、命を賭けた陵辱者だ。緊張と危機感で、乙女の心臓は高鳴り続けている。
――ドキン、ドキン、ドキンッ!
周囲の気配を探ったものの、しかし危険な気配は感じられない。
静かな数分が過ぎて、ようやく気がついた。自分たちは、からかわれたのだ。
(……あの男っ!)
頭に来るけど、今はどうしようもない。
火憐は立ち上がると、同じ羞恥を受けたであろう霧華を想い、林に向かって再び裸身を走らせた。
膝丈の草原をしばらく進んだら、茂みを越えて林に突入。
くノ一は、僅かだけ安心する。
「ふぅ……」
周囲から丸見えだった丘陵地帯に比べれば、十分に身を潜める事ができる場所だ。
腰まで茂った雑草に隠れて周囲を警戒しつつ、更に高い木を背に、手足のアーマー裏をチェック。
背中を丸めて隠れるようにしゃがみ込むと、忍術の薬品を取り出した。
巨乳は左右の腕に挟まれて柔変形をして、割れ目は屈んだ腿に押されて処女粘膜を露出。
衣服と一緒に忍道具も奪われてしまったけれど、

ここに隠してあった忍術の薬品だけは無事だった。
残っていたのは、掌サイズの小袋が五つ。
「着火薬が二袋と、術油が三袋……」
油の小袋は四つ隠してあったけど、一つは破れてしまっている。
「炎の術が使えるのは、もって四回……いえ、五回が限度ね」
手頃な石と葉っぱを利用して、術油と着火薬を手早く混ぜあわせて、団子状に小分けする。
一つ一つの団子は指先ほどの大きさしかなく、普段使っている仕掛けの四分の一もないのが、正直心許ない。
粘土状に生成した忍術の仕掛けを、両手足のアーマーなど、身体の各所に塗りつけておく。
それだけで、全ての忍薬を使いきってしまった。
「とにかく、これで乗りきるしか……ハッ！」
仕掛けを終えた直後、くノ一は強烈に邪な気配を察知。慌てて裸身を庇いつつ、大木の陰に小さく潜んだ。
忍務とは違う緊迫感で、心臓が鼓動を早める。
――ドキンドキン、ドキンドキンッ！
息を殺して注視していたら、まるでくノ一を追いかけるように、南西から二人の男が歩いてきた。
筋肉質な中年男たちはなんと全裸で、股間を隆々と立たせたまま、大股で闊歩している。
一人は頭髪が薄く、もう一人はセミロング。
距離があるとはいえ、処女の火憐は生まれて初めて、男性器を直視してしまった。
（――っ!!）
写真なんかとは全然違う、生々しい生命感。
幼児の手首ほどもある肉の質量を、パンッパンに張り詰めさせている。
本体表面は赤く充血して、大小の血管がツタ植物のように絡みあい、ビクッビクッと脈動していた。
一際太い先端部分は、まるで人とは別なる邪淫な生命体の如く、艶を見せる毒々しい赤色。
最先端の割れ目は口を開き、透明な粘汁を涎の如く垂らしていた。
多少の形の違いこそあれ、二人のハンターの勃起は歩くに合わせて首を上下させて、しかしガチガチに天を向いて女を求めている。
（なっ、なんて…醜怪な姿…！）
処女の火憐からすれば、嫌悪と嗚咽と恐怖だけしか、感じられない。
鍛えたはずの、くノ一の意志と肉体。なのに、まるで凶暴で巨大な蛇に怯える仔猫のように、全身が硬く縮こまってしまっていた。
天才くノ一の乙女だけど、実は床術どころか、性に関する体験は自慰くらい。知識も低学年レベル。
それは、一族の掟であった。
霧華は久遠寺流忍術の頭目である。いつか婚姻を結ぶであろう男性は、一族の頭となる存在だ。
里として最上の地位となる男性に、他者が触れた女性を捧げるのは相応しくない。
同時に、頭目乙女の無垢なる肢体と操を捧げるという事は、一族全ての命運を託す。という意味でもあった。
そんな処女くノ一の目に今、女を強姦する事以外何もない肉欲の勃起が、その姿を隆々と見せつけていた。
全裸の陵辱者たちが、コチラに近づいてくる。
（こ、来ないで…っ！）
もし見付かってしまったら、犯されてしまう。
最強のくノ一なのに、処女の恐怖感で心が覆われてしまい、身体は全く動かなかった。
そんなエモノに向かって、二体のハンターがズンズンと接近。
あと四メートル、三メートル、二メートル。
（に、逃げないとっ――でも、今動いたら…！）
勃起の発する圧迫感と威力で、処女くノ一の脳裏も軽く混乱。
そして、勃起が目の前。
（ひぃっ――っ！）
男の裸腰が鼻先数十センチと迫って、そして。
（――っ！）
二人は一メートル以内にまで接近しながらも、隠れる火憐に気づく事なく、エモノを探して通り過ぎていった。
（……い、行ったわ……）
遠ざかる男たちの背中を見送りながら、火憐は小さく、ホッと安堵の吐息をこぼす。
十数メートル遠ざかるのを待ってから、出口への行程を再考。
「べ、別の方向から出口に向かう……いえ、逆に距離を取ってあの男たちの後をつけた方が、見付かりにくい分、安全と言えば安全だわ……」
そんな計画を練っていたくノ一は、頭上の強烈な気配に、一瞬だけ遅れて気づいた。
「――ッハっ!?」
初めて直視した男性器に怯えてしまい、未だ動揺していたのだろう。イヤな気配に背筋がゾっとして振り仰ぐも、時すでに遅し。
火憐がみとめたのは、樹上から全裸の男が飛び降りてくる、その瞬間だった。
まさか木の上を移動するハンターがいるなんて、想像すらしていなかったくノ一。
「ゲッハアアアァァッ！」
ニヤつく落下男から脱兎の如く身を避けさせるものの、駆け出す直前の背中を、ドカッと思いっきり蹴られてしまった。
「っ――くあぁっ！」
落下の勢いを乗せた蹴りで、雑草の中へと勢いよ

著者近況 私がロボ好きでLD好きと知っている友人が、今年の誕生日に「超力ロボ　ガラ○ト」のLD-BOXをプレゼントしてくれました。ありがとう友よ！　ていうかよく見つけたな。

く転がされる。
男の叫びと、ガサガサ鳴る草の音に、通り過ぎた二人の男も気がついた。
「い、いけないっ！」
危険な状況に、一瞬で闘志を燃やす天才くノ一。
痛む背中を無視して体勢を立て直しながら、襲ってきた敵を確認する。
中年の男はやはり全裸で、中肉中背。股間の逸物をギンギンに立たせながら、髭の生えた口元をだらしなくニヤつかせている。
急いで逃走を図る、裸の火憐。
駆け出すより早く、陵辱者が襲い掛かってきた。
「女ダァァッ、エッヘヘヘヘぇ！」
伸びてくる男の掌に、防御の手刀を繰り出す。
しかし不安定な体勢が災いして、両掌同士をガッシリと組みあう格好になってしまった。
真っ正面から組みあった瞬間、二つの巨乳がタプッと大きく弾む。
「しまった……くっ！」
欲情に輝く男の視線で、丸い双乳が視姦された。
「ォオッパイダァァッ、女のオッパイィィッ！」
乙女の裸乳を目の前にしたら、勃起は更に硬度を増して、ビクンッと蠢動。
対する火憐は、裸での掴みあいに腰が引けた。
裸尻を突き出す格好は、身体に力が入らない。
必死に抵抗する裸身は力んで震え、剥き出しの乳房もプルプルと柔振動。
組みあった両腕を男の腕力で左右に拡げられると、裸のバストや先端の媚突は更に、陵辱者の眼前へと近づけられてしまう。
陵辱の男は、裸体の香りを楽しみながら、穢れを知らないファーストリップを狙ってきた。
「ゲヘヘヘッ、い～い匂いダァァッ。ぶちゅうぅ」
「やめっ――いやよっ！」
脂が浮いたようなテカテカの唇を、くノ一は美顔を逸らして必死にかわす。
そんな取っ組みあいの二人の姿を、通り過ぎた男たちにも見つけられてしまった。
「女がいたぞおぉっ！」
「やったぁっ！　犯して犯してぇっ、この地獄から脱出だあぁっ！」
火憐を目指して駆けてくる二人の目は、狂気の光にランランと輝いている。
生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされた者の、まさしく生きる為だけの、獣の眼光だった。
（このままでは…っ！）
捕らえられて、犯される。
女の本能で畏怖したくノ一は、一瞬で半裸である事も忘れて、戦士として抵抗した。
「っ――くっ！」
裸の身体を捻って、右脚を後ろへと伸ばして更に背後にまで屈曲し、全身を力いっぱいに引く。
左片足立ちの前後開脚で開かれた裸尻が、斜め下からのカメラで、富豪たちに晒される。
柔軟に鍛えた女体を更に柔らかく反らせると、巨乳が天上に向けられて大きく弾んだ。
右脚を、発火装置を仕込んだポニーテールに触れさせると同時に、忍術発動。
「いくわよっ！」
反らした全身のバネを一気に解放し、靡く黒髪で右脚を擦る。途端に、右膝からつま先までが、真っ赤な炎に包まれた。
「久遠寺忍術、赤炎の斧っ！」
発火と同時に高速で放たれた右の膝が、目にも留まらぬ早さで蹴撃。
――っっボォオッ、ドっスうぅっ！
火憐の両腕を掴んでガラ空きな男の腹部へと、脹ら脛まで大きくメリ込んだ。
「っぶぐおぇぇぇぇぇぇぇ……っ！」
胃袋と鳩尾を蹴り上げられた強姦魔は、ゲロを吐きながら顔面を真っ青に曇らせる。
掴んだエモノの両掌から痙攣する掌を崩れ落としつつ、ガックリと膝をついて草地に転倒。
横向きに倒れた髭の強姦魔は、気絶しながらも勃起をビクビクッと蠢動させていた。
「っむぐ…っ！」
まるで別な生物みたいな男性器の有り様に、逃走を図った処女くノ一は、小さな嘔吐感を覚える。
（に、逃げなければっ――）
意識する前から、逃走を開始していた肉体。
しかし一歩だけ遅く、戻ってきた男たちに襲い掛かられてしまった。
「女ァァッ、十年ぶりの女アァァァァッ！」
「あぁっ――っ！」
頭髪の薄い全裸中年男に、背後からガバッと抱きつかれる。脇の下からしがみつく男の掌に、左右の乳房を鷲掴みにされた。
右掌で左を、左掌で右乳を捕らえられると、男の指で柔軟に揉み遊ばれる。
「女の乳乳乳ィィッ、ゲッヘヘヘヘ！」
興奮で力み上がった太い指で、男を知らない処女巨乳が、柔揉み陵辱に晒された。
「ひっ――っ！」
生まれて初めて乳房を揉まれて、意識は一瞬だけ動転させられる。しかも獣欲まみれの強引な乳揉みに、乙女の理性は嫌悪と屈辱しか感じられない。
「こ、このっ――はっ!?」
自由な肘で男の頭部を叩こうとしたら、前から襲ってきたもう一人の男に、両腕を掴まれた。
「ぉお…犯す、犯していいんだ……ハハハッ！」
セミロングの中年の顔が、意外なほど近い。
（こ、こんなに、接近を許して…！）

著者近刊 『ダークエンパイア 反逆の流星たち』、『姦落の巫女姉妹』シリーズ、『白翼の姫騎士ナイトスワニィ』、『双子づくり！』、『キリMっ！』、『妹嫁』『わたしが倒してあげるんだから！』『オトミコ！　僕は男の巫女娘』ほか 好評発売中！

火憐はそこまで、追い詰められているのだ。
そして驚愕したこの一瞬の隙で、処女くノ一は全ての抵抗手段を奪われてしまう。
両腕は、男の力で頭上へと持ち上げられて、上半身ごと動けなくされる。
更に両脚は、ブーツの上から男に踏まれて乗り上げられて、全体重をかけられてしまった。
「う、動けない…っ！」
背後から乳房ごと抱きすくめられて、前からは両腕も両脚も押さえつけられる。
頭一つ分も背の高い男たちに押さえられると、もう抵抗どころか、身動き一つ取れなかった。
「あぁあ、女の匂いいぃっ、甘くてぇっ、ボッキするぜぇぇっ！」
「くうぅ…っ！」
全裸の強姦魔二人によって、裸の女体が前後から挟まれる。
密着された男たちの身体は、劣情の熱と汗にまみれていて、肌感触はヌルりと気持ち悪い。
必死に振りほどこうとする両腕だけど、興奮した男の腕力によって、簡単に押し返されてしまう。
「この……うぅ」
背中から揉み上げられる二つの巨乳が、イヤらしく指を食い込まされながらタップリと持ち上げられて、乳首ごと男たちの淫視線に晒された。
「乳首乳首イィッ！」
「プルプルしやがってっ、ウッヘヘヘ」
桃色媚突が視姦されると、強い羞恥に襲われる。
女の身体は、牡の欲望を本能的に感じて受け入れるらしい。揉み上げられて晒された淡い先端が、プクン…と充血をして硬化を見せた。
薄髪の男によって更に二つの乳脂肪が、しつこくしつこく、絞られるような揉み愛撫に晒される。
——もミゅるタぷプるむリゅ、もみュるねムるュもみゅ。
男の大きな掌で弄ばれ続けると、乳房全体が熱を帯びて、蕩けさせられてゆくような感覚。
忍の訓練や夜の自慰などとは、全然違う。
初めて受けた、異性による性の甘覚に、処女くノ一は驚かされていた。
（な、何っ…こん、んな…っ！）
望まない男の嫌悪する双乳陵辱。
なのに、巨乳から胸部、上半身全体までもが、甘く優しい熱で蕩かされて、脱力させられてゆく。
双乳揉みで乳房全部がトロリと痺れ、心臓はトクトクと、危機感とは違う早鐘を打つ。
処女の肉体が性熱で蒸されると、恥辱と望まない性感で、プルプルと震え始めた。
「ぐくっ——こ、の…くふっ！」
上半身の力が、一方的に抜かれてゆく。
このままでは、強姦される。
解っているのに、愛撫で辱められてゆく乙女の肉体は、一秒ごとに一瞬ごとに、抵抗の力を奪われてしまう。
（いっ、いけない、いけないぃっ！）
意識ばかりが焦って、しかし肉体は、男たちのするがまま。
愛らしく粒立つ乳輪が、牡たちの獣欲を更に湧き上がらせたらしい。
耳元から、獣熱の籠もった恐ろしい言葉を囁かれた火憐。
「ぉオレはっ、ケツケツケツうぅっ！」
何の事かと思った瞬間、肩幅開脚で固定されたくノ一の裸尻に、堅くて熱い異物が押しつけられた。
意識が答えを探るよりも早く、女体が恐怖で理解をする。
「ひぃぅっ——っ！」
薄いカフェオレ色の処女肛が、汚らわしい強姦魔の勃起で、ムリッと押されたのだ。
（お、犯されるっ——っ!!）
処女の本能が、恐怖と嫌悪で逃れるように、腰を前方へと突き出して裸尻を浮かせる。
しかし。
「ぉオレも、犯すぅっ！」
両脚を踏む男が一瞬だけ腰を落とすと、前下方から、処女の粘膜に熱い男根が押しつけられた。
——むちりっ！
「っんくあぁっ——っ!!」
自身の指以外、誰も知らない処女性器が、強姦男たちの熱肉で押し上げられる。
亀頭の鈴割れで、肉芽から花弁、尿口から膣孔までを、ヌルッと撫で陵辱。
途端に、背筋が泡立つほどの汚辱感と同時に、自慰以上の感電で、一瞬で脳裏まで走り抜けられた。
「んぃっ——や、やめっ、なさいぃぃっ——っ!!」
前後から強姦の肉棒を押しつけられる、処女の裸腰。逃れようと必死にくねらせるものの、その動きはヒップと女性器で二人の亀頭を愛撫する事にしかなっていない。
「おぉうっ、この女女女ぁっ！　犯してくれって言ってるぜぇぇっ！」
猛る二本の勃起からは、飢えた肉食動物の涎の如く、透明なガマン汁がコプコプと溢れこぼれる。
処女粘膜が勃起でこねられながら、穢れた男汁でヌチヌチと粘糸を纏わされてゆくのが、解る。
「きっ、気持ち悪いぃっ！」
外からの性責めによる嫌悪感。
しかし本当の恐怖は、粘膜を責める勃起に呼応するかのように、熱を上げ始めた子宮だ。
（わ、私の、身体が…！）
自ら強姦魔を待ち望むかのように、子宮がトクトクと性反応をさせられている。

カメラで映されるくノ一の処女粘膜と菊肛は、震えながらも拙く、愛しげに勃起を熱愛撫していた。
（そんなのっ、いやっ！）
踏まれるつま先を必死に伸ばして陵辱のペニスから逃れようとしたら、男たちは更に余裕があった。
肩幅で開脚させられた脚間にセミロングの膝を入れられて、より左右へと開脚させられる。
火憐よりも身長のある二人が少しだけ膝を伸ばすと、開かれた処女粘膜と処女媚尻が、陵辱勃起に突き上げられた。
「っひぃっ――っ!!」
犯される恐怖だけで占められてゆく、処女くノ一の脳裏。
「強姦強姦強姦ンンッ、ゲッヘヘヘ！」
ピタリと閉じられた後孔と膣孔が、レイプ魔の肉をムリヤリ押し込められてゆく。
陵辱ペニスに追い詰められる、前後の処女孔。その映像は、富豪たちに大写しで公開されていた。
「いっ、いやぁぁっ!!」
更に限界までつま先を伸ばすものの、男たちの膝はまだまだ余裕で、尚もペニスを挿入してくる。
二つの処女肉孔が一センチほどまで辱肉を呑み込まされると、女体を前から固定する強姦魔が、更なる恥辱を強いてきた。
両腕で美顔を固定するセミロング中年が、ヌルヌルの脂唇を寄せて、乙女の処女ベーゼを狙う。
「く、唇も、もらうぞぉ…んちゅうぅぅっ！」
「だっ――んちゅぷっ！」
（くっ、唇がっ!?）
僅かな抵抗すらできずに、火憐は初めての唇を、見知らぬ強姦魔に奪われてしまった。
異性を知らないくノ一のプルプル艶リップが、強姦魔の分厚い唇に、完全密着。更に吸引。
「ぷっちゅうぅぅっ、ちゅぷっ、んちゅくちゅっ！」
「んうぅっ――ぐんんんっ！」
唾液まみれの熱いナメクジみたいな唇で、乙女の唇がミッチリと包まれて、吸われる。
（キスっ――唇ぅっ!?）
里の掟に従い、性経験のない霧華。
普段は女王様な頭目くノ一だけど、いつか結婚して、里を従えるであろう逞しい男性にファーストキスを捧げる事を、実は夢見ていた。
それなのに――。
乙女の淡い憧れが、最低な男の強引な粘膜吸着によって、完全に踏みにじられてしまったのだ。
自尊心の柱に、小さいけど深いヒビが走る。
穢された惨めな現実に、悲しみと絶望と、強烈な怒りと嫌悪感が湧き上がってきた。
しかし、そんな一瞬さえも更に汚辱してくる、下劣な姦牡たちの不潔な生態。
（このっ――うぐぅっ！）
数日前の生魚な如き腐臭の接吻に、くノ一の鼻腔から脳までが、汚臭漬けにされてゆく。
（臭いっ！　このっ、男たちぃっ！）
匂いと嫌悪と汚辱感だけで頭の内部から染められてゆき、胃の腑が強烈な嘔吐感に襲われる。
頭部や肢体を揺すって抵抗するも、背後抱きと両脚固定、両腕拘束で固められた女体では動けない。
揉まれる乳房がプルンッと揺れて、犯される寸前の開脚女腰を左右に振る事にしか、ならなかった。
男の吸引力で吸われる唇が、力強いヌル舌で更に割られる。
無意識が危機を感じた直後、淫らな蛇の如く、濡れた舌が入り込んできた。
「んふうぅっ！」
生臭いだけでなく、ヌルッとした粘液すら纏っている男の舌。
同時に感じた、薬物の匂いと苦味。
唇を犯されたくノ一は、更に媚顔を上へと向けられる。重力に従って、古い卵白の如き唾液を、タップリと流し込まれてきた。
「ぐんん～っ！」
（だっ、唾液が…っ！）
「ぶっふふふうぅ！」
美しく見事なプロポーションの天才くノ一に、自らの唾液を飲ませる強姦魔。
笑いながらその興奮を高めてゆくと、処女を狙う勃起は、更に硬度を増した。
下からは双孔レイプの勃起を突き上げられて、上からは唇を塞がれて女体を押し下げられてゆく。
前後からの密着で固定された乳揉み女体には、もう犯される以外、何もできなかった。
男の舌にツルツルの歯が舐められて割られ、怯えるくノ一の舌までもが、舐め愛撫に晒される。
「ぶちゅっ、んちゅぷ、んぶふふふっ！」
生臭い唾液が流し込まれると、性興奮させられた女体は火憐の意志に関わりなく、こくこくと溜飲。
後孔と膣孔への勃起責めも、一ミリ一ミリと挿入の深度が増されてゆく。
「んんっ、くく…っ！」
（こ、このまま、では…っ！）
強姦される恐怖と逃げ場のない絶望感に、全身の肌が霧状の汗を纏ってくる。
巨乳を揉みながら肛門を責める背後の男が、狂った言葉を吐きつけてきた。
「お前を犯して借金返済返済ィッ、何度も中出しして賞金もらって、シャバに出る出る出るウゥッ！」
（っ――このっ！）
絶対の危機の中、女の理性が、ゴォッと強い怒りに燃えた。
強姦魔のペニスで処女膜を押された直後、火憐の無意識が反撃。口内を舐め嬲る男の舌を、噛み切る

新米捜査員！麗子発動!!

File 4

漫画／嘉納あいら

いくつになっても夢見る女の子？

誰？

嵐の前の静けさ…

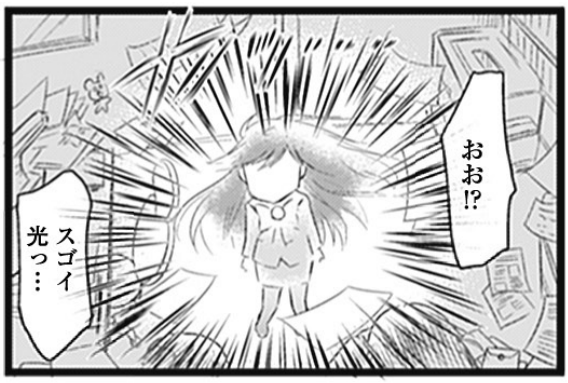
飛んで火にいる格好のエサ

月に代わって悪事を正す!!

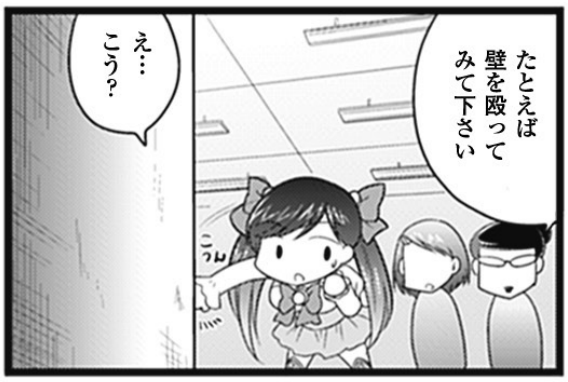
宇都宮麗子
世間知らずで一生懸命な新米刑事。いろんなキワモノ捜査に参加する。

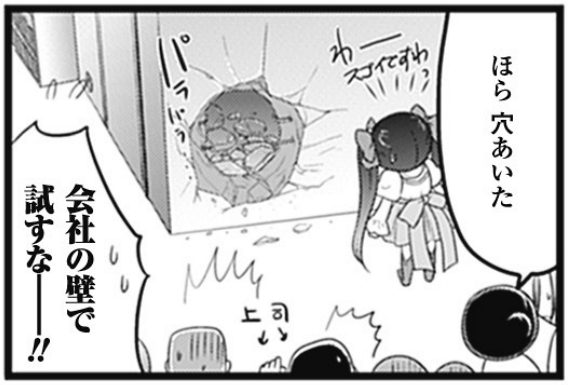
潤子先輩
麗子の先輩刑事。キワモノ捜査を麗子に回す張本人。

メイクアップ完了!?

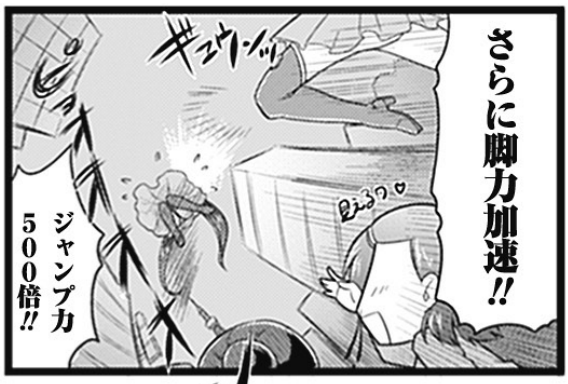


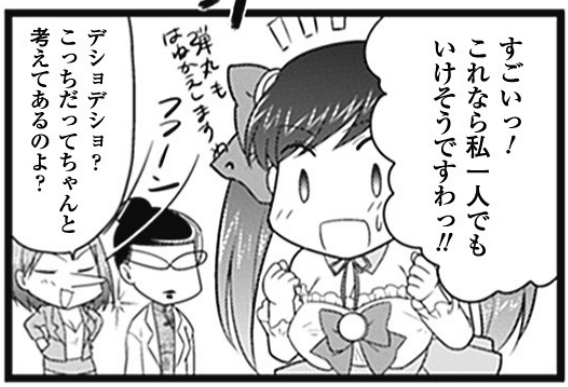
損害賠償

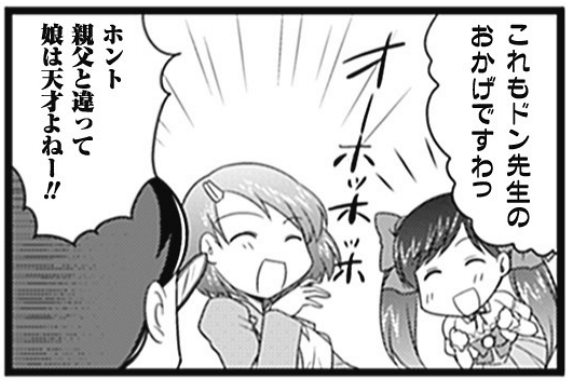




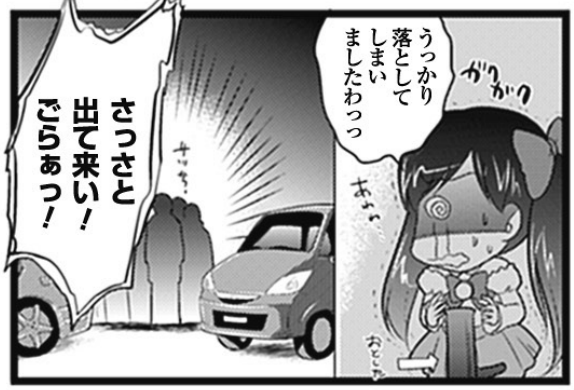
根に持つ紋舞蘭







ここだけ登場



改造少女
フェニクスローゼ
ヒロインは白濁の中から蘇る
小説 NOVEL／千夜詠（せんやよみ）
挿絵 ILLUSTRATION／草草饅（そうそうまん）
正義に燃える女子学生が改造されて――
守るべき民衆たちの白濁に溺れる!!

十数年前頃から世界中に現れ始めた悪の秘密結社の数々。同時に彼らに対抗するヒーローもまた活躍していた。

現在、数十ほどはあった悪の組織も殆どが壊滅し、今でも活動しているのは数えるほどしかない。それでもまだ悪が潰えることはなかった。その一つが「地域住民の生活が第一な悪党」であった。

今ここに、新たな戦いの火蓋が切られる。

＊

砂塵舞う採掘場跡地に、重低音が響き渡った。土煙が高く舞い上がり、地響きが起こる。

ジャックされたバスを中心に、その周囲を、距離をおいて取り巻いたパトカーに警官隊。そして、報道のカメラが陣取っていた。

彼らが固唾を呑んで見つめるのは、まさしく死闘である。

蛸のような上半身に、人の下半身のそれを持った怪人が、また連続してゴムのように伸びる触手を放った。その一撃、一撃で、ダイナマイトのような爆音が弾ける。

「おのれ、ちょこまかと。こいつで、どうだ！」

八本の触手が一斉に彼女に襲いかかった。

ドカァァァ――ンッ！

これまでよりも一層強い衝撃が一帯を震わせ、着点からの気のウェーブに人々は堪らず瞳をきつく閉じた。

立ち込めた砂塵の霧。

戦いはいったいどうなったのか？頭を押さえて、地に伏した報道陣。その間にもカメラは、はっきりと捉えていた。

風が吹き抜け、現れ出る肢体。凛とした声が響いた。

「そんな攻撃で、正義を挫けるはずはありません。さあ、今度はこちらの番です」

結わえた黒く長いポニーテールが揺れている。機械的なアーマーが、肩から胸の脇、脚部に装着されているが、乳房から太股までは、その流曲線で描かれた身体つきそのままを見せつけている薄いインナーであった。女豹という表現がぴったりとくるしなやかな四肢。腰回りはよく括れながら、その上下は極端な隆起で、豊満に形よく肉付いた臀部に、特に極端に迫り出した胸果実は、男性の視線を捉えて離さない。

常人を圧倒的に凌駕する知覚で相手の攻撃を読み、強靭なバネと身体能力で高く早く移動する。しなやかで弾力のある肉体はあらゆる攻撃を無効化する無敵の可憐な改造美少女。

正義を貫き、悪を断罪する彼女こそ、鮮烈に現れたニューヒロイン、フェニクスローゼである。

「ブースト、スパイラル、キークッ！」

上空に大きく飛び上がったヒロイン。一度身体を捻り、伸ばした片足が空気との摩擦で焼けて真っ赤に染まる。

キュィィィンッ！　バチバチッ！

蛸怪人のボディにクリティカルヒット。数十メートルにわたって敵の身体を押し込みながら、採掘場の土壁に激突した。

「ぐぇぇぇぇぇぇぇっ！」

ズガガガッ！　爆炎が大きく舞って、辺りに衝撃が散っていく。

＊

昨日のことである。学園生徒会所属、風紀委員長である鳳凰寺翼。彼女はこの日の放課後もまた自主的に街で見回りを行っていた。

「うむ、今日も……事件はないわね」

自身の学校の生徒に関することだけでなく、あらゆる不正を見逃せない。そんな性分であり、正義をこよなく愛していた。妄信と呼べるほどに。

それには理由がある。幼い頃、学校に現れた怪人に捕まった翼は、とあるヒーローに助けられた。その名もフェニクスサンダー。以来、彼に憧れ、ずっと自分もいつか悪を倒せるような大人になりたいと思ってきたのだ。

そして、その夢が叶う時がやってきた。

突如現れた悪の怪人フンサイダー。対峙するは、彼女が憧れ続けたフェニクスサンダーである。

全盛期をとうに越えたヒーローは最強の怪人に追い詰められ、翼は彼のピンチに堪らず戦いの中へと飛び込んだ。

怪我は大したことはなかったがフェニクスサンダーを庇ったお蔭で知り合いになる。

六畳の一間。トイレ共同、バスなし。絵にかいたようなオンボロアパート。

どっこいしょ、と小さく呟くようにその男は丸い卓袱台の前に座った。無精髭を生やし、ランニングシャツに、ボサボサの髪。落ちぶれ感全開の中年男は、缶ビールのプルタブを開けて、よく冷えた苦味で喉を鳴らした。

彼の向かい側に少女が正座している。黒髪を後頭部で束ねた長いポニーテールで、一見して生真面目で、凛々しさを醸し出した美少女であった。紺のブレザーにチェックのプリーツスカートの制服姿をしている。

この場所とその住人とは、余りにも不釣り合いであったが、やってきたのは少女側の意思であった。

夕陽の西日が罅の入りかけた窓ガラスから差し込んできている。赤く染まった男の顔を少女は真っ直ぐと見つめていた。

「お願いです。もう一度、あの怪人と戦って、人々の平和を守ってください」

翼は正座の状態から深く頭を下げた。

対して、男は、グイッと缶ビールを飲み干しながら、じとっと少女の姿を見つめている。

「んあ、俺さあ、もうヒーローやめようかと思ってんだよね。三十すぎて、いい歳して、戦いの疲れが、二日後くらいにやってくんだよね」

「そんな……」

小さい頃、初めて出会ったヒーローが彼だった。小学校の運動会に乱入し

た怪人に捕まりかけたその時、さっそうと登場し、助けてくれたのだ。
「そろそろ潮時だって、思ってたんだよね。引退して、定職について……」
ボロボロと頭を掻く中年男。
「あ、貴方が悪と戦わなくては、いったい誰が……」
憧れ続けたヒーローからは聞きたくない言葉に、がっくりと肩を落とす。そんな翼の全身を中年男は値踏みするように視線で舐め回していた。
制服の上からでも豊満さの分かる胸の膨らみ。きちんと正座して閉じられた太股は、スカートがずれ上がって、むっちりとした白い艶やかな肌が覗けていた。
ビールなのか、生唾なのか、ゴクッと何かを飲み込む音がする。
「ふーん、じゃあさ……、君が代わりに戦ったら？」
「え……っ!?」
「いや、だからさ、君が代わりにヒーロー、いや、ヒロインになって、悪と戦ったら？　改造してあげるから」
「へ……、えぇッ!!」
ボロアパートのガラスが割れてしまうかというほど驚きの声を張り上げた。そしてモジモジしながら、
「い、いえ、わ、私なんか……、何の取り柄もないし……、そんな、私が、ヒ、ヒロインだなんて……」
「じゃあ、やめるか」
「すみません、なりたいです。正義の味方に」
頭を畳に擦り付けた。
小さい頃からずっと憧れ続けてきた正義のヒーロー。少女はいつしか、守られることよりも、自分の力で誰かを守りたいと望むようになっていた。
（私が……正義の味方に……。自分の手で悪を倒すことができる！）
六畳一間の押し入れから取り出された手術用のベッドは大の字を描き、手足を拘束するベルトがつけられていた。
先程のランニングの格好に白衣を羽織った中年男。
「コホン……。では、これより、改造手術を始める」
「は、はい」
ドキドキと鼓動が鳴る。こんなアパートの中でという不安や、痛くはないのだろうかといった心配もあったが、それ以上に気分は高揚している。
「よし、ではまず、服を脱いで、全裸になりなさい」
「……はい？」
今、なんて……。理解するのに数秒を要して、
「はいいいいっ！」
叫んでいた。
「早くしなさい。服を着ていたら、手術なんてできんだろ」
正義のヒロインになれるという嬉しさで舞い上がっていた為、まったく想定することも忘れていた。
（お、男の人の部屋で、二人きりで、は、裸になるなんて……。で、でもフェニクスサンダーの言うことだし……）
自分を助けてくれたヒーローがエッチな気持ちになるはずなんてない。それに肉体の手術であれば、裸になるのは当然のことであろう。
「わ、分かりました。あの、でも……あまり、見ないで……」
「ん？　何を言う。よく見なければ、手術なんてできんぞ」
確かにそうだ。彼は真面目に、自分に期待して改造手術を行ってくれるのである。それを恥ずかしがっていては、失礼極まりない。
「こ、これも、正義の為……。では、脱ぎます」
大きく鼓動が鳴って、乳房が跳ね上がりそうだ。制服のボタンを外しただけで、羞恥で身体の内側から熱くなってくる。スカートを下ろして、ブラウスを脱いだ時には、濃厚に腋の下に汗を掻いてしまった。
（やだ……、私、こんなに汗ばんで……。じっと、見られてる）
憧れていたヒーローの視線がこんなにも性的なものに思えてしまう。自分だけが意識してしまっているかのように思えて、それが余計に恥ずかしくなった。
刹那戸惑って、下着に指先をかけた。ブラジャーを外した途端に、豊満な乳房はプルンと揺れ、柔肌は外気に晒される冷たさと視線の熱を感じていく。
たわわな尻房からショーツを脱ぐと、一層燃え上がるようなものが全身を包んできた。
「ほお……、よ、よし、脱いだな。では、そこに横になりたまえ」
「は、はい」
瑞々しく、着痩せしていた肉感的な身体を手術台へと横たえ、仰向けとなった。するとさっそく、両手首と両足首が革のベルトで拘束される。
「あ、あの、これは……」
「改造手術は苛烈を極める。身体を固定させるには、これしかないのだよ」
男性の前で、無防備に全裸を曝けだしている。これで恥ずかしがるなというのは無理な話であるが、そこは正義のヒロインになる為と納得させる。それに、
（はあ、ほ、本当に……、か、改造手術……されるんだわ。私が、正義のヒロインに……）
これからは自分の力で平和を守ることができる。その喜びが全てを凌駕していた。
微かに汗ばんだ肢体には、今、身に着けているものは何もない。釣鐘型の美しい形状をした肉果実は、柔らかく、でも張りを持って仰向けでも型崩れせず、緊張の呼吸に僅かな膨縮を見せている。乳首は可愛らしい桃色でありながら、ツンと突起したような円錐状だ。
下半身も剥き出しで、薄い漆黒の縮れ毛の合間からサーモンピンクの肉の裂け目が覗けている。そこから蒸れたような濃厚な牝の芳香が放たれ、脇の太股の内側も微かに湿気ているようであった。

著者近況　女体改造ですが、結構やり残したことが多かったですね。改造シーンもじっくり描きたかったのですが。いつか、長編で、またこのテーマをやってみたいものです。

「よし、準備は整った。あとは……」
見下ろしてくるフェニクスサンダーである中年男。その瞳は、正義のヒローのものでも、先程までの冴えない中年男のものでもなかった。どこか、いや、強烈な劣情の籠ったような濁りきった瞳であった。
「ひ……っ、あ、あの……。ひ、ひゃァァァアアっ！」
ビリビリビリ――ッ！
全身を高圧な電流が走り抜け、身体中が跳ね躍った。思考がバラバラにされていくようだ。それでも耐え難い苦痛は、夢に見たヒーローになれるという実感を苛烈に湧き立たせ、当たり前のように喜びに変わっていった。
失禁しながら、意識が遠のいていく。プツンとモニターのスイッチが消されたように、視界が消滅する直前、男の手に握られたスタンガンを見た。

＊

流れていくバスの車窓の風景を眺めながら翼はぼんやりと考える。
（私は……本当に改造されたのかしら？）
昨日はフェニクスサンダーのアパートで手術の途中で気を失い、目覚めた時には公園のベンチで眠っていたのだ。
全てが夢だったのか？　自宅でお風呂に入った時、全身をくまなく鏡に映してみたものの、特に変わったところは見当たらなかった。手術痕のようなものもなく、相変わらずの染み一つない艶やかな肌だが、ただ下腹部の内側からずっと熱が発せられているような感覚があった。
通学用のバスはゆっくりとブレーキがかけられて、停留場の一つに止まる。
プシュっと独特のドアの開く音がしたその直後、
「イキーっ、イキーっ」
真っ黒な全身スーツに身を包んだ怪しすぎる集団が入り込んできた。「地域住民の生活が第一な悪党」の戦闘員である。
「我々は、公営バスの高齢者無料制度廃止に、断固反対するものである」
上半身は蛸、下半身は人のそれである怪人が最後に乗り込んだ。
サラリーマンも学生も皆、顔を蒼白に強張らせた。
バスジャックされたのだ。
バスは怪人の指示で何故だか採掘場へとやってきた。その後ろをパトカーがつけてきて、TVの報道車も駆けつけてくる。
車内の人々は怯え、子供は泣きだし、母親が抱きしめている。会社に連絡しようとしたサラリーマンは携帯電話を取り上げられた。パンチパーマの男が声を荒らげようとしたが、怪人に睨まれて黙りこくった。
「よし、女、子供は解放してやる。外に出ろ」
翼は言われたままに従って、数人の女性と子供と共に、車外に出た。
（どうしよう……何とかしないと……）
彼らの主張が理解できないわけでもない。移動中も彼らは暴力的な行為はせず、むしろ泣いている子供をあやそうとしていた。もっとも、覆面を近づけただけで、余計に怖がらせていたが。
だが、こんなやり方は間違っている。
『翼……、聞こえるか、翼……』
その時、頭の中に覚えのある声が響いた。
――誰？――。
『私だ……。フェニクスサンダーだ。今こそ、変身の時』
――変身？　じゃあ、私は、やっぱり……。でも、バスにはまだ人質の人たちが――。
『それは問題ない。君が変身すれば、一気に解決するだろう。さあ、叫べ。変身の起動ワードとポーズは、既に君の脳内にインストールされている』
こくっと一度頷く翼。
心の高揚と共に、身体の中心から燃え上がるように熱くなってくる。
両手をクロスさせ、そこからゆっくりと大きく腕を回しながら叫ぶ。
「チェンジ！　アルティメット・B・I・T・C・H」
あれ？　どういう意味？
少女の周囲の空間が淡い桃色の空間に包まれる。制服も下着も、身に着けているものの全てが粒子となって散っていく。
（へ？　ちょ、ちょっと……、私、今、は、裸っ！　屋外のこんな場所で……、ひゃうっ、なんだか、とっても熱い）
肉体の中心、子宮が燃え上がるような熱を感じ、そこから力が溢れていくようだ。
裸体を取り巻く気に身を任せながら、鋭敏になっていく柔肌。胸元が違和感を覚えてきつく張ってくる。鼠蹊部に湧く甘美な膨張感に、
「はァっ、んっ、んん――っ」
勝手に唇が開いて、濡れた舌が突き出される。潤んだ瞳は、とろんと半開きで、頬は逆上せたように桜色に染まり、まるで秘め事のそれだ。
翼を取り巻いていた粒子の流れが収束していく。形を変えて彼女の肉体へと戻って包み込んだ。
「推参、フェニクスローゼ！　悪は根こそぎ仕置きます」
弾ける光の粒を中心に現れ出た美麗なヒロイン。
（ああ、凄い……、身体の中心から力が溢れてくるみたい。私、本当にヒローになったんだ）
絶望の闇に希望を照らし出す正義の執行者の登場シーンで、大人も童心に返って興奮を覚えるところであるが、周囲から滲み出るその興奮はどこか違っていた。
（あれ……、何か、変……かしら？……な……っ！）
髪にはリアルロボットのような角飾り。肩や、膝下のブーツはアーマーを思わせる格好のいいものである。だが、胸元から太股までを包むインナーはぴっちりと張り付いた肉体の流曲線な形

著者近刊　『お嬢様官能小説家　波戸笑』『マゾってはいけない変態女子寮』『美少女エクソシストの聖水？　むしろご褒美です！』『アブないシスターズ』『専属ツンメイド　調教されてあげるんだからっ！』『ナイトメアハンター愛瑠 夢魔狩りの乙女』　好評発売中！

状を浮かび上がらせるもので、しかも面積がやたら狭い。乳房を脇から半分だけ覆い、臍は剥き出し。腰のガードも肝心な部分が覗けてしまいそうに中心に切れ込んでいる。

「エロい……」

誰かがボソっと呟いた。

（何ですか、この格好はァっ！　そ、それに、私の身体……）

格好だけならまだ理解しましょう。悪の女幹部で、こんなのを見たことがある――気がする。自分は正義のヒロインであるが。

だが、元々豊満な方であった乳房が、更に異常に膨らみ、推定でJカップくらいにはなっているのだ。ラバーのような素材のインナーをやけに勃起した乳首が内から突き上げ、形状が露わになっている。丸みのある肉感的なお尻も普段より一回り大きくなっているようだ。

それよりも問題なのは股間部で、今はガードに隠されているが、どうにもこれまで感じたことのない違和感が強烈にある。

少女は真っ赤になり、今にも泣き叫びたくなるのを堪えた。ブルンと一度首を振った。

「あ、悪党ども、この正義のヒロイン、フェニクスローゼが、貴方たちの思い通りにはさせません！」

怪人を指さし、ピシッと決めたその時、全身がやけに汗ばんで、濃厚な女の香りが風に乗っていく。

（でも、人質がいるのに、どうしたら……。あ、あれ……？）

バスに乗っていた秘密結社の戦闘員らが、何かに誘われるようにふらふらと出てくるのであった。――これはいったい、どういうこと？

『よし、上手くいった。翼、いや、フェニクスローゼ、変身と同時に、お前の持っているフェロモンは何百倍にも膨れ上がるのだ。それによって、奴らは我慢できずに誘われて出てきたぞ。見ろ、周りの人たちを』

取り囲んだ警官らも、報道のスタッフも皆、股間があからさまに膨らんでいた。バスの中から、人質だった男性らも、涎を垂らしながらこちらを見ている。

「ヒ……っ、な、何で……。どういうことですか、これは！」

『落ち着け、これも作戦だ。悪の組織の連中は殆どが男だ。街中での戦闘や、今回のような人質をとられるケースも多々ある。そんな時、奴らの意識を自分の方だけに向けることができれば』

なるほどそういうことか。

「わ、分かりました。周りに被害を出すことなく、戦えるってことですね」

覆面の下にまるで瞳を血走らせたような戦闘員たちが迫ってくる。

一斉に、こちらの身体を狙って飛び込んでくる男たち。

「く……っ、このっ」

肌が空気の流れを敏感に覚え、さっと彼らの伸ばした手を腕を擦り抜けた。

（凄い、簡単に敵の動きが読める。これなら……）

繰り出す拳、大きく振り上げた脚部が戦闘員の首筋を捉え、数人を巻き込んで吹き飛ばす。

数分と経たずに、全身黒スーツの男らを地に伏させる新人ヒロイン。美しき清流のような動きに、誰もが見惚れるようであった。

「お、おのれ……、こ、こうなったら、俺様が、ぐへへ、相手だ」

蛸怪人と正面で対峙する。

＊

「ぐぇぇぇぇぇぇぇっ！」

ズガガガッ！　爆炎が大きく舞って、辺りに衝撃が散っていく。

土煙の中を一人の少女がゆっくりと歩きながら戻ってきた。

「おお、フェニクスローゼとかやらが、勝ったぞ。新たなスーパーヒロインの誕生だ」

報道の記者が興奮気味に声を漏らす。

（はぁ、はぁ、よ、よし、勝ったわ。でも、も、もう、ハァっ、ひゃんっ……、なんだか、身体中が、ピ、ピリピリして、歩けない……）

股間を両手で押さえるような仕草をしながら、その場にへたり込んだ。

「うっ……うはっ……、な、何？　身体中が、し、痺れて……、あそこが……やぁんっ、熱くて、堪んない」

子宮から燃えてしまうようで、全身は空気の流れにさえ、ビクビクと反応してしまうほど鋭敏になっている。

女の子の大事な部分をギュッと両手で押さえ付け、モジモジと腰が左右に振られてしまう。

ハァ、ハァ、んっ……はぁん……っ。

瞼を半分ほど下ろした表情で、甘ったるい吐息を漏らしていた。汗ばんだ爆乳が張りと柔らかさを誇示するようにプルンと揺れると、彼女から放たれる一層濃厚になった牝の淫気が、採掘場全体を包み込んでいった。

ゴクッと唾を飲み込むような音がそこらじゅうから聞こえてくる。

（な、何が起こっているの？　ダメ、酷く……エッチな気分になっちゃう。早く、も、戻らなくちゃ……。へ……っ!?）

気づくと、周りを黒スーツの戦闘員らに囲まれていた。まだ戦っていなかった者だけでなく、一度倒した者さえいる。

「も、もう、我慢できねえ。アンタがいけないんだ。そんなやらしい身体して」

「俺……、たまんねえよ。ほら、ゴシゴシ扱いてくれ」

ぴっちりした全身スーツの股間から、戦闘員らは、硬直した男性自身を取り出した。血管を浮き上がらせ、腫れあがったような亀頭の先端から、どろっとカウパーを滴らせている。次々と眼前に披露され、強烈な生々しい牡の匂いが鼻についてきた。

「ヒ……っ！　ちょ、ちょっと……、貴方たち……。い、いやっ……」

幼い頃、父親と一緒に入ったお風呂

で見たのがきっと最後だったと思う。今、眼前に突き付けられているのは、その時とは違う性行為への準備を整えたものだ。ようするに自分に対して、いやらしい気持ちをぶつけているのだ。

彼らの中で一番強い怪人を倒したヒロインに臆することなく、戦闘員らは腕を伸ばしてくる。

女の子の本能が恐怖を感じて、その場から逃げようとするが、

ビクっ！　汗ばんだ肉体は、ちょっと動くだけでも苛烈な刺激を受けて、甘く痺れたようになって動けなくなった。とうとう、ぬちゃっ、と秘裂の内側に湿りが走る。

「ひゃん……っ、い、いったい、これは……？」

『ああ、言い忘れたが、君の身体の感度は変身の時間に応じて増し、今はフェロモンと同じように何百倍にもなっている。なに、心配はいらん。奴らの目的はもはや君の肉体だけだから、殺されることはないだろう』

「え……っ？　ちょ、ちょっと……」

腰を地につけ、泣きそうに強張らせた表情のまま後退りする翼。

（お、犯される。……冗談じゃない。こ、こんな奴ら、け、蹴散らして……。きゃっ……、何っ！　今度は……）

ヌメヌメした触手が、両手と両脚に絡み付いていた。

ハッとして振り返る。驚愕に開いた瞳に映ったのは、先程倒したばかりの蛸怪人であった。

「そんな……。確かに、止めをさした感覚があったのに……」

やたら渋い声で怪人は言い放った。

「執念だよ。スケベ根性という名の！」

これが奴の言うスケベ根性のなせる業か、戦闘中よりもすっと力強く四肢を締めあげてくる。仰向け状態で持ち上げられ、丁度ブリッジしたような格好にさせられた。

「うそ……。ひゃァ……っ、ちょ、ちょっと……。いやァっ、こんな格好っ」

自由を奪われ、股間や腋の下も開かれるように拘束されると、羞恥に身体中から熱が発してしまう。特に腋の下は濃厚に汗を掻いて、そこから一層強く、牡を惹きつけてしまう芳香が発せられた。

「こ、こいつ、いい匂いしますぜ。蛸怪人様、もっと、締めつけてやってくださいよ」

触手が太股に巻き付き、舐め回されるような滑りを感じる。それはむっちりとした肉を絞り込み、その圧迫はきつく、だが、どこか甘美な疼きを齎してきた。

「へへ、俺は、このやたらでかいオッパイを……」

取り囲んだ戦闘員らの手が伸びてくる。いやらしく五指を広げた手で、むんず、と破裂しそうに膨らんだ胸果実を鷲掴みにされる。むにゅっと汗ばんだ指が、その姿を隠すほどに柔らかく乳肉に沈み込み、強烈な性感が艶肌の内側に染み込んできた。

薄いインナーに、発情してしまったかのようなツンと勃った乳首が浮き上がる。

「おほっ、旨そう。……ぺちょ」

「い……、いやっ、うう……」

マスクを半分上げた戦闘員が、ねちょねちょ濡れた舌先で舐め回してきた。気持ち悪い。嫌悪を露わにして眉を顰めた表情でそう思いながらも、素直な肉体には快感が流れ込んできてしまう。唾液がインナー越しに乳房を伝い落ちていく。

「ひや……っ、や、止めなさいっ……。こ、こんなことして……。ヒッ……、そ、そこっ……」

怪人たちの集団に混じって、一般人が紛れ込んでいた。TV報道のクルーである。カメラが向けられていた。ゾッと顔が蒼白になる。

（う、映されている？　い……いやァァァァァっ！）

必死になって逃れようとするが、身体を捻り動かすだけで、怪人の触手拘束は解かれない。むしろ、爆乳は激しく揺れ動き、自らその刺激に感じてしまっている。

「ご、ご覧ください、TVの前の皆さん。今、正義のヒロインは、ピンチに陥り、こ、こんな、おおっ！　オッパイッ、凄いことに……」

動き回ったことで、汗に蒸れた太股の内側に、何本もの手が這い回る。大樽のように膨張した爆乳にも、次々と男たちの手が伸びて、美しい釣鐘状が捏ねくり回され、猥褻に形状を変えられてしまった。

「お、お前、すげえスケベで、いい匂いするな……。ほら、一番濃厚なとこ、見せてくれよ」

恥ずかしく広げられた鼠蹊部に男の指先が這い寄っていく。ゾクゾクと悪寒と同時に、純粋な性感が混ざって、いやらしく嬲られているのだと、意識させられた。

「ダメ……、そ、そこは……。止めなさいっ、は、外したら……ただじゃ済まさないんだからっ！　いっ……嫌ァ――ッ！」

腰のガードは、思いの外、簡単に取り除かれる。

ギュッと瞳を閉じた。強い羞恥に身を震わせながら、敏感な鼠蹊部に外気を感じる。

途端に、辺りから、劣情が大いに籠った歓声が湧き起こった。

「うひょう、す、すげえ……」

「なんじゃ、こりゃあ……、こんなド変態なオ■ンコ……、初めて見たぜ」

「くあァっ、ありえねえ、牝臭さ、ぱねえ……」

空気の流れに感じ、じわじわとくすぐったさを感じるほど、一斉に集中した視線の熱に女陰が犯される。

微かに隆起した肉土手から、いやらしく食み出したサーモンピンクの花弁。僅かに肉厚で、ぐにゃぐにゃした形状は、生々しい猥褻物を主張し、ヌラヌラと全体が既に淫蜜に塗れていた。そ

れは漆黒の恥毛を張り付かせるほどで、男たちの眼前で、ねっとりと滴り、尻谷の方へと止めどなく流れていく。
まだ触れられてはいないが、彼らの卑下する言葉と視線だけでも、秘部は痺れてきてしまった。
「くううっ、み、見るなァっ！」
強烈に放たれる、湯気が立ちそうにムンと蒸れきった牝の粘膜の芳香。視聴者からの苦情も恐れず、カメラはその全てを収めた。
「ッ！　イヤァ――ッ！　映さないでぇっ……、こんな、は、破廉恥なの……」
「おおっ、やはり、正義のヒロインというのは、ふ、普通ではないのでしょうか？　こ、このクリ……」
人々の平和の為に無償の戦いに身を投じたというのに、守るべき相手から、より強く羞恥を煽られる。
（ダメ……。自分の決意を疑っては……。ど、どんな目に遭っても正義は貫かなきゃ）
鼻息を荒くするレポーターの視線が、どうしても股間の一番違和感のある部分に集中している気がする。
羞恥にぐっと閉じていた瞳を恐々とそっと開けてみると、次の瞬間、驚愕に大きくなった。
「な、何なの……、これ……」
自身の下腹部のありえない状態。普通の女の子ではないのだと強く主張するそれに、息が詰まりそうになる。
クリトリスの包皮を剥いた本体が、信じられないほど、それはまるで勃起した男性器のような大きさで、肥大化していたのだ。
（ど、どうして、私の……、こんなになっちゃってるの？）
ぬらぬらしたパールピンクで、ピクピクと脈動するそれは、どこよりも過敏に、空気や、視線を感じて、勝手に身悶えているようだった。
しばし愕然としてしまった後、
「はうっ……、やっ……乳首っ、抓っちゃ……。お尻っ、撫でまわさないで……。オッパイ、ダメ……っ、そんなに強く握られたら……」
全身を弄ばれる感触に反応して、肥大肉芽がピクっと痙攣を起こす。
「ハア、ハア、俺、我慢できなくなってきた」
男たちが目の前で、カウパーを滴らせる肉棒を扱きたて始めた。
ずばり言えば、翼は処女であった。こんな風に身体を他人に、触れられたことも、弄られたこともない。
あからさまな男の性行動を見せつけられ、驚愕に開いたままの瞳が閉じられない。
そして、
「ァひっ……っ！　そ、そこっ、責めちゃ……。クリトリスっ、嫌ァああっ！」
蛸の触手が肥大肉芽に巻き付いてきた。コツコツした吸盤が鋭敏な粘膜に吸い付き、締めつけながら擦られる。
「ヒイっ、ひやっ、ひゃああっ、だめ……っ、そんな、されたらっ……、くっ、狂うううううっ！」
ぷちゃっ、ずぢゅ、ずず……。
ただでさえ一番感じやすい部分が、今や数百倍の刺激になって、弄られる。吸盤が移動しながら吸い付き、強引に剥がされ、また吸着しながら蠢き擦られた。
「いっ！　ヒイっ……、刺激っ、きついいいッ……」
仰け反りながら、大きく唇を開き、唾液に煙った口内を見せる翼。身体中に溢れかえった性感に襲われ、脳内が強すぎる悦に満たされ、ふやけたような女陰から淫蜜が溢れかえってしまう。
「おほっ、狂ったように感じてやがる」
「見ろよ、マ■コ汁、こんなにダダ漏れさせて……、ド助平ぇ」
彼らの正直な感想は、自分を詰り、羞恥を煽ってくるようで、悔しさが込み上げてきた。だが、激烈にやってくる性感に、否定の言葉を上手く喋れない。
充血して膨らんでくる肉ビラ。その隙間の奥にヒクつく蜜壺から、止まることなく滲み出て、だらだらと地に落ちて、牝汁溜まりを作ってしまった。
「ダメ……だめぇ――っ、変になりゅううう……っ！」
激悦に翻弄される美少女を、下卑た笑いと共に男たちが劣情を濃厚に見つめている。
「ほらほら、イっちまいな。変態改造女。はあ、はあ、イったら、ご褒美にザーメンぶっかけてやんよ」
いきり立った肉棒が爆乳に、腋の下に、お腹に、太股に押し付けられた。全身が先走りの淫水に塗れさせられ、自身の汗と混じって光沢を増していく。
（ふ……ァ、あ……ぁ、な、何か……くる……、こ、これが、まさか……）
翼だって健全な肉体を持った女の子。時にはエッチな気分になることだってある。でも、こんな風に一直線に快楽が昇ってしまう衝動は初めてだ。
戸惑い、翻弄されながら、向けられているカメラを見つけて、眉根を寄せながら、必死で、込み上げてくるものを堪える。
（いやァっ、私、イク？　ダメっ、そんなとこ、テレビに映されちゃう）
吸盤触手が激しくクリトリスを扱きたててきた。乳首が痛いほどに突起し、蜜壺がヒクつく。
興奮を強めた戦闘員らは、衝動のままに爆乳が破裂するかというほど激しく揉みしだいてきた。その先端に吸い付かれ、時には歯を立て、噛み込んでくる。
「ヒぃ――ッ、敏感なとこっ、いやァっァ」
「こいつ、今にも気をやりそうだな。ほらほら、こいつでどうだ」
ピンっと指先で過敏な肉芽を弾かれた。
「きひっ！　やめっ……、ァヒ――ッ！」
開けた瞳から涙が散る。

「あははっ、ビクビクしやがる。おらァ、もっと……」
嗜虐を露わに、戦闘員らに剥かれたばかりの亀頭のような敏感なクリトリスが苛められた。肥大したそれは、また弾かれ、抓られ、とても痛いのに、それだけ気持ちよくなって、
「くはァ――っ、何も……考えられなくなっひゃうぅっ！　クリトリスっ、しゅごすぎて……っ、イ……っ、イク……っ、イッちゃうぅうううっ！」
ぬぢゅぢゅ――っ！
全身の孔が弛緩してしまうようで、ブリッジさせられている肉体は、更に仰け反るように痙攣を起こした。
プシャァ――ッ！
「キヒ――ィっ、見ひゃっ、らめぇえええっ！　れるぅうううっ、漏れひゃうぅっ！」
覗き込んでいた覆面に勢いよくおしっこを噴きかけてしまう。
ビクっ！　ビクビクっ！　腰を跳ね躍らせる改造ヒロイン。その姿に、男たちは一斉に欲望のままを振りかけていった。
どぷ！　どくん、どぴゅるぴゅる！
白く汚れた世界が見える。生温かい腐臭に全身が包まれながら、孤独なヒーローの運命と戦いの過酷さを身に染みて感じるのだった。

＊

散々蛸の触手に恥ずかしい格好をさせられ、男たちのザーメンを身体中に浴びせられたフェニクスローゼであったが、不幸中の幸いと言うべきか、純潔だけは守りとおしたのであった。
幸いであったのはそれだけではない。なんと、いい加減欲求を放ちきった悪の秘密結社の連中は、我に返ると自分たちのしたことに罪悪感を覚え、なんとその後警察に自首していったのだ。
『お手柄、フェニクスローゼ』という見出しの記事を翼は複雑な思いで読んだ。
学校の屋上で深い溜め息をつく翼。
「はあ」「はァああ」
同じタイミングで、どんよりとした溜め息をつく者がいる。
「理事長？」
「あ、ああ、これはこれは、えっと、鳳凰寺さんだったね」
隣にいたのは、学園理事長、大沢四朗。恰幅のいい中年男性の彼こそが、秘密結社「地域住民の生活が第一な悪党」の首領であることを翼は知る由もない。
「どうなさったのですか、こんな場所で？」
「いや、はは、上に立つ者というのは、色々と気苦労があるものですよ」
いつも温厚そうな笑顔で学生たちを見守っていてくれる大沢の寂しそうな表情に少しきゅんときてしまう。
「大沢理事長のような誰にでも慕われるような方でも、悩みはあるのですね」
苦笑いのようなものを浮かべる大沢。
「本当に慕われているのでしょうか。部下たちが次々と去っていくというのに」
「部下……？　先生方が、ですか？」
「あ、いえ、ちょっと違うのですよ。そ、そういう鳳凰寺さんは？」
「わ、私は……」
どんなことでも真面目に聞いてくれそうな理事長であるが、流石にこれは相談できない。
「まあ、言いづらいこともあるでしょう。ですがね、鳳凰寺さん、若いうちは大いに悩みなさい。失敗を恐れるよりも、まずは行動するのが大事なのですよ」
「理事長……、そ、そうですよね。ありがとうございます」
深々と頭を下げ、翼は屋上を去った。
「いい子じゃないか。まずは、行動……か。そうですね、私も……。やはり、あの男を呼ぶしかない」
可憐さと凛々しさを併せ持った美少女の後ろ姿を見つめながら、大沢はそう呟いた。

＊

怪人の出現をフェニクスサンダーから知らされて、翼は現場に急行する。
いつも見回りをしていた馴染みの商店街には人だかりができていて、まるで誰かの到着を待ちわびているかのようだった。
皆、自分を、フェニクスローゼを待っている。そう思うと、正義の心が漲る翼である。
怪人の占拠した空き地に到着する。そしてその漆黒のボディを見つけた途端、翼は迷うことなく変身した。
「お前はっ！　以前、ファニクスサンダーを追い詰めた……」
フンサイダーと対峙したフェニクスローゼ。戦闘の構えをとった彼女の膨張しきった重量感溢れる肉果実が、たぷん、たぷん、と揺れ、辺りで一斉にフラッシュがたかれた。
「ふん、待っていたぞ、フェニクスローゼ。今日は貴様の命日になると知れ。なにせ、この俺に貴様の最大の武器はきかん」
「私の最大の武器？」
しなやかな脚部から繰り出す必殺技のことか？　だが不敵な笑みを見せる敵の言葉を意識している余裕はない。なにせ時間が経つほどに肉体の感度は上がり、自分で立つこともできなくなってしまうのだから。
ここは、一気に決める。
「ブースト、スパイラル、キークッ！」
高く飛び上がったヒロイン。突き出した片足に螺旋の風が巻き、超高速の降下で敵に目掛けて飛び込んだ。
風圧で肉樽の爆乳が歪まされ、摩擦が鼠蹊部を焼いてくる。
（くはァっ、い、いつもより……なんか、きちゃう……っ。感度の上昇が早い。でも……）
キュィィィンッ！
お約束破りのしょっぱなでの必殺技が、漆黒のボディに突き刺さろうかというその時、
「あまい」

大きすぎる爆乳が視界を遮った一瞬、フンサイダーの身体が微かに横にそれる。それだけで十分だった。

ズドドド――ッ！

天を覆うほどに土煙を巻き上げて、空き地に巨大なクレーターが出来上がる。

「か、かわされた……。はうっ！」

よろよろと立ち上がろうとしたその時、全身を強烈な快感の刺激が駆け抜けた。

両膝をついて、フェニクスローゼは堪らず両手で股間を押さえる。

ぬちゃっ、前張りアーマーの脇から漏れ溢れ出ている発情の淫液。むっちりした太股の内側を幾筋も伝い、ねっとりと地へと落ちていった。

（いや……。もう、こんなに……）

全身から勝手に滲み出てしまう濃厚な牝の淫気は、すぐさま周囲の観衆らにも届き、彼らの股間を熱く膨らませる。口元を緩ませ、強烈な劣情の籠った瞳が、一斉に汗ばみだした肢体に注がれた。

「くっ……うう……、こ、このままじゃ、また……」

脳裏に浮かぶのは辱められる己の姿。正義のヒロインとしての意志はまだ失われず、キッときつく敵を睨み付ける。無傷のままのフンサイダーが冷徹な瞳を向けていた。だが、避けられた必殺技の反動は、そのまま自身に向かい、インナーの所々に亀裂が走っている。攻撃の際に発した熱で、ムンと汗の湯気を放つ胸元は、今にも壊れそうになっていた。

「な……、なるほど、それが貴様の最大奥義『誘惑』か。だが、クールな破壊者たる俺には、そんなものはきかん」

「ゆ、誘惑!? 私は、そんなこと……」

「黙れ！ この変態ヒロイン。神聖なる戦いを穢す牝豚に、今、悪の鉄槌を」

巨大な銃を構える怪人。その銃口は数十にも分裂し、ズガガガッ！ 衝撃弾が連射された。

「キャアァ――ッ！」

圧縮された空気の弾丸が胸元に襲いかかる。

改造された女体は、極限まで弾力を強化されていて、その肌を貫通することはない。だが、一発一発が脂質のたっぷりと詰まった果肉を掘るように深く減り込み、爆乳は乱雑に揺らされまくった。

（痛いっ！ 痛い痛い痛いっっ！ んっあァっ……、でも、ふぁ、はあ、なに？ オッパイっ……痛いのが、ふあっ、はァァァァ――ッ）

抉り込んでくる弾丸の雨。冷たい鉛のような感触が、過敏になっている性感帯に深く抉り込み、強烈な刺激は、痛覚のみならず、その激しさの分だけ異質な悦楽が湧いてしまう。

乳肉の奥まで揺さぶられ、捏ねくり回されているような感覚が秒間に何重にも脳髄にまで突き込んできた。

苦痛よりも、愉悦に浸るような表情を見せてしまうヒロイン。コリコリに痼って盛りきった乳首が弾かれたその時、

「イギィっ！ 胸のっ、深いとこから……、あっ、あ、あ、こ、込み上げてぇっ……」

胸元のインナーがズタズタになって弾け飛ぶ。剥き出しになって暴れ揺れまくる肉果から、どうしようもなく切ないものが、それは射精のように衝動を湧き上がらせ、

プシャ――ッ！

発情乳首からミルク混じりの粘液が潮噴いた。

「ふひゃァ……っ、狂おしいのっ、れ、れちゃうぅぅぅぅっ！」

刹那宙に浮いた女体が地へと叩きつけられる。ヒクヒクと虫の息のように全身を痙攣させながら、それでも翼の表情は、自然に唇を開き、そこから涎を漏らして、白目を剥きそうに瞳が上向いていた。

（な、何が……起こったの？ 私のオッパイ……）

だらしなく開いてしまった股間は、アーマーの脇からダラダラと牝汁を垂れ流し続ける。失神しそうに乱れた思考の中で、困惑だけが確かにあった。

「お、おい……、見たか？」

「ああ……、母乳？」

騒然とする周囲であるが、それは正義のヒロインが倒れたからではない。邪な情念の興味が渦巻いていた

彼女を攻撃したフンサイダーもまた呆けたように立ち尽くしている。彼は、自分の頬にまで飛んできた白い液体をそっと指で掬った。

「な、なんだ、これは……。まさか、ハア、ハア……」

憑り付かれたようになった彼に近づかれ、むずっと爆乳を根元から引き絞るようにきつく掴まれてしまった。

「はうぅっ！ や、やめ……、オッパイ……っ、千切れるぅ……ぅ」

肥大した乳房が破裂しそうに更に膨らんで、強烈な圧迫に唇をきつく結ぶ。脂汗を滲ませながら、耐える痛みの中から、甘美な毒が全身に回っていくようだ。

（い、痛いのに……、でも、身体中、酷く……疼いて……）

鼻息を荒くしながら、漆黒の怪人は、もう一方の指先を美少女の乳首に当てる。

「ここから、なんかヌルヌルしたのを滲ませてやがる。母乳じゃない……。こいつは……」

過敏な場所を刺激され、またビクンとヒロインの身体が痙攣した。そこはジンジンと熱く痺れ、今は普段のクリトリスよりも感じやすくなっている。そのうえ、意識するはずのない乳管が緩んでいくようで、奥からとろとろと流れていくものがあった。

「こいつは……マ■コ汁だ！ な、なんて変態な肉体……」

辺りに衝撃が走り、観衆がざわめきだす。

「ヒ……っ、そ、そんな……。だって、

グラマトンに捕まったアリオナ。
槍騎士たちと離された彼女は、
復讐の異端審問官によって、
痛みで感じるマゾ奴隷となり、

魔の仔を孕む！

イセリア英雄戦記

the Legend of the Icerya war

単行本
2巻
発売中！

第23話 女王、陥落

小説 NOVEL／二階堂安芸（にかいどうあき）
挿絵 ILLUSTRATION／牡丹（ぼたん）

転移魔法でグラマトン聖教会に送られた後、アリオナはエルスとドーラから引き離され、国の象徴でもある大聖堂へと連れてこられた。

しかし通されたのは、敷地の外れにある薄暗い塔の一室である。ベッドだけが置かれたあまりに簡素な部屋は、捕虜とはいえ一国の主に対するものとは思えない待遇だった。

（エルスとドーラは、そしてイセリアの国民たちは無事なのでしょうか？）

長年身体の中にあった子宮枷がないことに不安を憶える。

封印を破られたメイズからは魔物が暴れ出していることだろう。今すぐにでも国へ戻りたいが、塔の中には結界があり魔法を使おうとしても力を霧散させられてしまう。

かなり高い位置に付けられた採光窓から覗く曇天を見上げ、アリオナはひとりさまざまな思いを巡らせていた。

そこへようやくグラマトンに来て、初めての使者が現れた。

「お久しぶりです。アリオナ陛下」

くるぶしまで届くアッシュブロンドの髪と黒のシスター服の対比が美しい女性である。いつも目を細めて微笑んでいるような顔立ちと、体型がわかりにくいシスター服を着てもなおはっきりと存在を主張する爆乳は、包容力を感じさせる。

アリオナはその姿に見覚えがあった。

「あなたは……シフォン＝アビゲート」

確かめるようにその名を口にする。

「憶えていてくださったのですか、私のことを」

シフォンはかつてイセリアで第六騎士団長を務めたこともある騎士であった。またイセリア随一の爆乳の持ち主でもあった彼女は、フィオナ、セリーヌ、エルスをイセリアの三大美女と言うように、年齢の近いアリオナと合わせてイセリア美の二大巨星と呼ばれたこともある。

「グラマトンに身を寄せていたのですか？」

「ええ、さまざまな巡りあわせの末に聖女様に拾われまして、今は異端審問官の職をいただいています。偽りの正義を語るイセリア英雄公国。その女王たる貴女を私が裁いてあげましょう」

シフォンは僅かに口角を吊り上げる。

「偽りだなんて、そんなことは……」

「黙りなさい！」

シフォンはイセリアでは開いているところを見せたことがない目を見開いた。感情の昂りとともに特徴的な髪の毛がうねりを上げてまとまり、銀の鱗を持つ蛇へと変わっていく。シフォンに流れるメデューサの血を解放した姿である。琥珀色をした蛇の瞳がアリオナを見据える。

「イセリアは私に何をしました？　魔物の血が流れている。ただそれだけの理由で私と娘を追放したのですよ」

シフォン率いる第六騎士団は、独自の隊規のもと強い結束を誇る騎士団であったが、セリーヌの告発によりシフォンが行っていた不正が発覚したため騎士団は解散、彼女は国外に追放となった。

「それは違います。あなたに追放処分を下したのは混血だからではありません。あなたが騎士団で行っていたこと、それに原因があるのです」

敵意を正面から受け止め、アリオナは静かに見詰め返す。

シフォンが追放となったのは、魔物の血が混ざっていることだけが原因ではない。シフォンはクォーター・メドゥーサであり、すでに亡くなっている彼女の両親は、生涯一般のイセリア国民として平穏に暮らしていた。シフォンの場合はその力を積極的に利用していたことがいけなかった。彼女は率いていた第六騎士団に対し魔物の力を使った手段で性行為を行っており、それが魔物による支配と判断されたのだ。

「生まれ持った力を使って何が悪いのです？　努力で身につけた力と何の違いがあると言うのですか⁉　私は国を守るために尽くしていたのに！」

アリオナの言葉に耳を貸さず、シフォンは矢継ぎ早に言葉を重ねる。実際シフォンは軍務、裏の活動ともにとても勤勉であった。事が明るみに出た頃には第六騎士団の大半は彼女個人を信奉する私兵と化していた。

「そのような考えだからこそ、あなたをイセリアにとどめることができなかったのです」

シフォンとはこれ以上話しても平行線だろう。彼女は快楽によって人の心を歪めてしまうことを悪とは考えていないのだ。

自分の罪が理解できないが故に、シフォンにとって国外追放は理不尽極まる処分だった。騎士としての誇りを否定され、忠誠は怒りに変わった。

「行くあても国の後ろ盾もない旅路がどんなに過酷か、貴女にわかりますか？」

シフォンの目から涙が零れ出す。

「元々丈夫ではなかった娘は、長旅に耐えることができず病に倒れました。変えることのできない生まれのせいで！　いったいあの子に何の罪があったというの⁉」

シフォンは感情のまま泣き叫ぶ。子を思い涙を流すその姿は、魔物ではなくただ当たり前の母親のものであった。

「そうですか、お子さんが……」

アリオナは自分の決定によって子供が命を失ったと聞いてショックを受ける。これは女王としてではなくひとりの母親としての感覚だ。

もしシフォンが自分の非を認めれば、彼女自身も娘を死なせた原因のひとつになってしまう。シフォンは行き場のない悲しみを、イセリアを憎むことで自分を支えているのだろう。

そう思うと尚更シフォンとわかりあえないことが悲しい。

「私には、お詫びを言う資格もないのでしょうね……」

アリオナも子を持つ親として、娘を亡くす気持ちは痛いほどよくわかる。自分の身に起こるどんなことよりも辛いだろう。だがそこから目を背けてしまっては、何より子供が可哀そうだ。

「お前に何がわかる！　お前如きが哀れむな、メリアの魂が汚れる！」

激昂したシフォンは、胸ぐらを掴んで腕一本でアリオナを持ち上げる。

「自分の身に起こるどんなことより辛い？　そんな綺麗事、二度と吐けないようにしてあげますよ！」

「な、なぜ私の考えたことが……ぐ……こほっ、ごほ」

アリオナの気持ちを安易な同情と断じたシフォンは、腕に力を込め女王を締めつけていく。

「だけど考えたでしょう？　わかるんですよ。この私の邪眼に宿る『サトリ』の力には」

クォーターである彼女はメドゥーサとして有名な石化の能力とは別種の力を発現していた。相手の心を読む「サトリ」の邪眼はその一種である。

シフォンは叩きつけるようにアリオナを突き放す。

「きゃあっ!!」

ドレスが引き裂かれ、巨星と称された胸がまろび出る。十代の頃と変わらない張りと肌艶は、星のように今もなお魅力を放っている。

「本当なら母娘揃って身を引き裂いてあげたいところですが、貴女にはやってもらうことがあると法王聖下直々のお達しです」

シスター服を脱ぎ捨て、シフォンはボンデージに包まれた本性を露わにする。言葉の意味通りまさに拘束するという機能が全面に出た作りになっており、至るところに付けられたベルトや紐で身体をギチギチに締めつけている。細くくびれた腰まわりはより細くなり、イセリアに居た頃には国内随一と言われた爆乳をより強調していた。

「グラマトンの慈悲に感謝することですね」

そして灯りを吊るす台に縄を通しアリオナの両腕を縛り上げた。アリオナはかつての部下である異端審問官を見上げる。目の前に立つシフォンは憎しみで暗く濁った瞳でアリオナを見下ろしていた。

「このような行いをして、何が慈悲などと……きゃ、んんっ！」

アリオナの言葉を遮り、シフォンの頭から生える蛇が口の中に侵入した。

「んぐっ……っ、うぅん！　むっ、ぐぐ……」

口を閉じて抵抗するが文字通り歯が立たず、蛇は強引に侵入してくる。カサカサした鱗が口の中を這い回った。

（いや、出ていって、あ、いやぁ！）

蛇は突然の異物を押し返そうとした舌を、逆に獲物を捕らえるように搦め捕った。

「あぁ……がぁ、んぐぅ」

舌の根元を締めつけられ、独特の痛みが走る。それだけで口に力が入れられなくなってしまった。口の中を支配した蛇は口の先から何か液体を吐き出し始める。

（あぁ、今度はいったい、何？）

「んんっ……あ、ちゅ、ん、は……」

咽の奥に直接液体を注がれ思わずむせてしまうが、それよりも勢いよく液体が出てくる。吐き出すことを諦め、アリオナは溺れてしまわないよう必死に蛇の出す体液を嚥下していった。

「ごほっ……んはっ、ぢゅる、ぢゅりゅ、んっく」

濃厚な口づけを交わすような音が、淫らなことをしているような気持ちにさせる。

（何これ……身体が、熱く……疼いてくる）

気がつけば身体も火照って、意識が蕩けていった。

「苦しいでしょう、だいぶ飲みましたね。蛇の淫毒を」

口の中から蛇が引いていく。とろとろに濡れてた蛇が舌で自分の顔の周りを舐めている。

「くっ……げふげふっ、ん、淫毒？」

シフォンが騎士団に使っていたのがこの力であった。強力な媚薬というだけではなく、絶頂を迎える度に少しずつ思考力を奪うという危険極まりないものだ。常に興奮したまま理性の抑えが効かなくなり、度を超えて摂取すれば命令を聞くだけの人形のようにされてしまう。

「これから奴隷娼婦として魔物の子を孕むのに、相応しい身体にたっぷりと調教してあげますよ」

（私が奴隷娼婦に!?　また、子宮枷を抜かれた時のように……）

女として最低の扱いをするという言葉を聞いて、身体に戦慄が走った。スレアにメイズの中に放置され、子宮枷を抜き取られたことが脳裏を過る。

（あんな風に犯され続ける？　代わる代わる魔物相手に、魔物チンポが私の膣内に……）

しかし恐怖とは裏腹に、身体は長時間の陵辱による望まぬ快楽を思い出し蜜壺をいやらしく蠢動させた。

（はっ!?　私は何ということを）

一瞬でも期待してしまった自分を即座に否定する。

「なんて浅ましい。女王ともあろう者が犯されることを想像して気持ちよくなるなんて」

しかしメデューサの「サトリ」の邪眼はその心の動きを捉えていた。

「ち、違います。私はそんなこと、望んでなんか……」

「隠しても無駄です。この邪眼の『サトリ』の能力で陛下の心の中はすべてお見通しですから」

シフォンの視線がアリオナを冷たく射抜いている。

「まずは奴隷の立場をその身体に叩き込んであげますよ」

新たにもう一本縄を取り出して、シフォンはアリオナの背後に回る。そこから縄が回され、アリオナの豊乳を締

著者近況　今回イセリア英雄戦記を担当させていただくにあたり、直前の話までの本文や未公開の設定などを送っていただきました。連載途中から本誌を買い始めた私としては、単行本の発売を待つ事なく本編に追いつけた事が何よりの喜びです。

めつけた。鎖骨の辺りに縄が沈んでいく。柔肉の付け根が押しつけられ、双丘が釣られるように上を向いた。
「い、いや……やめて、ください」
縄が食い込む痛さは決して大きなものではない。むしろ身体に擦れるのがくすぐったく感じるほどだ。それよりも動きを制限する意味のない場所を縛る縄化粧という行為がアリオナの羞恥を煽る。
「うぅ、こんなの、見せないで」
鴇色の乳首がすっかり硬く尖っているのが嫌でも目に入る。子宮枷によって長年の間責められ続け、男好きのするように育った卑猥な身体が縄化粧によって強調されていた。
けれど手を縛られていては隠すこともできない。
「いい格好ですこと。いやらしく突き出した胸が縄に映えていますよ」
さらに縄が引っ張られた。今度は乳房の上を一周した縄が下乳を持ち上げる位置を締めつける。乳肉がぎゅっと根元まで絞られてより球形に近づいた。
「ふふふ、まるでボールでもぶら下げているようですね」
シフォンの左手がからかうように乳ボールを手のひらでたぷたぷと転がす。そして鷲掴みにして思いきり引っ張った。
「あぁ、い、痛い、くうぅ……」
白磁の肌に赤く指の跡が浮かぶ。圧迫されたせいで末端に血が集まり、アリオナの身体は普段よりも敏感になっていた。
「ん、はあぁ……っ、ぐあぁ……」
さらに縄がみしみしと締め上げていく。外側からは肌が擦られる痛み、内側からは乳果実がもぎ取られるような痛みが走る。
「ふふふ、縄が身体の上を這っていくと、はぁ……ゾクゾクして、たまらないでしょう？」
アリオナを責め立てるのと同時に、シフォンはガーターに挟んでいた鞭で自分の爆乳を締めつけていた。
「や、痛い……お願いです、おっぱい……千切れる、ぐうっ」
「すぐにその痛みが、快感に変わるようにしてあげますよ。女はこうやって支配され、服従させられる快楽には勝てないんです。んっ、はぁん」
イセリアに激しい復讐心を持つシフォンであるが、その性癖は真性のマゾなのである。痛みを与えるよりも痛めつけられるのを好み、特にきつく縛られることで安心と幸福感を得られるドMだ。彼女がその気になれば組織を内側から乗っ取れる能力を持ちながら騎士団長にとどまっていたのは、支配されることを望むドMの性癖によるところが大きい。
「あぁ……だ、だめ、本当に苦しい……んんっ」
始めは何でもなかった束縛も徐々にきつくなって、次第に呼吸が苦しくなってきた。頭の中に靄がかかったようになり、意識が遠のいていく。僅かに感じるのは自分を縛る縄の感触だけであった。
（頭が、真っ白になって……意識が飛んでしまう……）
ビシィという音が直接頭に響く。
「誰がいつ休んでいいと言いました？勝手に寝るんじゃありません」
意識が途切れる寸前鞭を打たれ、アリオナはまさしく叩き起こされた。
「あぁ、きゃあ！」
イセリアにいた頃から振るっているシフォンの鞭は、肌に余計な傷をつけずに痛みだけを与えてきた。
「あぁ、痛っ、うぃ……んぐ」
何度も執拗に鞭が打ちつけられる。
「やはりいきなり鞭を打ったところですぐには目覚めませんか……ここは彼女たちを使いましょう」
琥珀色の瞳が妖しく光る。
「来なさい」
すると扉の向こうからふたり組の女が現れた。尖った耳と頭の角がなければまるで人間と区別がつかない魔物、サキュバスである。
「お呼びですか、お姉様？」
「はーい、シフォン様、ただいま参上しましたー」
妖艶に微笑むシルクのようなロングヘアの少女と、手を上げて元気に登場したショートヘアの少女。まったく逆の印象を抱かせるふたりだがまだ十代の後半に見える顔立ちや、それとはアンバランスに発達した男好きのするムチムチとした肉感的な身体つきがとてもよく似ている。単に同一の種族であるだけでなく、血縁関係があるのかもしれない。
「いったい、何をしようというのです？」
サキュバスは男を惑わせる淫魔である。現に今も狭い部屋にふたりいるだけで、発情した牝の甘ったるいにおいが鼻につく。その全身で男に媚びているような雰囲気に、アリオナは思わず眉をひそめた。女であるアリオナを責めるのに適しているとは思えない。
「慌てなくても、たっぷりと教えてあげますよ。さあ、陛下の身体をたっぷりと可愛がってあげなさい」
「はーい」
「かしこまりましたわ」
身動きの取れないアリオナの身体にサキュバスのねっとりとした視線が這い回る。それだけで背中に悪寒が走った。全身が撫でられているように感じ鳥肌が立つ。
（見られているだけ、それも女同士なのに、なぜこんなにもぞくぞくしてしまうの？）
淫魔という存在が持つ雰囲気に部屋の中が支配されていた。その視線やなにげない動作のすべてが性的なもののように感じられる。
「いやらしい身体ですね、とっても美しいですわ」
「大きなおっぱいだなー。こんなのサキュバスにだってなかなかいないよ」
男の妄想を固めたような淫魔の目に

も、アリオナの身体はいやらしく映るらしい。
「……うぅ」
急に自分の身体がいけないもののように思えた。恥ずかしさのあまり顔から火が出そうなほど熱くなる。
「腕の縄は外してしまってもよろしいですか？」
「好きになさい」
腕の拘束が外されると、アリオナは床にへたり込んでしまった。サキュバスは捕食者の目で見下ろしている。
「射精すれば終わりの男と違って、サキュバスの責めはとっても濃厚ですのよ。陛下もぜひ堪能してください」
「や、やめなさい。女同士だなんて、そんな……」
胸の縄を引いてアリオナを足元までたぐり寄せると、シフォンは蛇の淫毒を垂らした。少しとろみのある粘液は乳首に辿り着くと、ねっとりと乳丘を流れていく。
「ひぁっ！　はぁ……ふ、いやぁ」
触れた瞬間は思わず背中が跳ねてしまうほど冷たいのに、すぐに身体の内側から熱くなってきた。淫毒は縄に堰き止められて、染み込ませながら液溜まりを作る。
「綺麗な身体ですわね。おっぱいも、私たちよりも大きい」
そこに長髪のサキュバスの手が伸ばされる。細くしなやかな指が手に収まりきらない爆乳の上を滑り、淫液を塗り広げていく。
「あぁ、だんだん、熱く……」
始めに少しひやっとした感覚があったが、肌に入り込んでいって熱くなってくる。
「素敵でしょう？　このローション、私たちサキュバスも骨抜きにしてしまうんですよ」
サキュバスは蕩けたような笑みを浮かべた。
アリオナは淫魔すら虜にしてしまうシフォンの淫毒に、改めて恐ろしさを感じる。
「一緒に気持ちよくなりましょう」
少女は正面から抱きついて、胸を押しつけてきた。むにゅうと四つの豊乳がお互いを押し潰す。みっちりと肉が詰まったような乳房は、膨らみかけの少女の若さを感じさせる。
「や、やぁ、乳首、擦れて……くっぅ」
水風船のような柔らかい感触が続く中、たまに硬くなった乳首同士がコリコリとぶつかって手や舌とは違うどこかもどかしい刺激が広がっていく。
「こっちも気持ちいーことしよう。はん、ちゅ……」
短髪のサキュバスは顔を自分のほうに向けさせ、唇を重ねてきた。瑞々しい唇が口を塞ぐ。無邪気な雰囲気があるこの少女も、淫魔だけあってキスがとても上手かった。混乱で固く閉ざしたアリオナの唇を、優しく啄むようにほぐしていく。
他の魔物に犯された時とは違い、見た目は美しい少女であるサキュバスたちに対しては生理的な嫌悪感が薄い。その代わりにある背徳感がアリオナの興奮をかき立てていった。
「んむっ、ちゅ……んんっ、はぁ……ん、ふぅ、むちゅぅ……」
唇を突かれぎこちなくそれに応えると、一気に舌が搦め捕られる。じゅぶじゅぶと唾液がお互いの口の中を行き来する音が響く。
（き、気持ちいい……キスだけでこんなに）
サキュバスたちの責めはいかに相手を昂らせるかということに特化していた。自分が気持ちよくなるための行為ではなく、相手を気持ちよくさせないと糧となる精が得られないからだ。その本能は女相手にも発揮され、アリオナは自分の娘ほどの少女たちのリードによって初心な少女のようにだんだんと身体を開かれていく。
（い、いやぁ……今、イカされたら……止まらなくなる）
何度も強制的な絶頂を経験した身体は、一度イッてしまうと歯止めが効かなくなってしまう。アリオナは歯を食い縛り必死に耐える。しかし身体は熱に浮かされるように絶頂へ向かって上り詰めていく。
「あぁ、イキそうなんですね陛下？　では、そろそろ鞭の味を覚えてもらいますよ」
再びアリオナの身体を鞭が襲う。
――バシィン！
「んんっ……痛っ、ひぃ……ぐぅ」
痛みによって絶え間ない快楽から引き戻される。
「ふふふ、これから絶頂しそうになったら鞭を打ちますからね」
ほとんど跡が残らないのに、叩かれた場所には痛さだけが長く残る。
「可哀そうに。すぐにここも気持ちいいと思わせてあげますわ」
痛みを感じる部分に淫毒をたっぷりと滴らせたサキュバスの細指が撫でた。
「大丈夫。貴女はただ素直に刺激を受け入ればいいんですわ」
そう言ってアリオナを押さえつけながら、鞭が打ちやすいように半身をずらす。
「こっちももっと気持ちよくしてあげるからねー」
先ほどまで唇を重ねていた短髪のサキュバスが、今度は耳にキスをしてきた。敏感な器官への慣れていない刺激に、始めはただ戸惑いを覚える。
「ひゃぁっ……いや、そんなところ、汚いぃ、あはぁ！」
しかしそれも、徐々に快感に変わっていく。
「いぃ……そ、そのくぼみのところ、くすぐったい……あ、はぁん」
耳穴の周りにある軟骨を舌が突いてきた。
「える、れろ、ちゅく、えろ」
いやらしい舌使いの音が直接聞こえてくる。もはやアリオナの耳は胸と同じ性感帯に開発されてしまった。
「あ、あっ、あぁ……ん、くううぅ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/